

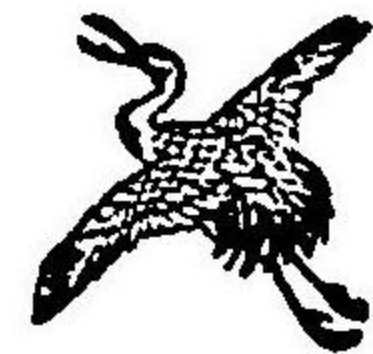
ともしも對手が男子なりせば此人も中々の親切者なれど誰に向つても果して皆  
 な此般の親切ありや、お富嬢は更月(さらつき)に親切を受け度ならず「イエ、清次郎さんの  
 お家でも静岡まで送らうと被仰るのを無理に断り申した位ですから」と謝絶  
 の冒頭を中途に通る小學教員能と雑談に紛らせて一緒に歩みつゝ、「時に清次郎  
 君の家でもあの娘は可哀想な事を仕ましたなあ、罪も無いあの淑女があんな死  
 様をするよ云ふのは老人達の罪でも無し又清次郎君の罪でも無し、畢竟するに  
 養子養父母と云ふ家族制度の罪でせう、我輩借々考ふるに我邦の家族制度は兎  
 角に權力の争ひがあつてそれがために和氣讓々(わきまやうやう)と行かん所が多い、中でも養子  
 制度と云ふのは全く封建時代の遺物で世襲の祿を失はざらん爲めに他人を養子  
 とし又他家の祿に衣食せん爲め他人の養子となつたのですが今日の社會には  
 随分道理に合はんものがあります、それが爲めに養子を貰つて甘く往々家は滅  
 多にあつせん、全賄人に子が無ければ是れ父母の權利が無いのです、自分に  
 天賦の權利が無いのに他人の子を貰つてそこで權利を造り出さうとするのは無  
 理でありませんか、人は子孫を繁殖せしめると云ふ義務があります、其の義務

を果してこそ親たるの權利も生ずるのですが子の無いものはその義務を果さな  
 い人達ですから從つて權利もありません、もし財産の始末に困るなら夫れこそ國  
 家の共公事業に寄附するが一番です、養子は随分人の家を潰しますが國家は無  
 益に人の財産を使ひません、又養子の方でも自分が勞力を以て資産を積まな  
 いで養父母の機嫌を取る位な事で他人の財産を譲り受けやうと云ふのも出の好  
 い話しです、尤も今の世間は爾ふ理屈賣めには参りませんし、また養子養父母  
 の關係も爾う云ふ事情から來たので無いものもあり、宛も骨肉の如く和氣洋々  
 として歎賞すべき程の者もありますけれども道理上養子制度と云ふものは随分  
 弊害があります、清次郎さんの家などは養父母も養子も家の娘も皆な善い人で  
 誰が悪いと云ふ事も無いのにあゝ云ふ不幸の起るのが全く養子制度の弊害から  
 來たのでせう」と誰やらの説を受賣したる養子論、年若き人達は突飛なる説を  
 好むの癖あり、お富嬢は聞くも慥し「妾は少し買物を致しますから御免を蒙り  
 ます、左様なら」と言捨てサッサと獨り横路へ曲り行く、此方はマサカ其處ま  
 でもと追ひ行く程の鐵面皮にあらず「ア、美人を天の一方に望むか、失望々々」

伊の江入巻

と立往生

日の出 高砂の巻終



日の山と

精井啓齋

住の江の巻

綱引

人の道連芥蠅きにも富娘は唯獨り直路を避けて濱傳ひ三保の松原の方へ進みしに前なる清水灣には外國の軍艦碇泊して端艇解舟の往き通ふさま斯る處に珍らしし、應て外國船の端艇數艘濱邊の方へ漕ぎ寄せしが濱には多勢の漁夫ども寄り聚ひ砂の上に長き帆網を曳き出して何かの用意に忙しき様子、お富娘は近寄て何事ぞと尋ねるに漁夫も女と見て言葉も優しく「ナニヤ、今英吉利軍艦の水夫と綱引が始まるのです、先刻あの軍艦の水夫が此の濱へ来て玉投げを仕たり競走を仕たりして遊びましたから私どもが側で見物して居ますと日本人は身勝手が小さいから力が無いだらう、何か力競べを仕て遊ばないかと云ひますので、  
 それでは綱引でも仕やう、日本人は小さくつても異人なんぞに負けるものかと

此方から十人向ふから十人出して此綱を引張り合ふのです、マア御見物して  
 いでなさい、今異人達を酷い目に逢はせて遣りますから」と初めより對手を  
 見送りたる意氣紐、お富嬢は與ある事に思ひ砂の上に立休らひて綱引の始まる  
 を待ちけるに外國船の端艇より立出でたる水兵は凡そ百人に餘れり、皆な是れ  
 頑強なる英國人種とて身の丈抜群に勝れ濱に在りける我國の漁夫達に比ぶれば  
 少年と大人ほどの相違あるに、真ありて其中より身仕度して顯はれたる撰手十  
 人、孰れも雲突く程の大男にて我國の相撲取も斯程の体格あるは寡しと思はる  
 るに此方の漁夫仲間より立出でたる撰手十人は擇りに擇りて背の矮き男のみ英  
 國の水兵は顔見合せて打笑ひ是れでは對手にも足るまじと輕蔑する襟子の見え  
 けるが懸て双方東西に立別れ太き綱を手に執りぬ、水兵の中に日本語を解する  
 ものあり、既に双方へ交渉し「一度の勝負では面白くないから負けた方へ段々  
 に人を殖して幾度も引合はう」と其心は日本人の方を五人も十人も増させん積  
 り、漁夫達も打笑ひ「爾うだそうだ、それが宜い、何でも異人が二人宛位かゝ  
 らなければ私等一人には協はないだらうよ」と何を頼みてか此方も非常の勢ひ

なり、見物せるお富嬢何んもなく掛念らしく「モシ／＼向ふはあんな大きな人  
 計りでも大丈夫でせうか」と先程の漁夫に問ふ、漁夫打笑ひ「大丈夫ですども、  
 異人達は身軀計り大きくつて腰がすはらないで弱いものですから誰が遣つても  
 負けやあ仕ません、それに私どもは子供の中から毎日／＼地引綱を挽いて居て  
 綱を引く力なら並の人の倍もありますのに今出た十人は私どもの仲間でも一掃  
 強みのです、あの連中は獨りで漁船を濱の上へ引揚げる様な者計りですから何  
 うしたつて負ける事はありません」と強きは是が爲めなりけり、お富嬢も安心  
 して願もしく覺えぬ、忽ち一聲の合圖と共に双方綱を引き始めけるが平生荒海  
 の中より鯨をも引揚げん程の勢ひある漁夫達に腰弱の英國人などがいかでか及  
 ぶべき、一引ひかれて大の男十人五六間も此方へ引寄せられぬ、勝を消したる  
 水兵達、踏み停らんとおせれども愈よ足の立場を失ひ中には見苦しく轉げ出す  
 ものあり、我邦の漁夫達は大得意「サア／＼連も十人位では對手にならない、  
 モー十人も出なさいと、水兵どもに交渉する、水兵達は殘念ながら最初の約  
 束に負き難く、それでは先づ一人を増さん、イヤ一人位ではと押問答の末三人

を増して試みけるが増したる甲斐もあらばこそ再び一引に引倒され、其次は五人、其次は八人と次第に増して遂に英國人二十人と日本人十人とが綱を引合ふ事になりけれども到底勝利は漁夫達の手に歸したり、英國水兵は唯茫然として呆れ居る、漁夫の一人進み出で「何うだ、綱引で勝はなければ相撲でも押ッ子でも何でも仕やう」と挑みけるに彼方は勇氣も消え失せけん「イヤモ、澤山だ、何うして此處の人は斯う強みだらう」と不審顔、漁夫も去るもの「イヤ、此に居る人達は兵隊にも出られない位だから弱いのだ、我邦の兵隊さんなんぞは私どもより倍も強い」と口も亦た英國人を吹き倒したんぬ、お富嬢は胸の痞の下りたる心地して「オー面白かつた」と立上る、側へ來りし英國水兵「モシ貴嬢軍艦見物にやいでなさい」と今度は綱を引かずに女を引く、

龍華寺

軍艦見物も興あれど旅には左せる暇も無しとお富嬢は爰を立出で三保の松原なと見物して再び少しく後に戻り、小學教員が救へたる不二見村の龍華寺へ赴きぬ、龍華寺は鼓爾たる古寺のみ、堂宇輪奐の美あるにあらず、本尊に特種の由

緒あるにあらねど庭前一望の好景は人をして天下の壯觀を感せしむ、地は沿岸の平野盡きて一小山脈の起らんとする間に在り、蓋し眼前の一大好景を眺むべき最良地點にして高きに失せず低きに過ぎず、左に三保の松原を望み前には清見瀨の海を隔て、富士の高根を仰ぎ看る、昔し名ある畫師が富士百景を寫して何處ぞ第一の眺めならんと浴く遠近を探りしに此の龍華寺の景に勝るもの無しとて富士百景の第一に置きしより騷人雅客には知る人ありて節を曳くもの多けれど、俗客は景中の赴きを知らず、却て龍華寺の庭内なる大蘇鐵と大霸王樹の名のみ高きこそ心無けれ、お富嬢は里人に道を聞きつゝ、龍華寺の境内に進み入りて何より先に富士の高根を眺めばやと眸を放ちて前面を見渡せば海を隔て、奥津田子の浦など畫の如くに見ゆれども白雲一帯長く其上に横はりて何處を山とも定め難し「惜しい事に雲が出て富士を隠して了つたがあの雲のある邊こそ丁度富士山が見えるのだらう」と折ふし境内に遊び居たる里の童に打向ひ「お山シ、お富士山はあの雲のある處かえ」里の童は此の景を我物顔に「お富士山なら彼處に見えらあ、ソラ雲の上に半分計り」と一指直ちに天半を指す、成程

見上ぐれば富士は高く雲を離れて澤々として半空に溜ひ出だせる如し、古歌に曰く心あてに見し白雲は霞にて思はぬ空に露る、富士の根とは斯る折の心なりけむ「成程マアよく見えること、雲の方計り見て居て頭の上には氣が付かなかつたよ」と今更に眺めの増したる心地、松の根方に腰打かけて立ちもやらず去りもやらず、風景を賞すると云はんよりも己れ先づ風景に酔ひたるが如く茫然として何事をも打忘れ天地の大觀唯我身の爲に開かれしかと思はれぬ、良ありて雲は次第に薄らぎ行き顯はれ來る遠翠は愛鷹山や箱根山、伊豆の山々も見えて來にけり、鏡の如き田子の浦、海まで裾を踏み延ばして富士の全身はまばゆき迄に顯はれぬ、富士の眺め多けれど斯程迄に全身を裾より嶺まで望む處は無し、原吉原の眺め名ありと云へど皆な是れ富士の裾野にして未だ富士の大なるを望むに足らず、富士を離れて富士を眺れば山勢直ちに海に趨りて沼津以西十餘里の沿岸は全く富士山の餘塊たり、優に高く天半を領して群山連岡を脚底に踏み据へたる有様は絶大絶高實に是れ東海の壯觀、天下の大景、風を遮り雲を呼び倏忽に雲れ倏忽に曇り時々刻々の變化も宛轉として極る處無し、今は流

雲全く消えぬ、眼中復た一點の汚塵だに無し「マア好く晴れたこと、富士の雲を脱がした様だ、モシくあの上方に薄い雲の襟なものが見えるのは矢つ張り雲になるのかえ」と話し對手は里の童、童といへど山の事を知れり「あれは雪だよ、お富士山の上にある雪が風に飛廻つて雲の様に見えるのだ、此は斯様に静だけれどもお山の上は風が酷い、些つとも雲が無い時で無けりやあの雪煙は見えないよ」と雲の煙の眺めこそ思ひも寄らぬ時の興、童は尙も親切に「和女さんは蘇鐵と霸王樹を見たかえ、大きいよ、來て見なさい」と自ら立ちて案内する、童に牽かれてお富嬢も境内を打めぐりしに蘇鐵の前に人の聲「中々大きなものだ、妙國寺の蘇鐵を除たら滅多にあるまい」と男の言葉に女の答「閉うさチー、ホントに美事だチー」と語り合ふ聲の聞き覚えあるにお富嬢進み寄りてその顔を覗れば先の日瀛車の中にて我身の物を拘り取りし男女なり、此方もハツと驚くに向ふの人々はお富嬢を見て流石に少しく色の變れり、お富嬢は刻下の思案、如何にせんか此の場合、

拘摸ども

盗人猛々しとは云ひながら遠くもわらぬ流車の中に我身の物を取り取りし男  
女が勝太くも此の邊に徘徊すること而憎けれ、引捕へて警官に渡さんか、イヤ  
イヤ向ふは二人、此方は一人、殊には女の身にて二人の盜賊を捕へん程の力も  
無し、警官に訴へんとするも斯る田舎に巡査さへ見當らず、これは愍な事な  
難しとお富嬢心に思案せしが左ればとて此儘に空しく立別れん事もなし難き  
合なり、先方の人達が如何にするか、先づその様子を見て兎も角も計らふ術あ  
らんと此方より別に口も利かず、默然として二人の顔を打語りしに彼方の男女  
は飽くまでも勝太く、お富嬢を女一人と侮りてや、心の驚きを押し隠して態ど  
空々しく前に進み「モシ貴嬢は先日流車の中で御一緒にになりましたか方ですな  
と男の度胸を極めたるに連れて女も心の落付きし如く「あの時は誠に失禮致し  
ました、今日は此邊を御見物にでもおいでいすか」とさも優し氣に言ひかくる  
愛嬌は誰が目にも拘摸など見ゆべくもあらず、お富嬢は態と嚴格に「ハイ爾  
うですが妾はあの時流車の中で拘摸に逢ひまして」と言ひつゝ二人の顔色の  
如何に動揺するかと窺ふに、彼方は既に動揺の過ぎ去りし事とて飽くまでも平

氣なり「それはマア飛んだ事で御座いました、そしてお取られなすつたものは  
分りませんでしたか」と此にいたりては女の方が男よりも尙ほ空々し、お富嬢  
「だま分りませんが警察官も毎度爾う云ふ事があるから是非引捕へて還ると申し  
て居ました、妾もそれやこれやで此の近所に永く逗留しまして」と試に對手を  
威して見たり、威されても彼方は平氣なる風に、今度は男が進み寄り、「貴嬢は  
是から何方の方へ、ハア久能へ廻つて静岡へお出ですか、私共も矢つ張りその  
積りですから丁度幸ひ御一緒に参りませう、のうお勝や」と女を顧るは無言の  
中に何か合圖のありと見えたり、女は其意を領しけん「キントニ丁度宜う御座  
いますチ、是非御一緒に参りませう」と此の二人はお富嬢を生捕にでもする  
最見か、お富嬢は氣味悪るし、小學教員の道連をさへ厭ひたる身の拘摸に同行  
せんは思ひも寄らず、去りながら此の二人、今我身と別れては忽ち警官に訴へ  
らるゝの恐れあるより態ど我身に同行して何か思案のありと見えたり、取られ  
しものは惜しからぬども斯る悪人どもを此儘に差置かば世の人多く難にかゝ  
ん、我身も二人を此儘には置き難し、二人も我身と此儘には別れ難からん、

しく途中で如何なる事に出逢へばとてその其時の運次第なり、行く處まで同行して彼方のなさん様を眺むべしと大膽に心を定め「爾うですネー、妾も獨りですからそれでは御一緒に参りませう、此から久能山までは餘程御座いませうか」男「二里位だと聞きましたが久能までブラ／＼歩いて足疲れたら彼處から車へでも乗りませう、斯う云ふ景色の好い處は車よりも歩く方が面白う御座います」と男の言葉に連れて調子を合はせる女「此から先も渡邊で景色が好い申します、急がずにソロ／＼参りませう」と三人打連れて龍華寺の門を出で久能山の方へと進み行きしが男は富嶽の前を歩み、女は嶽の後に附き添ひ、惣がもし逃げんとすれば前後より引捕へんとする用心ありと知られたり、

示談

彼方は何如なる思案のあるか知らねども富嶽は左程迄に恐怖の念も抱かず、時が夜中にて道に人跡絶えたる處ならば危険なれど今は晝中にもあり道にける來の人の絶ゆる事無く、殊には農家の閑時とて田舎の人の久能山へ参詣するもの引きも切らず、道の片側には漁戸點々として海には漁舟の浮べるあり、斯る

往來中にて彼等は我身に何事を仕出來ず事も叶ふまじ、此の拘摸ども如何に其身を處置するかと歩みながら油断せず二人の様子に氣を付けてありけるに男は道すがら雜談に紛らせて妙な事を語り初めぬ「モン失禮ですが貴嬢はお獨りで旅をなさるなら餘程氣を付けていらつしやいませ、涼車の中には随分拘摸なものが多く居て此頃は色々な事を遣りますから、それに物をお取られなすつても是が拘摸だなどと迂つかり人の事をお訴へなさるのは危険ですよ、拘摸なぞと云ふものは自分の悪い事を差し置いて中々人に仇を仕ますから迂つかりした事を言つて仇でもされると却て詰まりません、それよりも取つた人が分つたら極く内證で何うか取つたものを返して呉ろ、決して人には言はないからとでもお願みになれば随分時によつて取られたものが悉皆返るともありますし、また時が過ぎて其品が減つて居れば半分位返る事もありますよ、それをもし戻へでもすれば向ふはそれ／＼隠してあるのですから決して再び其品の出ない上に跡で仇でもされると二重の損になる様な譯です」と此男はそれとなく富嶽に示談を申込む積りを見ゆ、斯る場合には女の方が心積し「サントに爾うで御座いますよ、



物を取られた上に仇なんぞをされては馬鹿々々しく御座いますよ、妾共も以前  
爾う云ふ目に逢つてそれから内證で手を廻しましたら半分までとは行きません  
でしたが取られたもの、四半分ほど返つて来た事が御座います、貴嬢なんぞは  
取られなすつてからモ一日數も経つて居ますし、拘摸の方だつても使ふものは  
それく使つて了ひましたらうから半分なんぞと云ふ譯には参りますまいが假  
令ひ一品でも二品でも返つて来ればそれだけが得ですマキ、ホントに迂つかり  
した事を言つて拘摸なんぞを駈へると飛んでも無い目に逢ひますよ」と示談の  
相場を直切る量見、お富嬢は心中に扱こそ可笑しくなり、態と拘摸どもを  
らかふ積りにて「それも爾うで御座いますマキ、ですが拘摸の方に馴染もあり  
ませんから何處へ爾う言つて宜いか譯も分らず、それに此方が物を取られた上  
に拘摸の方へ頭を下げて何卒品物を返して呉れると言ふのも意氣地があります  
ん、拘摸の方から此方へ頭を下げて来て是だけお返し申すから何卒御勘辨を願  
ひますとでも言つて来れば復た其時の思案とありますけれども、何んば女獨り  
だつて爾うまで馬鹿にされると此方だつて腹が立ちますからマキ」とお富嬢の

判は中々強硬なり、男は意外に感ぜし如く「貴嬢は中々お強う御座いますマキ、  
それでは何れだけの品物を持つて来れば勘辨して遣るとか、品物の代りに何程  
の金子でも出したら大目に見て遣るとか云ふ大概のお積りでもありますか」と  
何處までも示談で濟ませる積り、お富嬢は言葉に力を入れて嚴格に言ひ放てり  
「い、取られたものは少しも惜しいと思ひませんから悉皆持つて来て返すと  
つても決して妾は受取りません」男は愈よ驚ける如く「夫では何處までも警察  
官に訴へて引捕へさせると被仰るのですか」と顔にも言葉にも幾分の凄味を帯  
び、足を停めてお富嬢の前に詰め寄する折しも往來の人前後に見えず、一方は  
松原、一方は海、

駐在所

お富嬢は冷然として答へたり「ハイそれは次第に依つて随分訴へも仕ます、巡  
査に密告けて縛らせも仕ます、自分の取られたものは惜しくないが悪人どもを  
其儘に捨置いては外の人が難儀を仕ますから人の爲めには黙つて居られませんが、  
假令ひ仇をされやうが意趣返しをされやうが爾んな事を恐がつて居ては悪人を

懲らしめる事は出来ません、取られたものを倍にして返すと言つてもその拘捕  
 どもが悪い事を止めないのなら、妾は世の人の爲めに訴へて還る積りです、殊  
 に自分が悪事を働きながら訴へたら仇をするぞと、イヤに人を威す様では逆も  
 改心して悪事を止める氣支がありませんから爾んな者はドシ／＼引捕へて懲役  
 にでも還るのが國の爲めです、其代り妾の取られたものを持つて来ないでも以  
 後は改心して悪事を止める、必ず眞人間になつて正路に就くと云ふのならその  
 性根を見届けた上で随分許して遣らん事もありませんけれど一旦悪い事を覺  
 えた者は逆も改心する事は六か敷いでせう」と此方も今は覺悟の上なり、もし  
 も此等が無禮をなさば、往來の人を呼び聚めても引捕へん程の意氣組にて二人の  
 男女を腕み詰める、男も女も俄に心安からぬ如し、其中に往來の人は幾度と無  
 く摺れ違ふ、お富嬢は態と家ある方に出でばやとて話しながらも足を停めぬば  
 男女も共に歩み来れども今更急に如何とも言ひ出し得ず、其内に久能山の下な  
 る根古屋の村に來かゝれり、續く家並、彼方の角に珍らしくも巡査の駐在所見  
 えぬ、お富嬢は愈よ心強し、二人の顔をながしめしめしめ返事をせよと言はぬ

計り、男は暫く思案せし未矢張り餘所事にぞらへて「貴嬢は唯のお娘子さん  
 だと思ひましたら實に何うも見上げた御氣象で御座いますな、その御氣象には  
 如何なる拘捕でも忍入りませう、然し拘捕なぞと云ふものも決して悪い事を好  
 いと思つて人の物を取るのではありますまい随分中には性來の悪人があつて死  
 ななければ直らんと云ふものもありません、殊に幾分の教育もあり、幾分の智識もあつて新工夫  
 の無いものはありません、殊に幾分の教育もあり、幾分の智識もあつて新工夫  
 の悪事でも働らく程の者は満更の馬鹿でもありません、幾分の智識もあつて新工夫  
 なかつたとか酒色に溺れて金につまりそれが爲めに悪い事を覺えたとか何れ最  
 初は出來心で段々慣れて來ると出來心が天竺の様になつて途には改心すべき機  
 會がありませんのでせう、全體世中に拘捕や盗賊ほどに合はない商賣は無い  
 ので、旨く人の物を取るところが大きく行つて千圓か二千圓、それで被捕れば  
 刑罰を受けなければならず、幸にして法網を脱れて居ても片時として心の安ら  
 かなる事は無く、夜も音がすれば巡査ではないかと思ひ、途中で人に逢  
 つても探偵ではないかと思ひ、氣をつける様な譯で世中に斯んな心配な、斯んな慮病

な、斯んな心細い商賣は無からうと思ひます。だから外に旨い事があつて生涯樂に暮らせる道でも就けば誰だつて再び悪い事を仕度くもありませんが、中々爾う云ふ旨い事は無し、よしやあつても舊惡のある身は何時露見すると云ふ心配が絶えませんから、心配して正直に稼ぐよりは寧ろ手短に遣つて了へと斯云ふ心になるのです。だから口先計りの改心なら死も角も真正に心を入れ換へて正業に就くのは六か敷い事ですが貴嬢の爾う云ふ御氣象を伺つては普通の拘摸ならいざ知らず、少しでも物の分る奴は再び悪い事も出来ずまい」と拘摸も亦た相應の氣象あり、折しも駐在所にありける巡査は一々鋭き眼にて道往く人を注視してありけるが今此の三人か向ふより此方へ来るを見て何か心に領きけん俄にマツと身を起しぬ、

久能山

巡査が行人を注視するよりも男女の拘摸は一層鋭く巡査の舉動に注意して居たるなり、今駐在所の巡査が身を起せし時男は屹と顔色を變へけるが富嬢は去りとも知らず、成らう事なら此の拘摸どもを感化せしめて一人にても世に善人

を殖さんと誠實の意を言葉に籠め「成程爾う聞いて見れば拘摸だつて性來の悪人計りもありますまいから改心する様な都合を仕て遣れば却て物つ役に立つかも知れませんが、全く心を改めて以來正業に就くと云ふなら随分妾どもだつて世話をして遣らん事もありませんが、全くの改心だか一時通れの虚言を云ふかそれを鑑定めるのが六か敷う御座います」と内心は向ふより改心の確跡を持ち出させ度しと思へるなり、男は促さるゝ迄も無し、早く覺悟は定めたり「イヤその改心の證據は自ら進で刑罰を受け一旦の惡業を水に流すより外にありません、モシ貴嬢、私共は此で御免を蒙ります」と俄に足を停めたり、不審がる富嬢「オヤ何うかなさいましたか」男「ハイ、何を隠しませう、その拘摸と申すのは私共夫婦の事で、私も舊は醫學書生までも致したものの、放蕩に身を持ち崩し、金に詰つた揚句の果が遂に悪心増長して斯んなものになつたのです、又妻と申しても性來の惡黨ではありません、私が仕事の手傳ひに段々仕込んだ女盜賊、今迄二人の共稼ぎ、随分悪い事も仕ましたが悪い事を仕たほど面白かつた事もありません、モシ惡業も好い加減にして機會があつたら身を固めやうと折々後

悔して見ても持つたが病ひで悪い事は止められず、其中に涼車の中で貴嬢の物を盗んでから詮議も段々厳しくなり、涼車の稼ぎも當分は出来ぬ故何處ぞ一忍んでぼりとばかりを冷まさうと清水や江尻で日を暮らし退屈紛れの名所見物、龍華寺でお目にかゝつた時は流石に私も驚きました、モ一モ一御異見に従つて悪い事は非つり止めますが今あの駐在所の巡査が私どもを見て何かゴタ／＼始めたのは近所の警察へ電報かけて私共の逃路を塞いだのです、モ一今頃は静岡の方にも江尻や清水へ出る道も巡査と探偵が固めて居て容易に逃る事は出来ません、無理に逃げれば此山を傳はつて逃げる工夫の無い事ありませんが丁度幸ひ年貫の收め時、此方から先へ自首して出て深く刑罰を受けませう、貴嬢の品物はまだ半分ほどありますから何れ御手に戻りませうが今迄飛んだ御迷惑計りかけました、サアお願、是から自首して出るのだぞ」と我妻を拉して駐在所へ名乗り出でぬ、お富嬢も哀れに思ひけるが自分の關係も通るべからずと駐在所に赴きて今迄の事を物語りぬ、その言ふ所は二人の中立に違ふ事無ければ巡査も二人の自首を悦べる様子、お富嬢はそれより近き邊りの茶屋に憩ひ、案内者を頼

みて名高き久能山に詣でたり、久能山は天險無双、宛も六枚折の屏風を海岸に立てたる如き地勢にて昔ならば屈強の要害、武田信玄が山本勘助に命じて最初に城を築かしめしより徳川氏に至りても墳墓の地となし、由井正雪謀叛の時此上に立籠りて天下の兵を引受けんとせし程の處なるに今は徳川家の靈廟もあり、山上の風景殊に勝れたれば參詣の人群をなし、數へ盡せぬ程の石段を登り行く有様、遠くより眺むれば宛も蟻の塔に蟻の上下する如し、お富嬢は戀て見物を終り、山を降りて麓の茶屋へ入らんとする時駐在所の前にて子供なごの打騒ぐ聲「ヤア泥棒がつかまつて今送られるのだ」乙「テ一ニ泥棒だとさ女も居らあ」とツイ／＼言つて覗き込む様子、忽ち駐在所より巡査と刑事巡査に伴はれて立出でたる先の男女、是より何地へか差立てらるゝならん、

去年の人

拘摸が差立てらるゝとて駐在所の前は見物人の垣をなせり、お富嬢も茶屋より立出でゝ人の後より覗きけるに側に獨り田舎者らしき男の氣樂そうに口を開いて彼方此方をキヨ／＼見廻はしつゝ、拘摸どもの去りし後忽ちお富嬢の顔を眺

め「ヤあ和女様は去年箱根の姥子に居さした娘さんだ子、此方へハア御見物にでも来さしたかえ」と聲をかけられて富嬢俄に想ひ出せる如く「爾う云へばあの時眠の療治を仕て居なすつたお人です子、和郎さんも久能山へ御参詣ですか」田舎者「ハア私等は今農事が閑だから村の衆と一緒に伊勢参りに出て来たよ、去年あの時は面白かつたつけ、あの足の悪い養生さんなんぞは何うしたえ、養生さんと云へばあの姥子の山で一緒になつた女の養生さん子、ソラ肥つたでつけないのよ、私等が海坊主の伯母さんと名をつけたあの化物よ、あの伯母さんに昨夕奥津の宿屋で一緒になつたけ」と聞いて富嬢珍らしくおもひ「オヤあの雲岳女史が何うして奥津あたりへ来たのだらう、一人ですか」田舎者「アニ親父さんと一緒に、それはく不相變面白いのなんのつて、あんでも話しの様子ではあの伯母さんの親父さんちうものがモ一娘も年頃になつたし、丁度宜い嫁入りも出来たから國へ連れて歸らうと自分で東京へ出て行つた爾うすると伯母さんの様子ちうものが亂暴で魂消つちまつたからあんでも早く連れて戻るべいと無理やりに引張つて来たよが親父さんはずつと國まで連れて行か

うと云ふし、あの伯母さんは道の序に名所古跡を見物して行かうちうだ、それも矢つ張り相不變の陳紛漢計り言ふもんだから親父さんに譯が分らぬいで何んなに面白かんべい、それで昨夕なんぞも大論判が始まつて私等はも蔭で縁に寝られなかつたがあんでも今日は清見寺を見物して今夜静岡へ泊るちう事だ、私等は随分色々なものを見たがあんな女は見事な事だ、去年箱根の湖水の中男の養生達と喧嘩を始めた時はお巡査さんさへ笑ひ出して船頭も舟を漕がずに見て居るだ、あの伯母さんがマア是から國へ歸つてお嫁に行くちう段になつたら何んな面白かんべい私等も聞があると随分行つて見物するけん」と此男も餘程物好きと見ゆ、お富嬢は話を聞きて可笑しくなり「あの様子では親達の驚いたのも無理は無い、妾も是から静岡へ行くのだが殊に依つたら向ふで逢ふかも知れない」田舎者「逢ふともく、あの伯母さんが居る處は一里先から銅鑼聲が聞えらあ、二階に居れば歩く度んびに二階中ミシリくど動き出すし、聲をすると障子や襖がペラくど外れるだあ、静岡へ行つたら田鼠に聞いて見さつせい、あの伯母さんの通つた處は一番先に田鼠が災難を喰ふだア

ハ、」と雲岳女史も此に至ればその勢ひ中々廣大なるものかな、お富嬢は何となく前路に興味のある如く覺え、逢ふか逢はぬか知れざれども雲岳女史の有様を餘所ながら眺めなば面白からんと心の先に急がるれば田舎者に暇を告げて此の處を立出づる、田舎者は名殘惜し、「モつと遊んで行かつせいよ、私等も迷がぬいとお山なんぞは見物しぬいで和女様と一緒に往くがなあ」來られて溜まるものかとお富嬢久能山下の道を出で、一路の春風靜岡へと赴きぬ、

砂糖菓子

靜岡停車場の前には各旅店より宿引の男ども店先に立ち出で派車より人の降る毎に有らん限りの大聲を揚げ「何館へ泊りでは御座いませんか」「何様をお尋ねでは御座いませんか」「何屋何兵衛は此方で御座い」と競ふて叫ぶも一種の奇觀なり、是は派車より降りしにあらぬと今久能山の方より此の道へ來かたりたるお富嬢、斯様の處へ雲岳女史を雇ふて怒鳴らせなば如何に面白からん可笑しき事を想像して旅亭の前を過ぎりしが何の道泊る身なれば此邊こそ好からめと足を停めて旅亭の躰裁など眺めつゝ中にて最も靜らしき家に入りぬ、店先よ

り宿引が「それお客様だよ」と聲掛くれば帳場でお辭儀をする白髪番頭「入りつしやいなしお速いお若さままで、コレや十二番へ御案内申しな」と櫻婢を呼んで客を誘はしむ、お富嬢は二階の小座敷に案内されたり、未だ外の座敷には客も多からぬ様子なれど隣室に人ありと見えて年老ひたる男の櫻婢に用事など頼み居る様子、良ありて裏梯子ミシリ／＼と鳴り出だし廊下も搖がんに計りの有様に隣室へ人の入りたる様子、忽ち彼方の廊下にて櫻婢どもの私語く聲聞えたり「チヨイトお鍋どんお聞きよ、今あの十一番に居る女のお客さんがお湯に入浴たら湯槽のお湯が半分減つて仕舞つたよ、随分大きな人だし、あの女が廊下を歩くと二階がユラ／＼と動く様だよ、お負けに肩を怒らせて風を截つて歩くから狭い廊下で行き逢ふと鼻息で吹き飛ばされさうだよ、全躰あれは向だらう」お鍋「あれは屹度女の關取だよ、此頃東京では色々珍らしいものが流行るそうだから女相撲と云ふのが出來てあの人が大關に違ひ無い」櫻婢「ナニニ爾うでは無い、あれは屹度女の壯士だよ、随分此節は女の壯士と云ふのがあつて此頃此方でもあつた様な選舉なんぞの時男の壯士の手傳ひをするのだよ、

その證據には女の癖に六か敷い漢語だの妙な洋語なんぞを使ふのだもの、先刻も妾が茶を持つて往つたら「チーは要らん、カツプ井ーとミルクとシユガアを貰ひ度い」と斯う云ふのさ、爾うしたら可笑しかつたのは側に居た阿父さんらしい人が魂を潰して何だえそれはと聞くど、是は白哲人種が食後の飲料なりと斯う云ふから阿父さんには尙ほ分らない、何だか知らないが爾んな六か敷いものは此にあるまいと云つたからそこで妾がチ、イ、エ西洋人も参りますから咖啡でも牛乳でも砂糖でも御座いますすが今直ぐは出来ません、チヨコレットなら直ぐでも御座いますと云つたら女はチヨコレットを知らない様子だつたが知つた風を仕て、チヨコレット尙ほ忍ぶべし、速に妾をして喫せしめよと云ふのだ、それから妾が態と溶かさないチヨコレットを持つて行つて追つたら湯で溶かす事を知らないからそのまゝガリ／＼嚙り始めて阿父さんにも喰べさせて何と云ふかと思ふど是れは西洋の砂糖菓子だどさ、オホ、今度用があつたら和女が往つて御覽、餘つ程可らしいの何のつて」と噂を聞けば問ふまでも無し、雲岳女史が父と共に隣室に居ると知られたり、お富嬢は可笑しさを堪え欲

の隙よりそつと覗けば成程雲岳先生八疊間の中央に處狭しとふん坐り、所謂の西洋菓子なるものを口一杯に頬ばりて片手に新聞を眺め居る、父なる老人は律義らしき田舎者、類に手帳へ何事か記し居るは道中の入用を明細に記入すると見えたり、聽て雲岳先生呼鈴を叩へて人を呼びぬ、出で来る櫻婢「お召しになりましたか」雲岳女史「オ、妾は晚餐を貰ひ度い」

新 躰 詩

雲岳女史の注文なる晚餐は忽ちにして出で来れり、膳に向つて傲然と箸を執る雲岳女史、宛も巨鯨の鰭を呑む勢ひにて倏忽の間に膳の上を空うし「此の乾魚は風味甚だ貧すべし、尙ほ數枚を貰ひ度い」と魚を食して骨を遺さず、父なる老人が「乾魚では無い、それは名代の興津鯛だ」雲岳女史「興津鯛と雖も乾したる魚なれば是れ乾魚なり、此類の乾魚十五六枚を喫するにあらざれば以て口腹を充たすに足らず」老人「大變な事を云ふ、一枚十五錢も二十錢もするものだ、一度に十五六枚も食べられて溜まるものか、和女は女の癖に大食だの、お縁に往つて爾んなだどお頼さんが膽を潰すだらう」雲岳女史「イヤ日本の食物

は滋養分が少いから分量を多くせざれば身軀の營養にならず、身軀脆弱なれば壯健なる子女を生む事能はず、妾嫁すれば良人に勤めて先づ乳牛一頭を購はしめ妾は毎日牛の乳一升に牛肉三斤宛位を食し度い、是れ求婚の男子に提出すべき第一の條件であります」老人「何うも仕様が無いの、櫻婢さん此子は東京で書生を仕たものだから何かい發澤になつて困りますよ」と櫻婢の手前も愧かしき様子、櫻婢は返事も如才無し「オヤ東京で御勉強を、爾うですか、それは結構で御座いますよ、東京では矢つ張り學校にでも」老人「ハア學校にも居たさうですが」と娘を振り返り「和女はソヒソ學校の名を知らせてよこした事が無いが東京では何と云ふ學校へ通つたのだえ」斯く問はれて雲岳女史少々閉口の氣味「イヤ學校と雖も一つ處には逡滯せず、あらゆる女學校に往つて教授法の良否、教員の賢愚、器具調度の完全するや否や、建築法の果して衛生法に適ふや否やを審査して見たれど一として完全の資格を具へたるもの無し、此に於て妾大に女子教育の振はざるを慨歎し、個人の教育家を訪問してその意見を叩くに皆な是れ蠢々たる鼠輩以て妾の師となすに足らず、止むを得ず獨學と決して雲

夜に机を拂ひ燈光を聚めて書を繕くなど百折不撓の精神を以て漸く今日あるを致したので」老人「何だか些つとも分らない、それでは色々の學校へ往たど云ふのだよ、爾うして何ういふ事を感じて來たのだえ」雲岳女史「學び得たるは百科の學、和漢に通じ泰西に亘り、古今東西の真理を究めて天地間の事一として知らざるは無し」老人「では裁縫なんぞも覚えたらうよ」雲岳「衣を裁するに仕立屋の業務、社會は分業に進むを御存知ありませんか」老人「知らない」と云ふのかえ、困つたよ、茶の湯なんぞは習古したかえ」雲岳「茶の湯如きは野蠻の遺物、文明の女子が學ぶべきもので無い」老人「それでは習字でも稽古したかえ」雲岳「書は姓名を記するに足る、必要があれば書記を雇ふ計り」老人「だから和女の手紙は何時でも西洋紙へ鉛筆で計り書くのだよ、此頃國の方ではよく女に書を習せるが和女は書でも描けるかえ」雲岳「丹青の事は妾の好まざる所」老人「それでは何が出来るのだえ、歌でも詠む事を感じたか」雲岳「野蠻的の歌即ち三十一文字の歌などは日新の社會に必要が無い、妾の詠む所は文明流の新詩歌即ち美文中の最美なるもの、神韻標渺として人間界の品性を



高からしむる力あり先づ耳を澄まして聞給へ、昨夜奥津の明月を詠じて斯くな

奥津の海に月が出て、光は波を遣つて行く、その光景は天人が、虎列刺病  
に取つかれ、雲の上から海面へ、吐いて下したまろかねの、へどを流すと  
見ゆるなり、白帆を揚げて行く舟は、そのパチルスと見ゆるなり、今や生

死もえろかねの、光は波を遣つて行く、  
と如何です、譬喩斬新にして落想奇警でせう、斯ういふ穿つたもので無ければ  
審美學上の原則に適ひません」と雲岳先生大氣焔を吐く時樓婢は膳を片付けて  
サツサと出で、行く、老人は固より詩歌の消息を知らず「ハアそれが巧いのか  
なあ」と感歎の様子、隣室に隠き居たる高富嬢、可笑しさに噴き出さんとする  
を三つと耐ゆる苦しき、

妾の威嚴

老人は己れが社會の事を知らざるの悲しさに我が娘の果して如何なる學力あり  
如何なる種類の人物となれるやを察し難し、唯憂ふる所は斯る様子にて嫁入口

の調ふや否や覺束無しと「そこでのう、和女によく言つて置かなければならな  
いのは國へ歸つても爾んな様子をして六か敷い事計り言つて居ると村の人が勝  
を潰して交際ふ人も無くなつて了ふよ、今度の話しなんぞは願つても出來ない  
様な有難い事で、和田の源吉さんはあの通りの大家ではあるし、御自分も評判  
の好い男でありながら和女の様なものを嫁に貰ひ度いと被仰るのは全く御自分  
が今迄坊さん育ちで學問も何も御存知なかつたところへ今度村會議員に選ば  
れなすつたけれども字が讀めないで愧をかいたと云ふ事だ、そこで何うか女は  
悪くとも學問のある女房を持つて是から自分が勉強し度い、丁度和老の娘は久  
しく東京に出て修業して居ると云ふ事だが彼を嫁に呉れないかと斯う被仰るの  
さ、此方も有難い事だけれども娘はあの通り不練致ですからと断つたらイヤ決  
して練致を望まない、和老の娘は子供の時分顔を見て知つて居るがボチヤヤ  
して可愛らしかつた大層御最負になすつて下さるから、マア兎も角も東京へ  
行つて連れて歸りませう、其上で如何様にも御相談を致しますと爾う言つて出て  
来た娘な言だが、あの下宿屋に男の番生達と一緒になつてゴロ／＼して居る様

子を見たら源吉さんだつて愛蔵が盡きたらう、それに子供の時はモット可  
 愛らしい所もあつてモット女らしく見えただが何うして斯んなに變つたのだらう、  
 矢つ張り土地が變ると鼻が低くなつたり頬が隠れたりするものか知らん、  
 何程源吉を望まないと言つても源吉さんだつて愛蔵を見たら何と云ひなさるか  
 知れない、それに頭髪は妙な束髪とやらで肩が爾んなに縮つて居ては少しも女  
 らしい所が無い、國へ歸つたらせめて襟子でも少し纏へるが宜い」と親の慈目  
 にも好しとは見えず、雲岳女史セ、ら笑ひ「決して愛ひ給ふな、妾は未來の總  
 理大臣ならでは眞人に持たぬ決心であつたが源吉子の志願し難く、妾には有名  
 なる資産家でもあり、果して彼が文明の貴女を遇すべき親縁を知るならば試  
 の爲めに當分嫁して見ても悪く無いと心得るが、固より先方から求婚して來た  
 もの故、諾否の權我に在り、假令承諾するまでも成るだけ宜くしく成るだけ  
 容赦ぶつて此方の威風を示さなければなりません、此方々難有がるは  
 な風を見せては却て肺肝を覗透されるなり、國へ歸つても決して此方から源吉  
 を望むなぞと言つてはなりません」老人「爾う利女の襟に威風つては始末にな

らん、今度の事が出来なければ二度と再び爾う云ふ口の出て來る事は無い、兎  
 も角も早く歸つて此事を極めない内は不安心だから明日早く歸らうよ」雲岳女  
 史「イヤ左様に急いで歸ると妾も妾が嫁に往き度いと思はれるのも残念至極、  
 明日は新聞見物でも仕て緩々歸るのが策の得たるもの、爾して歸る時には先へ  
 電報を掛けて村の者に歓迎の用意でもさせなければなりません、旅を拵へたり、  
 人力車を用意したり、歓迎委員でも選舉して舞坂の停車場まで來るには餘程時  
 間もかゝる、餘り急に歸つて村の者に狼狽させるのも氣の毒の至り、定めて當  
 日は停車場の近所も整理する事でありませう」老人「何を言ふのだ馬鹿々々し  
 い、誰か迎ひに來る奴があるものか、利女は爾んな爾子で村の衆なぞに無禮を  
 してはなりませんよ」雲岳「イヤ妾が歸れば文明流に舞坂を離化する」と父子  
 の談話斷なる時、あ富藏の部屋へ源吉の來りければ源吉は食事を許ませてそれよ  
 り入浴に赴きけるが歸りおけた雲岳女史の部屋の前を過ぎぬ、障子の硝子より  
 早くも顔を窺はたる雲岳女史「ヤア是は珍らしい、あ富藏」と障子を開きて矢  
 引張り怒みぬ、

我が朋友

雲岳女史の大力に引込まれて富に迷ぐる事叶はず其儘座敷に入りけるに女史は先づ富嬢を我が父に紹介し「是は妾が金蘭の朋友で」と告げたり、老人は富嬢の風采氣高くして清らけきに尊敬の念を起し「これは、私が是の父で御座います、誠にハヤ娘が色々世話様になりまして」と感歎に挨拶し「和女も斯う云ふ方をお友達にする様では見上げたものだ、矢つ張り一緒の學校にでもお在なすつたのかえ」雲岳「イヤ湯島の下宿屋で暫く同棲してそれから箱根山でも御一緒に帰り来永く追隨徴逐したので」老人は意外に思ひし如く「ハア矢つ張り斯ういふ方でもあんな下宿屋に被在るのか、定めし娘が御厄介計りかけましてせう、ホンにお美しいと申さうかおまどやかと申さうか、斯う云ふ方をお友達に持つと云ふのは和女も矢つ張り東京に居たお蔭だのう」と雲岳女史は富嬢に藉つて忽ち幾分の價值を生ぜり、女史も益々富嬢を利用せんと「君は何うして此に、以前から御滞留ですか」富嬢「イヤ、先刻此へおきました計りです、實は神戸へ歸る序に途中の名所古跡を見物しやうと

今日は久能山の方から参りました」老人は再び意外「ではお連でも有らつしやいまして、ナニお獨りですと、貴嬢も獨りで神戸までお歸りなさるのでですか」と非常に驚きし様子なるを雲岳女史此なりと「イヤ怪み給ふな、文明の女子は千里を獨行する、西洋婦人などは獨りで世界中を漫遊するではありませんか」老人「ハア爾うか、昔の者などは迎も真似の出来ない事だ、娘も東京へ出してから大層お轉婆になつて困ると思ひましたが今のお方はホントにお強う御座います、それも涼車ですつといらつしやるなら兎も角も、久能山へお廻りになるのも矢つ張りお獨りで、へ一成程恐入つたもので」と次第に娘の方の風が善くなる、雲岳女史愈よ得意なり「そこで君も是から静岡見物でもなさるのでですか」富嬢「ハイ静岡を一日見物しまして、それから濱名の湖水が大層好い景色だと申しますから彼方へ往つて見ませうと思ひます」雲岳女史「夫は妙、夫は實に好機會、丁度妾の家は濱名湖畔にあり、舞坂停車場を距ること數里にして村を大橋と名づく、風景は湖畔第一の勝地、是非とも妾が家に滞留して緩々湖上の風色を賞翫し給へ、決して遠慮するに及ばず、妾の家を我が家と

思ふて一年でも二年でも淹留し給へ」と娘に連れて老人はさる斯る人を伴ひ行かんことこの嬉しそうちに「それはホントに好い折で御座ひますから、何でも彼でも私どもへいらしつて戴きませう、イ、エ、御遠慮なさるところではありません、御迷惑でも御座いませうが私どもの方から申しますので、貴嬢の様な方をお連れ申しますと私どもの冥利にもなりませんし、それに斯ういふ方が娘のお友達だと申せば娘までも鼻が高くなります、その代り田舎の事でも構ひ申す事も出来ませんし、家も何も不潔う御座いますから無御座で御座いませうけれども何卒娘の交際だと思し召して半年でも一年でも遊びなすつて下さい、何卒是非願ひ申しますから」と蒲腔の熱心にて勧め立てる、お富嬢が未だ何とも答へざるに雲岳女史「無論爾うと極め給へ、假令ひ厭だと思つても妾が決して放しませんよ、第一朋友が濱名湖を見物すると云ふのに友誼上として妾が之を坐視傍觀する事あるべけんや、妾が君を出發せしむるまでは君は妾の家人たり、明日は共に此邊を遊覽して明後日國へ御同伴申さう、妾も東京を辭し去つては左右皆な是れ無智の田舎漢、敢て共に議論を上下すべき者も無き

に此で君に逢つたのは是れ天妾の志を憐むなり、ア、天の神よ、我汝に謝すとお富嬢は遂に雲岳女史に生捕られ了んぬ、

小買物

其翌日お富嬢は雲岳女史親子と共に旅亭を出で、先づ淺間神社に詣で、それより腹機山に登りて眺めに飽かぬ風色を賞し、山を降りて大岩の臨濟寺に寶物を參觀し、駿府の城趾、市中の有様な限無く見物したりけるが今や三人歸途に就かんとする時老人は立留まりて雲岳女史に向ひ「時に和女は別に此で買物を仕て行く事は無いかえ、婚禮の品物は大概東京で買つて國へ廻したけれども針箱だの鏡臺だのと云ふものは静岡の細工が一番だから此で買ふ積りに仕て置いた、尤も源吉さんの言ひなざるには決して支度なぞをするには及ばん若のみ着のまゝで貰ひ度いと被仰るけれどもマサカ裸躰でも遣られないから些つとは支度も仕なければならぬ、和女も買ふものがあるなら此より外に三好い物が無いからちよい／＼したものは此で買が宜い」と心を注げて兩側の商店を眺め行く、雲岳女史は妾の嫁するに何ぞ支度を要せんとも言ふかと思ひの外、

自分でも内々は支度を仕度き事のありけん。ツカ／＼と小間物屋の店に立入り「コラ小僧ども、妾にハクフンを呉れ」小僧「へい何で御座いますか爾んものは手前どもに御座いません」雲岳「分らん奴だな、白粉とは俗に申すおしろいの事だ、最も上等なる品質精良のものを呉れ、一度用ゆれば一年も二年も顔の色が褪めん程のものはないか」小僧「爾んな調法なものはまだ出来ませんが、貴客があつけなさるのですかッ、」雲岳「コラ失敬な、何を笑ふ、怪しからん者どもだ、白粉を施すにはクワペツが要るな」小僧「へ」雲岳「即ち花袋と申す白粉下だ」小僧「エヘ、一、貴客があつけなさいますなら先づ最初に荒壁を塗つて、それから布海苔と胡粉でも混ぜなすつて」雲岳「何を申す、人を馬鹿にして、白粉と花袋を五圓宛購求せん、それから胭脂は無いか」小僧「へい、何の事で御座います」雲岳「胭脂とは俗に申す紅の事だ、ナニ紅なら上等のがあるぞ、それも五圓程貰ひ度い」後から老人が「コレ／＼白粉や紅を五圓も十圓も買つて何うするのだ、何で嫁に行くと言つたつて」雲岳「叱つ、其事は秘密々々、コラ小僧ども、妾が白粉や胭脂を購求するのは何の爲めだと心得

る」小僧「へい丹波國へお嫁にでもいらつしやるので」雲岳「何だと、人を驚だと思つて居る、妾が之を購求するのは化学上の試験に供するのだ」小僧「黒い顔が白い顔に變色するか何うかつて」雲岳「咄、小僧輩は貴婦人に對する禮義を知らん、品物は旅店まで届けて呉れ」と小間物店を立出づれば前に在りける書籍店、雲岳女史肩怒らせて店頭の小冊を眺み付け「コラ何か珍書はないか、天下無類の奇書は無いか」主人「へい一大奇書と云ふのが此に御座います」雲岳女史手に執りて「ナニ、顔の色を白くする法、醜い女を美しく見せる法と、是は屈強、是を一部購求せん」と書籍を購ひて今度は木具屋に入り父があれよこれよと針箱など擇び居る内に自分は鏡臺を前に出ださしめ「コラ此の鏡臺は凹凸窪窪があつて人の顔を伸縮するな」番頭「それはお廉い方の口で、此の上等のは大丈夫で御座います」雲岳「ナニ是か、是も未だ天眞を寫さぬ、人の顔を悪く見せるではないか」番頭「イニそれなら好く見せる筈で御座いますか、御覽なさいまし、貴客のお顔なぞも鏡だからまだ此位に見るので」雲岳「咄、無禮漢」お富嬢思はずクスリ、

嫁の口上

小買物を済ませて三人は應て旅亭に歸りぬ、老人は買ひたる物などを點檢する時、雲岳女史例の奇書を披いて熱心に讀み始めしが何か心に會得しけん突然父を顧み「阿爺」老人「アヤとは何の事だえ」雲岳「阿爺とは大椿を呼ぶの尊稱で兄を阿兄と言ひ母を阿母と云ふから大椿は即ち阿爺ですが、近頃は村に牛乳を賣ぐ家がありますか」老人「あるよ、此頃は牛乳でも牛肉でも何でもある」雲岳「左らば歸國すると同時に毎日三升宛の牛乳を配達させ度のです」老人「三升、三合の間違ひではないか、それを和女が飲むのかえ」雲岳「否、毎日三度宛牛乳を以て顔を洗ふのです、是れ皮膚の色を純白ならしむる最良法で、泰西の女優如きは毎日牛乳湯に入浴すると書いてあります」老人「大變な事を言ひ出すのう、それは和女が嫁に行く事だから随分買つて遣らない事も無いが爾んな事を仕ても毒にはならないかえ、子貴嬢、東京に爾んな話しが御座いますか、貴嬢なんぞはあんまり綺麗ですから牛の乳で顔でも洗ひなさいませるか」と老人も今はお富嬢が頼みなり、嬢は何とも答へ兼ね「イ、ニ妾は存知ま

せんが先日新聞にも爾んな事が書いて御座いました」老人「へー成程妙な事計り始まりますな、實は是も嫁に參るので色々の支度を仕ませんければなりません、貴嬢も何卒お聞ならは婚禮の済むまで御逗留なすつて是れの世話をお慮きなすつて下さいませんか此の通りのがさつものですから斯ふいふ時には頼と困ります」と言ひつゝ嬢を顧み「時に和女も衣服や道具の支度は外の者が仕て還るけれども自分で是非覺えなければならぬのは婚禮式の口上だ和女も子供の中に随分見たり聞いたりしたらうが婚禮の席上でお嬢さんに言ふ口上が中々出來ないものだよ、だから前によく藝古を仕て置かないと其時になつて間に合はない」雲岳「その口上とは如何」老人「和女知らないかえ、別に六か敷の口上では無いが先づ座敷で三々九度の盃が濟んだ時花嫁さんは志どやかに花婿さんの側へ行つて「和郎をたよりに來ましたよ」とお嬢さんの肩を叩くのだ、爾うすると席に居る人一同が聲を揃へて「爾うともく」と手を拍つてそれから四海波を誦ひ出すと云ふ手筈だが、誰でもお嬢さんは耻かしくつて中々その「和郎をたよりに」が口から出ないそうだ、ところがそれを言はないとあのお嬢

は役に立たないと言はれるから、婚禮の前によく替古をして置くのだ、替古と云つても口上計りでは無い、其時の身振が大切で、さも志どやかにさも可愛らしく見えなければ不可い、和女が今日買物をした時の様に肩を怒らせたり頬を膨らせたりしてあんな様子で「和郎をたよりに来ましたよ」なんぞと言つても些つとも可愛くも何とも無い、家へ歸つたら早速婆さんに其時の身振や口上を教はつて毎日替古をするが宜い己も婆さんと婚禮した時和郎をたよりに来ましたよとポイント肩を叩かれた時にはぞつとする程嬉しかつた」と聞くや否や雲岳女史口を尖らせ「咄、愚俗々々、爾んな野蠻な風習を誰か今日實行せん、妾は文明流の婚禮式を舉行して御黨の龜鑑を示して遣ります、爾して今の事は第一偏頗なり、花嫁の口上はその通りで花婿の口上は何と云ふのです」老人「イヤ花婿の口上は無いのだ」雲岳「そら見給へ、我邦の舊習は常に女權抑壓主義である、花嫁が口上を述べたら花婿も義務として之に答ふべきに自分は黙して花嫁にのみ言はしむるとは不公平の極みなり、泰西の婚禮式では新郎新婦の手を執つて

我神の制定に従ひて汝を娶る 今より後福社にも殃禍にも富にも貧しきにも健なる時も病める時も汝を愛し汝を護り死に至るまで汝を有つべし、我今之を約す、と言ふと新婦も新郎の手を執り同じ襟な口上を述べて契約するのが禮であるのに花嫁計りの口上とは不都合千万、妾が嫁すれば先づ新郎をして天の神に誓を立てさせしめん」と嫁せぬ内から大變な花嫁子、

章魚入道

未來の花嫁子は翌日早朝父と共に富嬢を伴ひて旅亭を出で西行の流車に乗らばやと停車場に赴きぬ、發車を待つ間の待合室、例の田舎者も他の道者と共に疾くより此にありけるが雲岳女史等の入り来るを見て「ヤア和女等も此の流車へ乗るのか」と女史には粗末な口を利けど富嬢に對しては慇懃に「和女様も矢つ張り御一緒に、爾うかす、それは面白い御見物が出来すべし、静間へ往つたら直ぐ伯母さんの居る處が知れましたらう、ナニかえ、田鼠に聞いて見さしつたかえ、私等も連がぬいと伯母さんの處を尋ねるんだけれども惜しい

事でがんさあ、是から何處まで行かつしやるだえ、ナニ舞坂までたつて、伯母さんの家は舞坂の近所かき、舞坂ならば御一緒にいきますべし、私等も波松で降りて半僧坊様へお参りをする積りだが舞坂まで廻つて辨天島でも見物したつて損はねい、のう村の衆」と我が道者を顧る、道者連中も豫て此の男より海坊主の伯母さんの由來を聞き居れば「爾うだとも、舞坂までいも驚津までいも何處までいも行つて見べし、ナニも先急ぐ旅ぢや無し、途中で面白い事があれば何處へでも寄つて見物するだ、ナニかえ、海坊主の伯母さんがお嫁に往くならお嫁さんは鯨か鯨かえ」田舎者「ア、ア、お嫁さんは章魚入道で正受坊がお媒始人をするんだとよ」道者「奥海が賑だんべい、這州灘も割れ返る様な騒ぎだらう、爾ふ云ふのを見物すれば孫子の代まで話しの種にならあ、何處までも一緒に往つて見べし」と口善悪無き連中は雲岳女史を取巻いて顔に顔計り眺め居る流石の雲岳女史も此連中には辟易せり「何うも田舎漢は社交の禮儀を知らん、早く警察令を以て悪口の違警罪を定めしむべしだ、ア、歎息」

と成るべく此の人々に遠ざからんとすれども田舎者は固より遠慮無く、附けつ

廻しつ雲岳女史を取巻いて「何う見ても大きいなあ、是が涼車だから普通の駄賃で行くけれど、馬車や人力じや三人前も取らぬいじや合ふめいよ、涼車だつて些つとは遅延れべし、鐵道の線路もへこむだらうよ、何んぼ大きいつて先月己の村へ見世物に來た象よりも大きいだ、章魚入道の處へお嫁に往つたら一つ鯨と相撲を取らせて見るだなあ」道者「爾うすると龍宮じや地震だと思つてこの煙様が既足で逃げ出すべし」田舎者「どころを蒲島が助けて遣つて目出度く龍宮へお婿入なんど來りや」道者「爾うなりや伯母さんも功德なもんだ、アハ、オヤモ、切符を截つて居らあ、皆んな早く出ぬいか」田舎者「伯母さんが出ぬ内は出られるもんか、山が前につかへて居らあ」道者「伯母さんは何うせ後からだ、大工を呼んで出口を擴げなくちや」と若い者どもの氣樂さに勝手な事を口走りつゝ纏てドヤ／＼とフラットホームへ出けるが雲岳女史も續いて出でんとするに手荷物と身躰と柵の間を挟まり、抜かんとする内後より大勢に押されて身動きならず、田舎者は早くも此躰を眺め「ッラ伯母さんが出られぬい、早く大工でも呼んで來う」とツイ／＼言つて騒ぎ立てる、



電勉の民

聽て涼車は東より着きぬ、田舎者の連中は乗り後れじとて我勝に下等室へ入り  
 込みけるが雲岳女史の一行は態と離れたる室に乗り、女史も漸く安心したる様  
 子にて「お富嬢、妾は常に我邦の社交上の禮義一定せざるを慨歎するが殊に無  
 智の田舎漢輩は言語同歸の始末です、貴婦人に對して禮義も廉恥も辨へぬ者と  
 もだから仕方が無い、ア、天の神よ、願くは我邦をして一日も早く社會改良の  
 緒に就かしめ給へ、社會全般の改良は遅くとも速に先づ婦人の地位を高めて男  
 子の侮を禦がしめ給へ、お富嬢、君も定めて男子の専横を奮慨されるでせうが  
 他日志を得たらば妾と共に社會の改良に盡力し給へ、社會の改良と云ふも社交  
 的の改良が最も困難である、譬へば道に婦人に逢はば男子先づ歩を譲ると云ふ  
 如き禮義の習慣が全國に普及せなければ婦人は何處でも男子の侮を受なければ  
 ならん、その歩を譲ると云ふも一定の習慣が出来て相逢ふ者は必ず右に避ける  
 とか一定して了へば如何なる群聚の巷にも徒に雜沓混亂する事はありませぬ、  
 妾嘗て之を聞く、米人又は英人の如きは左に避けるの習慣にて往く者は左に避

み來る者は右より進めば車馬も人衆も決して紛糾する事無しと、又佛人は右に  
 避け、我邦の如きも多くの場合は右に就くの例はあれども各人の心得一定せざ  
 れば右に迷ひ左に迷ふて來者往者途上に立往生する事尠からず、此の如き事を  
 一定して然る後に無禮の所行を盡く廢止せねばならん、譬へば群聚の中で人の  
 事を評したり、或は其人の聞くにも拘らず勝手次第な惡口放言をなす如きは尤  
 も野蠻的の風習である、我が邦の市街で外國人か或は少しく風流の變れる人が  
 店頭に立ちて物を購はんとするれば忽ち周圍に見物人の垣をなし、肩を摩するま  
 でに近く進みて孔の明く程人の顔を覗き込むが斯の如きは最も卑むべく最も厭  
 ふべき風習である、一つには社交上の禮義無き事を表し、一つには各人の懶惰  
 にして時間を浪費するの愚を示す、元來各人が事業に熱心なれば人の顔を覗き  
 む如き餘裕は有まじきに妾は常に我邦の社會未だ甚だ閑暇なるを想はずんばあ  
 らず、見給へ、其の證據には我邦に鐵道の開けしより既に幾年、沿道の人民は  
 朝夕に涼車を見馴れて敢て珍らしき事はあるまじきに涼車の通過するあれば田  
 を耕すもの必ず首を揚げて涼車を眺める、あの暇に手を動かせば幾尺の土を耕

し了るべし、一日に流車の過ぐる事幾千回、彼等は其度びに空しく時間を浪費するなり、聞説く、文明の民は敢て斯の如き愚をなさずと、或人嘗て此事を歎じ、流車に乗りて農夫の手を停むる者と停めざる者とを數へしに此の東海道中に於て百人中八十三人までは首を揚げて流車を眺めたり、即ち電強して其業に従ひ敢て他を顧みざる者は百人中僅に十七人を得たるのみ、其人嘗て歐米に遊びし時流車中にて同一の試験をなせしに最も開明なる國にては流車に心を動かさるゝもの三分の一も無く、中等國即ち國勢の振はざる國ほど懶惰の民の衆きを見ると言はれたり、斯の如き事は一々戸毎に説くべからざるも妾歸國せば先づ卿黨を感化して速に文明の民たらしめん、若し夫れ流車の過ぐる事あるも耕す者敢て手を緩むる事無く各人電強して其業に就くに至らば國勢に注目する外人等が如何に舌を巻いて驚かん、妾は流車に乗る毎に其事を想ふて歎息せずんばあらま」と云富嬢を對手にして口より泡沫を飛ばす、老人は譯も分らぬば怒より外を覗き居るに纏て流車舞坂の停車場に近づきし時彼方に一聲狼煙の高く半空に揚がるを見る、老人娘の袖を惹き「チヨイト御覽、向ふで狼煙が揚がる

歡迎

よ」と致ゆる時第二發、雲岳女史愉快氣に「ハ、ア、妾の歡迎かな」

何人を歡迎するにやあらん、舞坂の停車場前には十餘流の旗を押立て、羽織袴を究屈そうに着たる田舎紳士數十人打揃ふて流車の來着を待つ、その後には若者の一團數十人扣へ居り、それに續て少年子弟百餘名隊伍をなして整列せるは小學校に於ける体操教育の功も見ゆ、流車停車場に着きける時、その近傍にて間断無く狼煙を打揚げ、出迎の人一齊に停車場へ進みしに中より立出でたる雲岳女史、老人と富嬢を後に扣へ、歡迎者に向つて天地に響く計りの大聲揚げ「アイヤ諸君、妾は諸君の懇篤なる歡迎を謝す」と叫びける、歡迎の人一同呆れ返りて物も言はず、不思議そうに女史の顔を眺めてありけるが、女史もさる者、一同に目禮してサッサと群衆の中に分け入りぬ、汗を拭き拭き後よりつき來れる老人が「和女も飛んでも無い事をするのう、今日は山崎の榎木大盛が議員さんに當選なすつて静岡から歸りなざるからそのお迎ひの人達が居るのだ、それを何だ自分の事の機に禮を言つて、己は冷汗が出た定めし皆なが狂人だと思

つたらう」雲岳女史平氣なり、「イヤ妾の歡迎ならざるは知れて居れど荷も雲岳女史郷關を出でしより既に六年、乗成り名遂げて錦衣郷に歸ると云ふのに一人の歡迎者無きは妾の面目にも關する、此に於て妾が一時彼等を利用したので、彼等も今は一驚を喫するといへど後に妾の雲岳女史たるを知るに至らば定めて名譽ある事と悦ぶならん、一の議員輩を迎ふる爲めに期せずして婦人社會の女王とも稱すべき妾に接し得たるは彼等も亦た幸福なるかな」と女ながら唯我獨尊の氣概あり、廣くもあらぬ往來を處狭と濶歩して途上の人を眼下に視くたし「ア、不潔なるかな不潔なるかな、妾が未だ郷關を出でざる時は此油ほど大なる市街は無く此地ほど莊麗なる家屋も無と想ひしに一たび京都に去り紅雲千里の間に在りしより今見れば幼時の觀念は全く是れ井底の蛙、尺寸を以て萬里の天地と心得たるなり、それ然り、豈にそれ然らんや、お富嬢見給へ、一樓一屋は舊時の觀に異れりといへど變らぬものは此江山、濱名の水や辨天島、湖上限り無きの風景は君が旅情を慰するに足らん、湖の中央に突き出でたる半島こそ、妾が故山のある處、半島は湖中第一の景、君を饗するに此景を以てせん、

阿爺、是より家に歸るに陸跡を取らんか、水路に就かんか、陸はに車を備ふべし、水には舟を尋ねべし、陸跡は如かず水路の奇なるに、妾が一つ舟を余めん」と岸に立出で舟を呼ぶ、漕いで來れる渡し舟、雲岳女史大音に「コラ、扁舟子」舟人「何だ、宗旨を聞くのか、己が宗旨は御門跡様だ」雲岳「何を申す、妾等をして大櫓の濱に渡らしめよ」舟人「分らぬ事を云ふなあ、渡らつせいよ乗せて還るから、だが待てよ、和女の様なでつけいのを載せたら一人位じやよう漕げぬ、モ一人船頭を呼んで來やうか」雲岳「無禮な事を申す、汝は大櫓の雲岳女史を知らんか」舟人「知らぬいな、己は豚の化物に親類はぬいからアハ、サアお乗りんか、和女が端に乗ると舟があへん、美しいのと爺様と端へ乗つてでつけいのは中央に坐るのだ、動くと危いよ、サッ確りつかまつて」と舟は湖中へ漕ぎ出でぬ、水澄み、風靜なり、曲浦洲汀限り無きの風景、

舟の中

舟は湖心に出でぬ、滿目の江山皆な我物と雲岳女史お富嬢を顧み「娘よ、君は去年箱根湖畔に在り、箱根湖幽邃なりと雖も此の濱名湖の開豁明媚にして奇趣

限り無きに如かず、看よ長橋を隔て、遠く望むは遠州洋、西に聳ゆるは石巻山、前に連る猪鼻湖、右に霞める引佐細江、細江の上に森一叢の見ゆるは引佐時、夫より東は一面の平野、是こそ名高き三方原なり、湖畔は悉く犬牙錯折、地勢宛も菱に似たるものあれば到る處の岬角に勝景多し、妾が他日志を得ば湖畔の勝地に盡く別墅を構へ、遊船を浮べて隨處に優遊せん、其時は君が是れ第一の雅客、妾と共に飽くまでも湖上の烟霞を弄び給へ、如何に阿爺、妾は盡く湖畔一帶の地を購はんと欲す、願くは妾の爲めに沿岸の民を諭されよ」と意氣は獨り王侯を凌ぐ、老人も唯呆れる計り「何を云のだ、和女は嫁に往く身ではないか」雪岳女史「左ればなり、妾嫁すれば先源吉子を勸めて文明流の生活を爲しめん、家は改築して西洋風の石造となし、三食は料理人を聘して佛蘭西流の珍膳を作らしめ、出入には馬車を用ひ、庭前に小蒸流の遊船を繋がん、源吉子の家は當國屈指の素封家なり、徒に舊態を守つて守銭奴の愚を學ぶは妾の眞人たるに適せず、妾嫁すれば先づ源吉子より感化して餘澤を鄉黨に及ぼさん、郷黨の人、妾を神使と思ふて可なり」と途方も無き放言に老人は先の事が心配で

ならず「和女の様な事を言つて居ては逆もお嫁に往つて落付く事は出来まい、チーモン貴嬢、東京では矢つ張り斯んな事を申すのが流行りませうか、娘なんぞは女だか男だか譯が分りますせん」とお富嬢に尋ねるが何より確、お富嬢はまさかにも爾うと答へ兼ねしが去りどて眼前に女史の言葉の排遣する譯にもならず「ナニ東京でも色々な風が御座いまして、中には西洋風を好む人もあり、中には昔の風があどなしくつて宜と段々昔風に歸る様な人もあります」老人「爾うで御座いませうとも、私どもには今の風が薩張り分りませんで」と這般の問答は雲岳女史の氣に障るなり「イヤ社會が未だ蠻風を脱せんのは慨歎の至り譬へば東京は我邦文明の中心と云ひながら東京人士は時々物々に御幣を掛いでヤレ家を移すに方角が悪い、旅をするに日が悪い、婚禮するに年が悪い、葬式を出すには友引を忌むとか、猿の日に衣を裁つと火に祟るとか、實に言語同断抱腹絶倒の事を言ひ居る子、猿の日に火に祟るなら子の日は餅に祟り、卯の日は豆腐に祟り、巳の日は蛙に祟り、未の日は紙に祟り、戌の日は猫に祟り、卯の日は鼠に祟らなければならん、妾が他日源吉子と華燭の盛典を擧ぐる時は應

と俗人の迷霧を排せん爲めに最も悪日凶辰を撰んで人の忌む方角から玉の輿を  
乗り出さう」老人「玉の輿とは大層な言ひやさだ、爾んな事を仕やうものなら  
それこそ村中で交際ふ人も無くなつて仕舞ふ、何でも家へ歸つたら婚禮の事な  
んぞは己と婆様に任せて置け、和女が口を出すと皆んな事を打毀して了ふから」  
と堅氣の親に突飛な娘、此の人々が愈よ婚禮の當日とならば定めて面白き事あ  
るべしとも富嬢は心中に未來の興味を想像して今から可笑しさを忍び得ず「オ  
ホ、兎に角、一日も早く御婚禮がお濟みになれば宜う御座いますチー」老人  
は他の意味に解し「爾うですとも、早く濟まないで安心がなりません」雲岳女  
史「妾も速に源吉子と手を携へて新婚旅行をなさんと欲す」

待 受 け

人は旅より歸るなり、今日か明日かと家にては待ち暮らし居る老母と少年「モ  
シ阿母さん、今日遶りは阿父さんと姉さんがお歸りになりさうなものですチ」  
と雲岳女史の弟にやあらん、十四五歳の利發らしき少年が今手紙を読みかけ居  
る母に問ふ、母は手紙を下に置き「爾うさ、此の手紙で見ると昨日は静岡見物

をなすつて多分今日はお歸りになる御都合だが、外に女のお客を連れて来るか  
らよく家の内を綺麗にして置けと書いてある」少年「女のお客と云ふのは矢つ  
張り姉さんのお友達か何かですかチ、姉さんも六年振りでお歸りになるのです  
から随分お變りなすつたでせう」老母「姉さんの變つたのよりは和郎の大きく  
なつたのに無姉さんが吃驚するだらう、然し和郎が學校で何かよく出来る事を  
姉さんが聞いたら悦ぶだらう、姉さんが歸つたら學校の作文だの何かを見せて  
選るが宜い、先生さんだつて褒めて居なさる位だから姉さんも感心するだらう」  
少年「イ、ニまだ中々姉さんなんぞには見せられませんが、もつとよく出来る様  
にならなければ姉さんに笑はれますもの、姉さんは長く東京に被在て色々な事  
を辟勉強なすつたから今では雲岳女史と云つて日本中知らないものは無い位で  
すよチ」老母「オヤ、誰か爾う云つたかえ、」少年「イ、ニ姉さんのお手紙に  
爾う書いてあるのです、此表のお手紙にも自分は斯う云ふニライ者になつた世  
間の名を知られたから和郎もよく勉強して雲岳女史の弟たるに愧ぢない様にな  
らなければ不可いと言つておよこしました、あの時ソラ西洋紙へ版で刷つたも

のが来ましたらう、あれは姉さんが外の人と一緒に大日本女権會と云ふものを創しなすつて姉さんはその幹事に選ばれたのでござい、その會は會員が百方人もあつて會長や副會長には藤原伯夫人だの清伯夫人だの云ふ華族様の奥方がなつてあいでござい、それから姉さん、爾んな人達と一緒に仕事をなさるのでせうが、會長や副會長はソンの名計りて會の仕事は全く自分獨りでなさる様なものだ、と手紙に書てありました、それに就ては色々御交際や何かでお金が要るからと云つてあの時阿父さんから五十圓計り送つてお貸ひでした、丁度其時和田の太郎兵衛さんが来て居てあの印刷物を見て大層感心なすつて女でこそあれ斯う云ふエライ人が此の地方から出るのには土地の勢れだ、と云つて印刷物を借りて行きなさいました、それから逢ふ人毎に姉さんの噂を仕て、和田の源吉さんにもあの印刷物を見せたさうです、爾うすると派言さんが何うか斯ういふ人をお嫁に貰ひ度い、定めて東京で立派な處へお嫁に行く口もあるからうから逆も自分の處へなんぞ来ては呉れまいけれども兎も角も一應は向ふの兩親に話して呉れると太郎兵衛さんに頼んでそこで太郎兵衛さんが家の阿父さん

に話したのだと此頃太郎兵衛さんが僕に委しい話しをなすつて姉さんの書いたものがあるなら何でも貸して呉れると古い手紙だの何だのを皆んな持つて行きました、姉さんがお歸りになつたら早速太郎兵衛さんへ知らせて進ませうと年にも似合はね才覚者、母は唯娘の歸りが持遠しさに「それは方々へも知らせなければならんがモ、歸つて来さうなものだ、ニと静岡から涼車であつてそれから舟へ乗ると何時時分此へ着くだらう」少年「丁度今頃着く時分ですが湖水に舟が見えないか知らん」と庭に出で、湖上を眺め「ア、来ました、向ふから舟が来ましたよ」老母も嬉しそうちに走り出で「爾うかえ、照娘は東京風の伊達な妾になつて来たたらうチ」と腦中如何なる娘を描きけむ、

歸宅

舟は大櫛村の岸に着きぬ、立出でたる三人、中にも雲岳女史は足故山の地を踏むとどて意氣甚だ驕傲なり「アイヤお富嬢、先づ入り給へ、是が妾の邸宅なり、三徑荒に就いて松菊尙は存すか、ア、不潔々々、如何に阿爺、妾がまだ家に在りし時は庭園今より一層廣く櫻閣今よりも一層高きを感じしが何とて俄に斯の

如く縮少せしむ、イヤ、是れ妾が眼界の東都の大なるに慣れたる故ならん、  
 嘗て之を聞く、洋行して歸りし者は故山の市街の俄に縮少せし感をなすと、  
 しそれと同一の理由、ア、少なるかな、是は、阿母阿弟、門に倚つて妾  
 を俟つ事幾時ぞ、妾は特に出迎の勞を謝す」と家に入りて座敷の中央にドツカ  
 ど坐せば呆れて腰を抜かさん計りなる老母「和女がマア娘であつたかえ」と訛  
 然として其顔を打護る、雲岳女史は家人に挨拶「扱蓋堂、妾が郷關を出で、よ  
 り六菱葛の間晨昏の禮を欠く、然れども常にその健在なるを知つて妾も敢て内  
 願せず、參商千里も今や邂逅して風眉に接す、妾の欣喜之に過ぐる者無し、時  
 に阿弟、卿が學業大に進んで嶄然頭角を顯せし事は鴻魚の信に頼つて常に其消  
 息を知れり、妾が去らざりし時卿は乳臭の小見たり、今や一個の好少年、途上  
 相逢ふも俄にそれと知るべからず、勉めよや」と斯く言ひ出でられて老母  
 は譯の分らぬば答ふべき術も知らず「マア何と言つて宜いのやら、大きくなつ  
 たと言はうか、變になつたと言はうか、譯の分らない事計り言つて居るが和女  
 は唐人の國へでも往つて来たのかえ」少年が後より「イ、エ阿母さん、今のは

漢語です、學問が出来ると誰でもあゝいふ言葉になるのです、僕はまだ漢語を  
 知らないから、姉さん、其後は御機嫌直うと、尋常に挨拶する、母子の口儀終  
 りてお富嬢は老人の口より家の人に紹介せられぬ、老母も是が娘の友達なりと  
 聞き、斯る友達を持つ程ならば成程華族方の奥様なんぞと交際ふと云ふも虚な  
 らじと是も亦たお富嬢に藉りて我が娘を買ひ被りぬ、女史の弟も大層氣高きお  
 友達かなと思へり、家の奉公人等も一旦は雲岳女史の様子に驚けるが客人の姿  
 を見て女史をさへ侮らぬに至りぬ一家固樂、舊を話し新を語ると云ふ場合なれ  
 ども雲岳女史の漢語家人に通ぜざれば老母も何と無く手持無沙汰にて頻に娘の  
 様子のみ眺め「ホントに妙な風だ、斯う云ふ頭髮が噂に聞いた東髪とやら云  
 ふのかえ」雲岳女史「然り、是れ文明の結髪、最も衛生法に適合せるもの」老  
 母「何だか知らないが牛なんぞの通る路に斯ういふものが落ちて居る、女は  
 衣裳髪形と云ふが斯んな頭髮にすると思ひ女が尙ほ悪く見える様だ、東京だ  
 つて皆んな斯ういふ風になつたのではあるまい」雲岳「否、蠻風を脱せざる者  
 の外は悉く是れ束髪の群たり、我黨は敢て舊習に従はず」少年こそ急所を衝け

り「だつても客様は昔風の頭髪ではありませんか」茶を濁す富嬢「オ、  
、妾のは何でも構はないのです」と話頭是より他の事に轉ぜしが年老ひたる下  
男勝手口より聲をかけ「旦那様、お嬢さんのお歸りなすつた事を村の衆や和田  
の太郎兵衛さんに知らせて参りませうか、先達てから皆さんのお頼みでお嬢さ  
んがお歸りになつたら直ぐ知らせると云ふ約束ですから」と主人に斷り置き  
て家を出でしが仰山に村中を觸れ廻り「サア、己の處のお嬢さんがお歸りに  
なつたから早く来て拜まつせい、日本一のふれい人になつたらうちこんだから早  
く来て御利益を享けまつせい」と此男は主人の娘を神か鬼かど心得つらん、此  
に於て村中も俄に大騒ぎ、

村の人々

「ヒヤ、御免なせいで、お嬢さんが東京からお歸りにならしたそう、ハア  
御目出度い事で、是は少し計りですが家へ出来た畑の芋をお嬢さんにお進げな  
すつて」と勝手口より入り来るは此村の老人様、雲岳女史之を見て踏板も揺け  
ん計りに躍り出で「ヤア是は空助老、爾來甚だ久闊、敢て問ふ卿の渾家恙無や

否や」老人膝を消し「ヒヤ、何う致しまして、ホンの少し計りで」雲岳「イヤ  
誤解々々、卿の令息空太郎子は健在なりや否や」空助「ハア、俸の検査ですか、  
何でも九月頃には徴兵検査があるさうで、何うか出られて呉れば宜う御座い  
ますが、背が矮い方ですから」と此の親は我子の合格を望む、雲岳女史六音に  
「敬服々々、流石に尙武國の民、敢て徴兵を忌避せずして進で國家の干城たらん  
ど期す、日魯兩國戦端を開いて碧血西比利亞の野を染むる時陣頭敵を屠つて神  
州男兒の勇武を示すものは必ずそれ空太郎子にあらんか、妾は期して空太郎子  
の功名を待つ、卿に頼つて傳語せん、閑あらば來遊せよ」と空助「ヒュー、誠に  
結構なも天氣さまで」と面くらつて歸り去る、入り更りて來れるは近隣の老婆  
にやあらむ「マアお嬢さんの大きくならしたこと、赤子の時分には娘が背負  
したり抱いたりしたつけが今じやモ、抱けましますまいのう、オホ、媪の處に飼つ  
てある牛よりも大きい様だ」雲岳女史少しく立腹の氣味「妾は復た吳下の阿紫  
にあらず、歲月を経過すれば生長するは天則のみ、卿こそ舊時に比して甚だ縮  
少せるを覺ゆ、憐むべし」老婆「何だか些つとも分らぬいが口まで達者に



ならしつたなあ」と驚いて是も歸り去る、引き續いて村の若者大勢にて入り來れば雲岳女史一々出で、之に接し「アイヤ治郎作子、子の田園敢て變る事無きや否や、作左衛門子は農事に精通せり、借問す今年の豊凶如何と、善兵衛子よ、子の尊大人去年白玉樓に移ると聞く、悲哀の情察するに餘りあり、妾敢て之を吊す」と言ふ聲は雷の如く若者どもの耳に響けどその言葉は更に分らねば答ふべき術も知らずして遣々の舞に飛び出だし、表へ出てから女史の囁「何うだえ治郎作どん、お嬢さんはエライものになつたなあ」治郎作「主にやエライ處が知れるか」作左衛門「だつても言ふ事が些つとも分ぬいもの」善兵衛「サントだ、小學校の教員さんが折々分らぬ事を言つて困ると思つたがお嬢さんのは尙ほ分らぬい、そうして見ると教員さんよりもエライのだなあ」治郎作「エライかエライかぬい知らぬいがあるの様に消たなあ、側へ寄ると喰ひ殺されさうだ」作左衛門「どころが爾う云ふもので無けりやあへぬいのだとよ、和田の源吉旦那があの子に惚れてお嫁に貰ふべいと云ふ話しが極まつた」善兵衛「源吉旦那も物好きだなあ、あの位な大家だから好い女のお嬢さんを貰はう

と思へば幾干でもあるだらうに何處が好くつてお嬢さんを買ふのだらう」作左衛門「それがさ、源吉旦那は近頃まだお嬢さんを見ぬいのだとよ、自分では見ないけれど話しを聞いた計りで悉皆モ、惚れつちまつた、だから急に話しを仕てお嬢さんと呼返して貰つたのだ」治郎作「それが見ぬ惚れにあこがれるらうだ、あれでも好いか何とか評判でもあつたのか」作左衛門「爾うだとよ、異人の國へでも持つて行きや小野の小町か辨天様かちう位なもんだとよ、ソラノ、向ふから和田の太郎兵衛さんが來さしつた、あれが今度のお媒人だ、念よ御婚禮となつたら深山水祝ひを仕て還るべし」善兵衛「手桶位じや間に合はぬい、今度買つた御筒ちうもんでぶつかけて還れ」と早くも祝賀の趣向を盡らす。

唯一の日

雲岳女史の家にては媒妁役の太郎兵衛と女史の父と相對して縁組の相談始まれり「爾う云ふ隣で源吉さんの方では一昨日お歸りになるか昨日お歸りになるかと首を延ばして待つて居た位ですから念よお嬢さんがお歸りになつた上は甚だ勝手過ぎしい事を申す様ですが明後日直ぐ御婚禮を致し度いので、サア爾う申

したら定めし餘り急の事でお支度や何かで御都合にも差支へませうが、固より毎度も話し申す通り源吉さんの方では決して支度などの事を彼是とは被仰らず、イヤそれどころではありませぬ、餘り御無理を申してお氣の毒だから荒増の衣類などは此方から結納と一緒に差上げやうと明日結納を持つて参る時に向ふで拵へたものを持つて上る筈になつて居ります、それほどまでに仕ても是非婚禮の當口は明後日で無ければならんと申すのは實は源吉さんも生涯の身を定める事ですから神圖を取つたり法印さんに鑑て貰つたり仕たところが丁度年廻りが悪くつて源吉さんの身では今年の内に明後日で無ければ婚禮して宜い日が無いそうです、もし明後日を過ぎすと此先き三年計り待たなければ爾う云ふ日が廻つて来ないと云ふ事で何でも彼でも明後日中に婚禮し度い、もしも誰さんが明後日の朝までお歸りにならなければ此方から途中まで出向ひに行つて源吉さんの中でも依亭の二階でも何處でも構はないから明後日中に祝言を済すやうと斯う云ふのです、それですから定めて御無理でもありませんが日取のところは何うか明後日とお極めなすつて下さい」と斯る婚禮の媒始をする太郎兵衛老人

も中々大抵な骨折にあらず、主人は唯謙遜して頭計り掻きつゝ、「それは誠に有難う御座います、源吉さんがあんな者をそれほどに望んで下さると云ふのは誠にハヤ冥加至極で御禮の申し様が御座いませぬが彼も今度東京へ参つて連れて来て見ましたら想つたよりも發てこな人間に變つて仕舞ひまして逆も源吉さんのお氣には入りますまいと思ひます、口取の事は爾う云ふ譯なら此方で彼是申しません然し其場になつて源吉さんがお厭やにでもなる様な事があると心配で御座いますから一應は明日にも當人達の見合をさせて其上で源吉さんがあれでも宜いと被仰つたらば結納を取かはす事に致しませう」太郎兵衛「イ、エ決して、これには及びませぬ、源吉さんだつて子供の内から互に知つた仲でもあり、殊に源吉さんの方から無理にも貰ひ度いと云言出した位ですから今更知らない池人同士の様に見合を仕て極めると云ふ様な事は要りませぬ、尤も私は源吉さんに一度見合をなすつたら何うですと申した事もありませぬが源吉さんは人の顔を見て貰ふのでは無い、人の學問に惚れて貰ひ度いと云ふのだから、顔を見て何になるものか、それも知らない人ではなし、久しく見ないから

變つても居やうが好く變つてもあの顔だし、悪く變つてもあの顔だと商を括つてお在なさるのです、然し源吉さんの方は何うでもお嬢さんの方で源吉さんを見度いと被仰るならそれは復た如何様とも取計らひませうが、主人「イエ何う致しまして、娘が源吉さんに對して彼是申す譯は御座いません、實はこの話しを致して、た時に源吉さんならば自分も参り度いと申す様な素振も見えました位ですから娘は大悦びで居りませうが何を申してもあんまり變りませんでしたから」太郎兵衛「東京でも磨きになりましたら嘸ふ美しくお變りになつたでせう、ナニなら私が鳥渡お目にかゝつて参り度いもので」主人「只今迄家に居りましたが、生憎只今客を連れて寒山寺へ見物に参りました」と女史の不在中に婚禮の協議は調ひ了ぬ、

設けぬ幸ひ

濱名湖畔第一の絶景と稱せらるゝ寒山寺の門前に足を停めし太郎兵衛老人、今は大櫛村よりの歸りがけにやあらむ頻に何か打案じ「ハテナ、あの娘は客を連れて此へ遊びに来たと云ふが今入つたらまだ居るか知らん、子供の中はポツチ

ヤリして可愛らしき子だつたが東京へ往つて何んな娘になつて来たか、下檢分の一つ見て置き度いな」と門を入りて彼方此方を索むれども女の姿更に見えず唯商人らしき二人の若者が石上に腰掛けて眼中の景色を賞するのみ「何うだ好い景色だな、斯う云ふ好い處は滅多に無いぞ」と一人は眺めに餘念無ければ人は外に念慮あり「ウム景色も好いが先刻此へ来た別嬪は素的だな、斯んな田舎に何うしてあんな別嬪が居るだらう」前の男は知つた顔「その筈だ、東京仕立だもの」後の男「東京仕立だか何處仕立だか和郎は知つて居るか」前の男「知らなくつてよ、あれは確に大櫛村の新家の娘だ、長い間東京へ修業に行つて居て昨日か今日歸つて来た許りだ、田舎者だつて天質が良ければ本場で磨くとあんな別嬪になるのだ」後の男「和郎はよく知つて居るな、大櫛へでも往た事があるのか」前の男「イエ、大櫛へは往かないが、和田の源吉旦那にあの娘のお蔭で色々な物を買つて貰つた、源吉旦那は今度あの娘を嫁に貰ふのだ、それには就いて支度や何かに自分の物だの、嫁さんに遣るのだの、澤山買物を仕て呉れたが何でも人の話しては源吉旦那がお嫁に貰ひ度い爲めに無理にあの娘を

呼返したのだそうだ、その位だもの、別嬪なのは當り前だ」後の男「あれなら  
呼び返すのも無理はない、其代り呼返されたつて源吉旦那の處へお嫁に行けり  
や當人だつて仕合せだ、東京に修業して居たのなら學問でも何でも出来るのだ  
らう」前の男「何でも出来るさ、源吉旦那の話しでは華族さんの奥方なんぞ  
と交際をして廣い東京でも誰知らんものは無い位だ」とさ「前の男「源吉旦那も  
掘出物を仕たな、あの娘について来た束髪は怪物はあれは何だえ」前の男「下  
女か何かだらう」と好い加減な當推量を心ありて聞く太郎兵衛老人は籍かに打  
悦び「成程東京で磨いた、けに爾んな別嬪になつたか知らん、それならば源吉  
旦那も勿怪の幸だ、早く往つて知らせ進げやう」と大急ぎにて寺を出で源吉  
が方へと取つて返し、先方の挨拶を逐一語りし末、時に旦那の前で斯う申して  
は可笑しい様ですがあの子は大層美しくなつたと云ふ評判です、私は顔を見  
せんが寒山寺へ寄つたら斯う云ふ噂を仕て居りました、其癖向ふの老爺は  
大層卑下して迎もお氣には入りませぬ、跡で彼は云ふ事があると困るから一  
應見合をなすつたら何うですと申しました、内々はその美しくなつたところ

をお目にかけて貴郎を吃驚させ度いと云ふのでせう、悪くなつてもお貰ひなさ  
ると云ふ位なのに良くなつた方ですから何より結構で」と自分まで共に悦ぶは  
物に親切なる老人と見ゆ、源吉旦那とて内心嬉しからざるにもあるまじ「イヤ  
姿色の事などは彼は言はんが悪い方よりは良い方が好いのう、然し女房の姿色  
なぞと云ふものは婚禮して三日も過つと忘れて了つて良いのも悪いのも同じ様  
になるものだ」と云ふよ、それよりも此方の望みは女房に少しづつでも學問を教  
はり度いので、昔し何とか檢校と云ふ人は自分が盲目で書物を讀めないから學  
者の娘を嫁に貰つて耳で勉強したと云ふ、兎に角今度の事は全く和老さんの骨  
折だ」と禮を言ふも嬉しき心、

結 婚 期 日

一水僅に隔つ兩家の村、和田にては源吉子の家にて太郎兵衛が談話をなせし頃  
雲岳女史はお富嬢を伴ひ寒山寺邊を遊覽して大櫛の家に歸りぬ、待ち兼ねたる  
老人、娘を呼んで前に座らせ、「今和女の留守にの、太郎兵衛さんが來なすつて  
斯うく、斯う云ふ話して愈よ婚禮は明後日と云ふ事に極まつたよ」と聞くや否

や雲岳女史口を尖らせ眼を圓くし「それは言語同断、肝腎の妾に一言の相談も無く先方の勝手に期日を撰定するとは實に不都合千萬と言はざるを得ず、元來結婚の期日を撰定するは婚禮式上の最大要件で主として婦人が生理上の好時期を取らねばなりません、その期日の如何に據つては婦人畢生の不幸を醸す事あります、其譯如何となれば結婚は婦人の身に取り畢生の大事であればそれが爲めに必ず神經の動亂を起して平常健全の身體ですらも多少の變調を呈するもの、其時もし身體に異状があるとか、或は結婚を避くべき時期であるとかすればそれが爲に身體の違和を招き畢生不治の病症に罹るもの比々として皆な是なり、世間人の妻たるもの往々その爲めに不妊症の病に陥り或は他の病に若むは妾が常に視る所、左れば泰西にては結婚の當日を撰定に最も重きを置き、女子をして先づ醫師と協議せしめ、醫師の診察を受けて最も身體の平和なる神經の安靜したる時期に定むるのであります、我邦の習慣として兎角結婚期日を定むるにお神圖に據るとか十二支の日を數へるとか最も肝要なる女子の身體を閑却して他人が勝手に取極めるのは甚だ以て生理上に大害あり、妾が嫁する時は先

づ第一に此惡習慣を改良して俗人の迷霧を撥破せんと欲せしが、嗚呼何物の迷信者流ぞ、敢て源吉子を惑はして三年僅に一日と數へしぞ、生理上より觀察すれば婦女子の身體が結婚に適合せるの一日ヶ月中必ず一周日あり、それを何ぞや妾に詢らずして男子の自ら日を定むるとは言語同断沙汰の限りであります」老人「それでは和女が明後日では都合が悪いと云ふのか」雲岳女史「イヤ妾をしてその期日を定めしめば矢張り此の兩三日間を以つて適當の時機となす」老人「それならば明後日で宜いではないか」雲岳「イヤ其の期日を咎むるにあらず、期日を撰定する専横乖理なるを咎むるにあり、加之ならず、妾が東都を出で、數日間、南船北馬六十餘里の道を旅行したれば自ら顔面を日光に曝露せし事多し、願くは妾が顔面の色素をして平常の純白に歸せしむるの餘裕を與へよ」老人「それは何の事だ」雲岳「卑俗の言葉を以て解釋すれば妾の顔が日にやけて平生よりも黒く見えます、せめて之を剝がし度いので」老人「アハ、それを剝すには三年もかゝるだらう、イヤ剝したところが天霞が黒いだから其上白くはなりそうも無い、イヤ白粉でも澤山塗るさ」雲岳「然らば牛乳一石を購ひ

給へ。妾は明後日の出興まで牛乳湯に沐浴せん」老人「大變な事を云ふ、それよりも静岡で話したソラお嫁さんの口上をよく婆さんに教はつて明日中に誓古して置くが宜い、婆さんや、此へ来て例の一件をよく此子に教へてお遣り」と聲に應じて出で来る老婆「オホ、妾も若い時分の事だから忘れて仕舞つたけれども妾なんぞは一月もかゝつて漸と誓古をしたものだ、口上はやさしいけれども身振が中々六か敷くつての、そら和女マア此へあいで」と大の女を視ることも子供の如し、雲岳女史動きもせず「唯、愚俗く」

身振の稽古

老婆は委細構はず「コレや、其時の身振と云ふのは先づ斯ういふ風だ、三々九度のお盆が済むとお媒妁人が縮幅子をどつて呉れるから、爾うしたら斯ういふ風に振袖をなよくと振つて、中腰になつて、立つのでは無いよ、跛る様にお嫁さんの側へ行つて、それから左の手で振袖を口へ當て、お嫁さんの顔を覗き込みながら「和郎を頼りに来ましたよ」とお嫁さんの肩をちよいと軽く叩くのだ、爾う言ふまでは皆んなが見て居て耻かしいけれども爾う言つて了へば外の

人が一同手を拍つて爾うともくと囁して呉れるから耻かしくも何とも無い、サア是が何より大切の誓古だから其處で一つ遣つて御覽、妾をお婿さんだと出つて妾の側へ来て爾う言つて御覽、ナニ厭だ、おんなは稽古しないと、誓古しないでお出来る様なら結構だけれども和女だつて今處幾度も遣つたと云ふ印では無し、餘つ程よく覺えて置かないと其時になつてまごつくよ、妾なんぞは初めの内誓古するのさへ人に見られるのが耻かしいから手水場へ行く度に手水場の戸をを婿さんに見立て、和郎を頼りに言つてはトンと叩いた位だよ、世間の人を見るのに御婚禮の時それがよく出来なかつたものは屹度跡でよくない事があるから争はれないものだ和女のお友達だつた土手下のお品さんは御婚禮の時いざり腰でお婿さんの側へ行かうとして裾に足がからんで轉げなすつたが案の状一年過つか過たない内に難産で死んで了ふし、妾の知つた小人見村のお近さんと云ふ人はお嫁さんの側まで行つても何うしても口上が口から出ない、お媒妁人が心配して頻に後から和郎をくとせつくものただら其の人も一生懸命に和郎をくと半分言つた切り眞紅になつてつッ俯して了つたが此頃聞けば

家が折合はないでトウ、離縁になつたと云ふよ、それだから決して粗末に思ひなさんな」と熱心に我子を教ゆれども雲岳女史は更に取合はず「イヤ案じ給ふな、妾の胸中自ら成算あり、妾の行ふ所蓋し以つて御黨の摸範となすに足らん、乞ふ刮目して當日の光景を看られよ」口分でも何か遣る積りと見ゆ、母親は尙ほ惡念「だが手自分では立派に出來る積りでも其場になると耻かしいのが先に立つて思つた半分も立派に言へるものではないよ」雲岳女史「妾は未だ嘗て人間に恥かしきと云ふ事あるを知らず、恥かしきと恐るしきとは精神確乎ならずして事物に搖かざるゝを示すなり、苟も心を不返轉の境に置き俯仰天地に愧ぢざる時は鬼神の前も恐るゝ所無く王侯の前も愧る所無し、况や婿の如き妾の眼中より見れば唯是れ一個の木偶人のみ、何の恥かしき事あらんや」と成程此の勢ひにては母親の惡念と寧ろ反對の惡念あるべし、左れば父の老人が「と云つて和女の様に恥かしがらないでも女らしく無くつて可愛氣が無い、少しは恥かしいと云ふ見えがあつて顔をポーツと紅くしながら小さな聲で和郎を頼りにと言はれるからと婿さんの方でも身に侵み渡るほど嬉しく思ふのだけれども

あんまり平氣に遣られては幾度も各處へ行つて遣りつけて居るもの、様に見えて却て悪く思はれる、何でも女は成るたけ内場にして出過ぎない様にするが宜い」と娘を諭してそれより頻に婚儀の事を相談し、急場の支度とて家の中は大騒ぎなるが富嬢も觀ては居られず一緒に何かの事を手傳ふに當人の重岳女史は今迄の武骨らしきに引かへ、急に牛乳で顔を洗い、白粉を塗り紅をつけ婚禮の當口まで俄拵への粧飾にのみ愛身を變しける、

嫁入姿

斯くて愈よ雲岳女史が婚禮の當日となれり、女史は粧飾の結果如何あらんと遠ふ人毎に質問をかけ「いかに富嬢、妾が顔面番時に比して幾分の妍を増したるや否や」富嬢も笑み合み「爾うですす、餘つ程白く成りなすつた様にも見えますすす」と是は他人なれば世辭ありやも計り難しと今度は父を執へ「阿爺に問ふ、阿爺が東京にて妾を見し時と今の妾と孰れが美なるや」老人「婿うさのう、何時見ても同じ様だが此頃は何か餘計に氣味が悪くなつたのう」と是は復た餘りに世辭が無さ過ぎる、少しは愛想のあるべきにと今度は母を呼

び「阿母願くは妾の顔を審査し給へ、妾は逐日艶麗を増さるや」老婆「何  
 だぞえ、和女の言ふ事は薩張り分らないよ」雲岳女史「語をかへて之を言へば  
 妾は綺麗になつたでせう」老婆「オホ、綺麗どころか顔の色が斑白になつて  
 生白いところどラス黒い處と交つて居るよ、和女は牛の乳で顔を洗ふそうだが  
 道理で側へ寄ると乳臭くつて仕方が無い、お負けにお白粉の溶けないのが鼻の  
 孔や耳朶にこびりついて何とも云へたものでは無い、矢つ張り黒ければ黒いな  
 りにお白粉氣無しでさつぱりして居た方がまだ宜いよ、鼻の頭が曲つて居るが  
 何うしたのだえ、花箒を塗り擧げたのだぞえ、オホ、大變な騒ぎだぞ、火の側  
 へ行くと鼻の先が溶け出すよ、顔の始末はマア後にして髪を何うか仕なければ  
 ならない、何ぼ何でも左ねぢりの頭髪ではお嫁にも行けまいから妾が一つ髪を解  
 いて髪結さんに結はせて遣らう、ドレ頭を此へ持つておいで、マア此の髪の手  
 は何うしたのだえ、縮れた上に凝固ついて何時にも沐つた事があるかえ、ナ  
 去年一度沐つたぞ、是では櫛の齒も通らない、オヤ／＼和女の髪の手は是れつ  
 きりかえ、寡くつて短かくつて是れではお烟草盆にも結へやあ仕ない、人の頭

に束髪と云ふものは毛が悪くなると聞いて居たが斯んなになつては溜らないよ、  
 是れでは逆も島田どころか唐人鬘にも結へないが入毛をするとしても何をす  
 るにしても地の毛が是れでは仕方が無い、寧ろ東京邊りにあると云ふ附鬘を買つ  
 て来て頭へ載せるより外に仕様が無いが今更爾んな事を言つても間に合はず、  
 此の髪の手で無理に鬘なんぞを結つたら却て可笑なものになるから矢つ張り  
 束髪に仕て置くが宜い、束髪に振袖も變なものだが人間が變つて居るから好い  
 かも知れない、その代り鬘が無いと綿帽子がボンと落ちて了つて坊さんの類  
 冠り見た様になるだらう、ちよいと此の綿帽子を被つて御覽、オヤ／＼落ち  
 るどころか、綿帽子がよく入らないよ、随分大きい綿帽子だが何うしたのだら  
 う、オホ、頬ペタで聞へたのだ、此の様子は振袖の身幅が合ふか知らん、  
 後も一尺前も一尺に仕てあるけれども、マアちよいと着て御覽、オヤ／＼まだ  
 狭いよ、仕様が無いぞ、帯は幾廻り締められるだらう、二廻りも締めたらカ  
 が無くなりそうだし、ナニその下締はニマ結びで無ければ尺が足りないよ、マ  
 ア一文の餘もあるのだよ、帯留の金物がかゝらないつて、モシ貴老東京で買物



をなさる時少し氣をつけて此子のもは特別に誂へて下さらなくつては困りま  
す、帯でも衣類でも普通の物では合ひはしません、何うせ斯んな變り者だ  
から少し位合はなくつても構ひませんが折角買った物も借物の様に見えて損で  
すもの、さあ是からホントに支度をするのだよ」と東邊に振袖の雲岳女史は愈  
よ今日を晴れの嫁入姿とはなりにけり、

京都降り

嫁に往く身の忙しさよりも嫁を待つ身の待遠さ、和田の家にては主人源吉、今  
日こそ日本一の嫁御寮を迎ふる事とて嬉しき中にも心配あり、一々奉公人に指  
圖して家事萬端の用意をさせ「コソヤ和女達も今日はよく氣を注げて呉れ、  
普通のち嫁さんが来るのなら少し位落度があつても目に立たないが今日来るの  
は長く東京で修業をして華族さん達とも交際をする程の人だから少しでも行届  
かない事があると直ぐに見下げられるだらう、殊に此方から無理に願んで嫁  
に貰うのでもあるし、向ふは東京で何んな好い處へでも嫁に往けるのを親達  
の言葉もあるから斯んな田舎へ嫁に来て呉れるのだから粗末な事でもあつては

申譯が無い、だからよく氣を注げて不行届の無い様に」と懇々として家人を  
す、家に仕ふる七十餘の老婢、何事も此者の取計らひとて當日の事を處置な  
けるが「旦那様、決して御心配なさいませぬ、妾がついて居て家中を取廻し  
すから決して少しも落度のある様な事は御座いませぬ、妾は若い時から幾度御  
婚禮のお世話をしたか知れませぬのに京都降りの御婚禮にも三度まで立會ひま  
した、京都降りの御婚禮と云ふのは旦那様などは御存知御座いますまいが昔  
し諸國の大金豪が京都へ手を廻して公卿様の姫君をお嫁に貰ふのです、尤も  
其の時分のお公卿様は皆んな貧乏で肩書こそ何の太夫とか何の納言とか立派な  
お位を持つて居ても内証は手内職なんぞをなさると云ふ位ですのに何うせ田舎  
へでも娘を嫁に遣らうと云ふ程のものは猶更貧乏の上無しですから、貰ふ方で  
支度金の千兩も二千兩も出し、其上に年々お實家の方へ御隠居料として二百兩  
も三百兩も出す約束で一口に言へば大金を出してお嫁を買ふ様なものですがそ  
れでも向ふは何八位何の司とか何とか云ふ官位のある家から金こそあつても無  
位無官の百姓の家へお嫁に来るのですからイヤにその儀式だの取扱ひだのが八

釜しくつてお嫁の来ない前に京都から諸禮のお師匠さんと呼んでお婿さん始め  
家中のものが一月も二月も禮式を習つたものです、それでも屹度附いて来る役  
人がイヤに入釜しい事を言つてイヤ何の事に落度がある、何の取扱ひが行届か  
ないから姫君を此家へお入れ申す譯にならんぞと云ますから仕方なしに其役  
人達へ五十兩とか百兩づゝの賄賂を使つて漸と黙つて貰ふのです、だから京都降  
りを呼ぶには昔の金で一夜万兩と言つた位で、爾して馬鹿氣た事には御婚禮の  
時にお嫁さんが上段の間へ坐つてお婿さんが次の間へ坐つて三三九度のお盃で  
は無九で主従のお盃の様な事があつて、それからお嫁さんが自分の亭主を呼  
付けにして何右衛門許すと仰せられなければお婿さんがお嫁の側へ行く事も出  
來無いのです、爾う云ふ入釜ましい御婚禮に三度も立會つて色々な儀式まで登  
古し多したから万事は妾が引受けます、今日のお嫁さんは東京で御修業なすつ  
たとは云ふもの、矢つ張り此國のお方であれば昔の京都降りの様な六か敷い事  
は御座いますまい、主人「イヤ爾うだが今日来るのは學者だから却てそれより  
六か敷いかも知れない、兎に角太郎兵衛どんが来て呉れば宜い」とと嫁始人を

待つ處へ太郎兵衛老人夫婦連れにて入り来りければ主人は頻に儀式上の事など  
相談なすに老人夫婦も深き思案無く、向ふの父母があゝの如き謙遜家なれば別に  
心配するに及まじとそれより供人を大勢仕立て、太郎兵衛夫婦は花嫁の迎ひ  
の爲めに大櫛村へ赴きぬ、

引下役

父「コレや、モ一太郎兵衛さんがあいでになつたから早く出て来ないか、今お  
嫁に往くと云ふ先へ立つて何を仕て居るのだえ、ナニそばかすを取つて居ると、  
好い加減にするが宜い、そばかすが急に取れるものか、ナンだと、奇書の中を  
捜して居る、モ一爾んな間は無いから早く支度をするが宜い、ソラお見送りの  
人達も来なすつた、早く此方へ出て来ないか」と父なる老人が頻に催促すれど  
雲岳女史は容易に鏡の前を離れず「如何にも富嬢、妾が顔面敢て白粉の治ぬか  
らざる所無きや否や、妾が頭髮敢て亂れたる所無きや否や、妾が衣裳は整ひた  
るか、妾が姿は正しきか」と相談對手は富嬢、老人は戻かしく「お客様だつ  
て御支度もあるもの、モシ貴嬢が向ふへ是と一緒に向つて下さいますと何んな

に是の冥利になりませうか知れませぬ、何卒御迷惑でも今夜の席へ立會下さいまし」とお富嬢を藉りて娘の光彩を添ゆる積り、然るに雲岳女史は不思議にも断乎として頭を振り「イヤ妾は敢てお富嬢の同行を謝絶す、他日改めて妾等夫妻がお富嬢を迎ふる日はあらん、然れども今宵の席は敢て娘の來るべき處ならず、嬢よ、願くは家に在りて妾が椿蓋の寂寞を慰められよ」と今日に限りて同行を辭す、老人は合點行かず「可笑しな事を云ふのう、何故お客様をお断り申すのだ、今夜は和女の一生の祝ひだから親顔縁者は申すに及ばず隣近所の方まで和女を見送つて向ふの家へ往つて下さるのだ、向ふでも大勢の見送人が附いて來るほど悦ぶし、此方でもそれが鼻が高くつて、家の娘が嫁に行つた時は何十人見送人があつた後々までも話に言ふ位だし、向ふでも家の嫁取には見送人が役人來て酒樽が幾個明いたと云ふ程だ、それだから一人でも多く往つて下さるほど和女の晴れにもなるのだし、殊に斯う云ふお方が和女のお友達だと言つて御一緒に往つて下されば並の人か百人往くよりも和女の身勝手へ價値が付く、その代り貴嬢、田舎の婚禮ですから無可笑しい事や馬鹿氣な事が御座

いませうけれども話の種に御覽なされる積りで何卒御一緒にいらして下さいますし」と父は到底娘の心を解せず、雲岳女史は飽くまでも強情なり「イヤ、お富嬢の同行するは偶々妾が身の累をなすに足る、阿爺は世に比較なる語のあるを知るか、電燈明なりと雖も月光に比すれば顔色無し、月光千里を照すと云ふも太陽に逢はし是れ如何、妾は想ひ起す、嘗て東都遊學の日、石橋家の娘會見に赴きし時婿の候補者引立役を伴ひて來りしを、引立役とは比較の標準を示すなり、その標準の如何に依りて或は人の美を引立つる事あり、或は之を引下ぐる事あり、お富嬢は蓋し人間界以上の麗質を備ふ、お富嬢無んば國中廣しと雖も誰か敢て妾と芬芳を争はん、妾の辭するはお富嬢に惡意あるにあらず、唯今夜の席上妾をして獨り光明を放たしめよ」と餘程苦しき胸中なりけり、お富嬢は「と笑ひぬ「何う致しまして、飛んだ事を」と軽く答へしが固より女史の心を知りては同行せんとも言ひ難し、老人は娘の言葉よく自分に解らぬと是も再び強ある事もならず「何故お断り申すのだのう、折角好いお友達があるのに」と未練を泄らして自分達も支度をなし、愈よ万事の用意調ひし時門内

に勢揃ひして大勢の人花嫁子を取圍み、目出度く祝ひて此の家を立出でける。

水祝ひ

「オイ太郎作どん、モ一嫁つ子さんが通りそうなるんだなあ、なんでも今日は澤山水をぶつかけて底の抜けるほど祝つて還るだわ、水は宜いか、あかいこと汲んであるか」と松並木の脇に屯したる村の若者、人の嫁入を祝せんとて向ふ鉢巻肩だすき、水桶を山の如く前に積み、手に長杓を携へていざ来い來れと大層な勢ひ「水は手桶に十五六杯も汲んであらあ、龍吐水も持て來たし、田圃の井戸に唧筒も仕掛けてあらあ、あの唧筒は毎日買つた計りだが火事の役に立たぬいで嫁入の役に立つのは妙だなあ、ナニ先月の火事に何うしたとあの火事が大笑ひよ、ソラ火事だど云ふから今日こそ一番買ひたての唧筒で火にならぬ内に消して還るべいと唧筒を井戸へかけてセツセとあふつた、爾うしたら和郎、いくら還つても水が些つとも出て來ぬいのよ、何うした事だとよく見たら、管の先にある玉のチヤを留めぬいでいきなり井戸へ投げ込んだらんだから玉が水の中に落こつて仕舞つたのよ、それから和郎、大騒ぎやつて玉を舉げる

やらチヤを直すやら漸どの事で水が出る様になつたら火事は疾づくに獨りで消えて了つたのよ、アハ、面白い唧筒だ、その代り今日は緩り支度を仕たからドシ／＼水を出して嫁つ子さんの沈むほどぶつかけて還るだ」甲「どころがあの嫁つ子さんは些つとやそつどの水位でビクともする様な女じゃぬい、あの女をびしよ濡にさせるにや浪名の潮水でもかひほさなくつちや」乙「だけどもう、澤山水をかけて還るほど當人の冥利が好いのだよ、あの子なんぞは東京へ往つて修業した計りで和田の源吉さんの様な好い處へお嫁に往けるのだ、此村であんな仕合者はぬい、井戸の水の洒れるほどぶつかけて還れ、あの子の家の爺さんも婆さんも好い人だ、已達は色々な世話になるから今日はその禮だと思つて澤山水をあびせて還れ、是が同じ嫁つ子でも惣田の深藏どん所の娘なんぞは家の人が常日村の者に憎まれて居るから嫁に往く時だつて誰も水をかけて還るものがぬい、だからお婿さんの方で爾う云つたよ、此んな縁起の悪い事は無い、せめて家の水でもかけて還れつて、お婿さん所で水をかけて貰つたよ、だから悪い事は仕無いもんだ、爾う云ふ時になつて分るからなあ」と首を延ば

して待つ處へ花嫁子の一行はソロソロ向ふより歩み来る、待ち兼ねたる若者も「ソラ来たぞ、何うだえ、大層な見送人じやないか、大盃様の娘が嫁に行く様だ、マア嫁つ子さんを見ねい、外の人の頭を越して綿帽子があんなに高く見える、大きな女だなあ、岩谷の金佛様へ綿帽子を被せて引張り出したんだ、綿帽子の下から頬ベタがはみ出して居らあ、マア見る、一股に五尺づいも歩くぜ、外の人は苦しがつてチヨコ」と駈け出さあ、アハ、大變物だ」と呆れながらに眺むる時嫁女の一行此の前に近寄りければ若者一同口を揃へ「お日出度う御座います、お祝ひ申します」と聲に應じて四方八方より水を散々にかけ始めたり、龍吐水の水も迸り出す、唧筒の水も天上より落ち来る、濡れながらも老人夫婦は此の光景にホクホク悦び「有難う御座います、御苦勞さまで」と一々禮を言ひけるが此時花嫁子の雲岳女史俄に足を停めて大道の真中に仁王の如く突立ち上り、破鐘の如き大音にて「コラ無禮漢」と大喝一聲、

通せんぼ

雲岳女史の大聲は若者の鼓膜も破れん計りに響き渡りぬ「コラ何者の無禮漢ぞ、

敢て妾に向つて冷水を濺ぐ、其分には捨置かん、引捕へて警官に渡すぞ、こゝな狼藉者め、すさりをらう」と地だんだん陥んで睨み付けたる有様に若者どもは膽を消し水の手を停めて縮み上りぬ、後より老人が「コレさ、爾う怒るものでは無い、是は皆さんがお祝ひ下さるのだ」女史「咄、人を祝するに何ぞ冷水を用ゐん、苟も此の雲岳女史に對して無禮とや云はん不敬とや云はん、妾は必ず彼の罪をして損害を賠償せしむべし」老人「飛んでも無い事を云ふ、和女から皆さんにお禮を言つて宜い譯だ、昔から水祝ひと云つてお嫁に往く人を祝ふのは一つには戒の爲めであつて、女は一度より外にお嫁に往くものでは無い、二度も三度もお嫁に往くと二度も三度も斯う云ふ目に逢はせると懲りさせる様に仕てあるのだ、だから貰ふ方にも石祝ひと云ふ事があつて今夜は和田の家へも近所から小石を投げ込んで雨戸も障子も壊されて了ふのだ、是も鳥渡聞くと悪戯の様だが男だつて二度も三度もお嫁さんを取かへない様に自然と戒めの爲めになつて居て二度目の婚禮だと小石で無くつて中位な石になり、三度目になると一層大きな石を投げ込むから其家は大概壊されて了ふ、お嫁に往く方も初

縁の人へは水尻ひだが二度目の人には其水に洗水が交つたり三度目の人などは随分不潔いものを洗けられる事がある、それでも嫁に往く人は有難う御座いますと禮を言はなければならぬのだ、爾う云ふ事は昔の人達が戒めのため丁夫したので外の事も万事爾う云ふ工合になつて居るから自然と嫁の方でも婿の方でも互に身を護む様な心掛になり今迄は此近所で三度も嫁に往つた人は滅多に無し、また男が女房を取かへる事も寡かつたものだ、それを近頃になつては段々人が不人情になつて来て他國などでは嫁に往くのを容にでも往く様な氣で三度も四度も往つたり來たりする人もあるし、貰ふ方でも猫の子を貰ふ様に貰つて見たり出して見たり、女房だか奉公人だか譯の分らない様になつた處もあると云ふ、何うか此の土地までが爾んな風にならない様に昔の事を殘し置き度いと私始め年老た人が爾う思つて居る位なのに、何の事だ和女は、昔の様子も知らないで無關に人様へ怒り付けるとは、和女こそ皆さんに謝罪るが宜い」と老人は何處迄も昔し堅氣、雲岳女史咳一咳し「否、阿爺は一を知つて二を知らず、男女の相愛するは自家の心を以てするなり、決して他人

の抑壓を受くべきにあらず、苟も意氣相投じて情交の深きに至らば山崩るも離るべからず地裂くとも分るべからず、何ぞ水を蹴き石を投じ他より抑制して縁に貞節を保たしむるを要せん、古人の戒めは他働主義なり、妾等の執る所は自働主義なり、妾は早く郷黨を諭して自働主義の情交を知らしめんと欲すと口に泡を吹いて饒舌りける際に若者どもは雲岳女史の操勢に怖れて皆な何れへか立去りける、氣を揉む媒灼人、早く往かないと遅くなるると頻に花嫁子を促せば花嫁子の雲岳女史、片手に濡れたる襪を高くかかげ、片手の臂を怒らせ大道狹しと歩み出す、松原盡きて森の小蔭の細道へ來りし時前路に聚まれる子供達、長き繩に淤泥を塗り二人してその兩端を持ち、幾條と無く路の前に引張りて「サア通せんぼう」と口々に呼はりつゝ、花嫁の一行を遮りける、

今の災難

通せんぼうの子供等に逢ひて老人は豫て用意、ありけん、財布より一錢二錢の銅貨を取出し、一つ宛丁寧に子供に與へんとしければ後に雲岳女史「阿爺、無用なり、何者の兒童ぞ敢て乞食の事をなす、幼年の子女をして斯の如き

事を爲さしむるは他日健全なる國民を生ずべき所以にあらず、ユラ兒童、  
つて汝等が父兄に語れ、雲岳女史は人をして乞食たらしめずと」子供等は譯も  
分らず「ヤア此の嫁さんは吝嗇坊だなあ、泥を塗つて遣れ」と長き細を  
女史の衣裳に指り着けんとしければ雲岳女史赫然として怒をなし「此の鼠輩、  
妾の訓言を聞かざるか」と飛かゝつて一人の襟髪をムツと掴み大力に任せて片  
手に高く指しあげたり、ワツと泣き出す子供、他のものは之を見てヤア恐ろし  
やと逃げ散りぬ、雲岳女史掴める子供を下に置き「汝は再び斯る事をなす勿れ、  
我言に背かば掴み殺さん」と威して放ち遣りたるに子供は遺々の跡にて命から  
がら逃失せぬ、最早前路には障り無し、急がずば遅れんと老人始め見送人足を  
速めて歩み出すに媒灼人の太郎兵衛老人、先には自分が人々を促がせしにも似  
ず、今は足も進まぬ風に頭を低れて溜息を吐き、他の人々に知れぬ様低聲にて  
我妻を顧み「オイ婆どん、世中には飛んでもないお嫁さんがあつたものなの、  
己は頼まれて媒灼人をするのだから宜いけれど、此方から先へ口を利いたの  
なら面目無くつて生きては居られない、源吉さんだつてマサカ斯んな女と知ら

ないから貰ひ度いと云ひなすつたのだが是を見たら無後悔なさるだらう、己も  
一昨日寒山寺で迂つかり人の噂を聞いて止せば宜いのに源吉さんへ大層好いお  
嫁さんだと間違つた事を話して悦ばせたが今になつては言譯が無いよ、此の調  
子では婚禮の席で何んな騒ぎが始まるかも知れない、まかり間違ふとあの女  
は己達へ喰つてかゝるだらう、爾うなつたら迎も助かるまいよ、今の内からお  
念佛でも申して置きな、南無阿彌陀佛、アアモ一孫子の代まで頼まれても  
媒灼人をするものじや無い」と此の老人鬼女の難にでも逢ふ心地、老婆も共に  
心配なり「サア、御婚禮の席で騒ぎでも始まつたら妾達の災難だし、もしも無  
事に済めば源吉さんの老母さんがお可哀想だし、源吉さんは男だから喰ひ殺さ  
れる様な事もあるまいが御老母さんはあの通り氣の小さい方だし、それに昔  
し堅氣で今の事なんぞは些つとも分らない方だから斯んなお嫁さんが往つたら  
何うなさるだらう、斯うど知つたら一度見合ひでもさせれば宜かつたさ」太郎  
兵衛「イ、エさ、此の調子ではそれも險呑だよ、もし見合を仕て断る様にでも  
なると屹度此の女が暴れ出して何故妾を嫌つた、その仔細を申立てるなんぞと

源吉さんも己達も何んな目に逢ふかも知れまい、斯うなつたのも前世の約束だらう、何卒大難が小難になつて無事に今夜の御婚禮が済んで呉れる様に、サア婆どんや、己と一緒に神様や佛様へお願ひ申しな、南無や當國に座す秋葉山大権現を始め奉り、奥山の半僧坊様、可睡齋の三尺坊様、何卒今夜の婚禮を無事に済ませて我々夫婦の災難を通れます様に」と口の内にて一生懸命に祈念する、老婆も共に祈誓をかけて足の運びも遅かりしが何時しか人々に連れられて源吉が家の門前に来りぬ、老婆は念よ災難が眼の前に近づきし心地して「爺さんや、覺悟をなさいよ、モ一源吉さんの處へ来ましたから」太郎兵衛「マン／＼来たかかう、南無阿彌／＼」と稱名の聲念よ烈し、

竹 跨 ぎ

「ソラお然さんがおいでになつた、ソレお出迎を」と源吉氏の家にては家人を始め親類の者一同玄關へ出でけるが婢僕を指揮する彼の老婆が劇て下男の誰彼を呼び「モン／＼作藏どんも由藏どんも居ないか、まだ玄關に竹跨ぎの竹が出て居ない、何うしたものだ、妾があれ程頼んで置いたのに何故出して置かぬ

いのだよ、手落があるよ妾が叱られる」と背くなりて心配する、出で来りし一人の老僕「今作藏どんと由藏どんは向ふの山へその竹を取りに往つたよ、一直ぐに歸つた来ますべし、アニキ、竹の事は作藏どんが昨日から心配して、あんでも旦那様の處へ嫁つ子さんが来るのだから祝ひに大きな竹を截つて来てお嫁さんに跨がせいつて村中の山を捜して漸ど今日の亭午頃向ふ山で周圍一尺五寸もあるべしと思ふ様な太い竹を見つけた、それから大悦びしてよつくら截つて来べしと先刻早く出て行つたがモ一少し前に歸つて来て、截りは截つたがあんまり大きな竹だから逆も一人で持ちきれぬ、何うぞ由藏どんと一緒に来て呉れ二人で竹を曳つて来べしと大急ぎで出て往つたからモ一歸るに違ひぬ、あんでも竹跨ぎの竹は大きいのに限るよ、嫁つ子さんがゑんやちやつと跨ぐ様なので無くつちや縁起が悪い、太さ一尺五寸もあつて長さは九つた五尺の物を作藏どんの力で持ち切れぬと云ふだから、何んなに大きいものだが、無美事な竹だんべし、ソラ作藏どんと由藏どんが裏口から歸つて来た、早く持つて来さつせいよ、嫁つ子さんが来ちまつた、なんと大きな竹じゃぬ



いか、あんまり大きくつて嫁つ子さんに跨がれるめえ」作藏「跨げなけりや  
奴婦人が抱いて跨がして呉れらあ」と持ち来りし青竹を玄關の前に横たへたり、  
家の者は青竹の彼方に跪きて嫁御察の来るを待つ、程無く入来れる花嫁の一行、  
青竹の前に足を停めて一同家人に挨拶しけるが此時まで口に念佛の聲を絶たさ  
りし太郎兵衛老人、媒灼役の務めとて恐る／＼花嫁の前に進み「サア貴嬢は何  
卒此の竹をお跨ぎなすつて」と促しける、雲岳女史聲鋭く「ナニ妾をして此の  
竹を越えしめんとか、先づその理由を聞いて而て後に去就を決せん」と左右の  
肩をムツ／＼と怒らせて大きな口を尖らせれば劇て、袖を惹く父の老人「コ  
レさ、此でまた愚圖／＼言ふのでは無い、是は嫁が二度と此家を出ない云ふ  
譯で昔からする竹跨ぎだ、早く跨いでお了ひよ」と心配しつゝ娘を諭す、雲岳  
女史大口開いて呵々と打笑ひ「愚俗々々、嫁の趨舍去就何ぞ竹の知る事あらん  
や、妾は俗流の迷を解ひて自ら無常に念經を示さん」と振袖の袖をクルリと掲  
げ太く逞ましき毛だらけの片足を竹の真中へ踏がけしがウムと力を入るればさ  
しもの大竹、節も溜らザメリ／＼と潰れたり、呆るゝ人々、作藏も由縁も茫然

として口を開きたり、雲岳女史大音に太郎兵衛夫婦を顧み「アイヤ月下氷人、  
願くは妾の言を家人に致されよ、妾が心の直きこと猶ほ此の竹の如きものあら  
んど」太郎兵衛夫婦は何うなる事かど顔へ上りて齒の根も合はず、意氣揚々た  
る雲岳女史、竹を踏まへて快然と天地四方を睨めしが懸て敷石も揺がん許りに  
ズシリ／＼と足音させて玄關口へ乗り込んだり、颯と吹く風は振袖の裾のあふ  
りにやあらん、

御祝言

「ちよいとお鍋どん、和女は今の嫁さんを見たかえ、マア何といふ大きな女だ  
らう、爾して今あの竹を踏み潰した方なんぞは相撲取だつてかなはないよ、作  
藏どんも由縁どんも呆れて了つてあの竹計り見て居るよ、奥ではモ一御祝言が  
始まるだらうが、あの嫁さんが何んな風をして御祝言をするかちよいと往つ  
て覗いて見やう」此家の奉公人ども花嫁の勢ひに驚きて互に袖を惹き合ひ、廣  
間の次に來りて竊に様子を窺ひける「ちよいとお蓋どんや、惜しい事にお嫁さ  
んが向ふを向いて居るから此方からよく分らないけれどもあの綿帽子の大きい

こと醬油樽へ綿でも被せた様だ、それに腰の周圍なんぞは牛でも臥て居る様だ、お振袖の裾を八方へ擴げて居るから廣いお座敷も狹く見える、丁度お嫁さん獨りで四疊の邊を塞げて居るよ、お嫁さん計り大きいから外の人達の小さく見えること、旦那様なんぞもイヤに羞かしがつて下計り向いて小さくなつて居なさるゝら、丸で蚤の御婚禮でも言ひさうだ、アラお嫁さんが動いたよ、家中がユラ／＼としてさ、行儀の悪いお嫁さんじやないか、ちやいんど坐らないで片足を横に出して居るよ、ホラ御覽、裾の脇から足袋が見えるだらう、ナニ足袋ではあるまい、風呂敷包だつて、ナニ足袋だよ、あんまり大きいから足袋とも思はれないがよく見ると矢つ張り足袋さ、妾は初め此方の方へ出て居るのを腫だと思つたら親指なのだよ、妾達の腫よりも親指の方が大きい様だあの足袋は何文あるだらう、十三文甲高と云ふのは随分見た事もあるがあの半分位しきやない、爾うして見るとあの足袋は二十六文位もあるカチ、オヤ／＼彼處の憑が少しへこんで居るよ、屹度お嫁さんの重みで根板が抜けたのだらう、オホ大變だ」と口善悪無き女ども勝手な事を評し合ひて様子如何にと眺むる内、

纏て祝言の盃事は始まれり、下婢どもは念よ興に入り「ソラ始まつたよ、ソラ旦那様がお盃をお執りなすつた、ソラ今度はお嫁さんの方へ持つて往つたよ、アラお嫁さんがチユイと言をさせてお酒を飲んで了つたよ、まだ足り無いと云ふ様な風を仕て惜しそらにお盃を振つて居るよ、ソラ今度は二度目のお盃だ、旦那様は飲む真似をして口をつけた計りだがお嫁さんは又た飲んで了つたよ、お酌も氣が利いて居らあ、お嫁さんの様子を見て今度は盈々どついでだからお嫁さんはクイ／＼と言つて飲んだよ、三々九度のお盃と云ふから幾度もおれを飲むのかチ、大抵な人ならあの位飲むと酔い倒れて了ふのだけれどもあの嫁さんは平氣なものだ、アラお嫁さんが嘘をして障子の紙がビリ／＼つて震へたよ、浴屋で無くつて仕合せさ、アラ隣の跡で手巾を出して鼻をかむで、大きな音だチ、隣村まで聞えるだらう、ちよいと御覽よ、お座敷に居る外のお客は呆れて了つてお嫁さんの方計り見て居るからさ、ソラお媒人が立つたよ、今にお嫁さんの綿帽子を取るとお嫁さんが旦那様の側へ行つて和女を頼りにと言ふのだチ、あの力でホンと肩を叩かれたら肩の骨が折れるだらう、何卒お手柔に願ひ

より高砂の謠など誦ひ出さんと待ち構へたるに花嫁の口上格を破りて今は何とせん術も知らず、媒人の太郎兵衛夫婦も何うなる事かと震ひ怖れて迂濶には口を出さず、父なる老人「コレさ〜」と低聲に娘を戒むれども娘は更に耳へも入れず、呑ん計りの勢ひにて愈と花嫁の側に進み寄る、花嫁は愈よ身を縮めて腹に取られし雀の如し、席上水を打つたる計り、きんとして聲を出すもの無し、次の間なる下婢どもは氣味が悪き心地して「ちよいとお鍋どん、何うしたのだらう、お嫁さんが何か旦那様に掛合でも仕て居るのかテ、旦那様は可哀想に獨りで困つてお在なさる、初めの内は顔を紅くして羞かしい様な様子だつたが段々怖くなるで見えてお顔の色が青くなつたよ、ホントに心配だテ」

と次の間さへひつそりとなりて家の内は音もせず、良ありて雲岳女史の大層寂寥の中に響きぬ「如何に郎君、何が故に妾が言を閑却するや、妾は郎君を以て所天となす、然らば則ち爾來永く郎君を憐れみ、外に在りては郎君の爲めに人の侮を禦ぎ内に在りては家を治めて婦道の龜鑑たらしめんと期す、然るに郎君、何の理由を以て敢て妾と誓はざる、郎君それ妾を嫌忌して爾く冷々然たるや」

ますオホ、ソラ〜お媒人が綿帽子を取つたよ、オヤマア、お嫁さんは中腰にならないでウムと言つて立つて了つたよ、ホラ歩き出した、家が揺く様だテ、ソラ旦那様の側へ坐つた、旦那様が恐がつて小さくなつたこと、外の客は「爾うとも〜」と言はうと思つて兩手を出して待つて居るよ、ソラお嫁さんが何が言ひ出した、大きな聲だ」と愈よ覗き込む、

花嫁の雲岳女史は威風凛々として今花嫁の傍に在り、松の根の如き太く逞まじき腕を伸ばしてウムと花嫁の袖を執へ、一際優れし大音にて「アイヤ郎君、妾既に郎君に嫁す、郎君それ妾を愛し、妾を敬し、妾を尊び、妾を重んじ、妾を説り、妾を助け、妾を養ひ、妾を庇ひ、苦樂貧富、行藏去就、死生も存亡も皆な是れ妾と俱にして終生永く渝る事無きや否や」と自家獨創の口上を述べ、頬の磨れん計りに花嫁の顔を覗き込む、花嫁の源吉、譯も分らねば小さくなりて下を向き「ヘイ何うも恐れ入りました」と眞紅になりて頭髪を掻く、坐客一同は張合扱けたり、花嫁が例の口上を述べなば爾うとも〜と調子を合せてそれ

郎君よ

と曇みかけての質問に花婿は當惑して顔より汗を流し、「何うも恐れ入りました」と隙もあらば逃げ出し度き様子、座客一同は先程よりの手持無沙汰に耐え兼ね、此の邊りにて調子を合はせずは遂に祝ふへき折も無けんを俄かに一人聲高く「爾うともく」と手を拍てばその真似をする一同が「爾うともく、お目出度う御座い」と手を叩くやら囃すやら、席上俄に沸き立ちて中には氣の遠き連中は習ひ覚えし小話を「高砂や此の浦舟に帆を揚げて月もろともにいで潮の」とどうも聲にて話ひ出す、騒ぎに紛れて花婿もホツと云て息を吐く、安心したるは太郎兵衛夫婦「ヤン、何うか是れでマア濟んで呉れは宜い、口上が濟めば今度は床盃だがお座敷でさへ大事が始まらなければ跡は少し位な事があつても酒の騒ぎで紛らして丁ふ、サア婆さんや、早くお嫁さんに向ふの座敷へ連れて行かう」と老人夫婦立上りて雲岳女史の側に來り「サア貴嬢、是から向ふへおいでなさい」と手を執りて誘はんとすれども雲岳女史更に動かず「否、妾は未だ要領を得ず、乞ふ郎君をして一言たりとも妾の前に誓はしめよ」と太郎兵衛「また爾んな事を被仰つて、お婿さんも御一緒にいらつしやるから何かの事

は向ふのお座敷で」雲岳女史此に於て傲然と身を起しけるが誘はるゝ方へは往かずして座敷の中央へ仁王立に突立上り「然らば妾は此の席上に於て一場の演説を試みん、アイヤ諸君よ」と雷霆の如き聲滿場に響き渡り騒ぎかけたる座客一同は忽ち小さくなりて口を緘みぬ、

席上演説

雲岳女史先づ手巾を出して勿時らしく口を拭ひ、エヘンと一聲天井の蠅も落ちん計りの咳拂ひして徐ろに坐中を睥睨し「扱諸君、妾は今夕の最も祝すべき最も慶すべき華燭の盛典に際して聊か平生の意見を吐露せんと欲す、元來結婚は人倫の大禮、是れ諸君も熟知せらるゝ所なるが或る點より觀察すれば結婚は一家族が革新の大期限なり、即ち親子兄弟と稱する血族の一團結中に新に異分子を加ふものにして、一方にはその異分子より子孫を生じて新家族の基礎を開き一方には舊來の家族次第に離散消滅して譬へば人間の新陳代謝を行ふが如し、然り而してその新家族の帝王たるものは何である、疑も無くその家の花嫁である、花嫁たるものは真人に對して將來の良夫人たり、子孫に對して將來の賢母

たり、一の家庭を感化薫育して國家の爲めに偉人傑士をも作り出すべき一個の大勢力なれば之を迎ふるもの宜しく禮を盡して之を尊敬愛護すべきに世間の花嫁に對する待遇法は往々妾が意に充たざるものあり、今日の社會に於て花嫁たる名稱は一の不幸慘憺たる境遇を暗示するなり、眞人に對しては如何なる命介にも黙従し、無理を言はれても忍んで之を聽かざるべからず、眞人に不品行あるも泣いて嫉妬の念を押へざるべからず、而して姑には憎まれ、小姑には窘められ、家附の奉公人にまで氣兼ねざるべからずとは是れ今日に於ける花嫁の境遇なり、尙も新家族の帝王となりて將來の家庭を左右すべき花嫁なるに之れを斯の如き不幸の地に置くは強健なる國民を作り出すべき所以にあらず、よしや世間の花嫁は如何なる境遇に陥ればとて少くとも妾一個は、即ち今日以後此の和田家將來の帝王たるべき雲岳女史は斷乎として世間普通の花嫁視せらるゝを肯ぜざるなり、世間は往々花嫁を誤認して給金無し奉公人と思ふものあり、或は爾く思ふにあらざるべきも夙夜唯憂所にて追ひ廻し奉公人にすら忍び能はざる難題を花嫁に課して平氣なるものあり、或は花嫁を誤認して眞姑の小間使

となし、眞姑の用を達すの外何事も爲し得ざるものあり、妾は斯の如き運命を擔ふて此の家に來りしにあらざ、妾は眞人たる源吉子を助けて天下萬世の大業を成さしめ、又天子孫を薫育して國家に幾多の英雄を供すべき至大至重の天職を帯びて來りしなり、尙も此の天職を帯びて來りしは和田一家の事悉く皆な妾が經給に任すべし、或は妾を世間普通の花嫁と誤認して妾か天職を行ふの妨害をなさば忽ち天の神の罰を受けん、是れ和田一家の人々のみならず、此地に生れて妾の醫咳に接するものは今日以後常に妾の教を受けて文明日新の民たるべし、妾は一方に鄉黨を感化すべき天職を有す、是れ先覺者は他人の蒙昧を啓くべき義勝あるなり」と此まで説き來りしが喉の渾きければ忽ち後を顧み「コレ、誰かある、コップに水を持って、奉公人は居らんか、和田家の奉公人どもは居らんか」と例の大音にて怒鳴り立つる、次の間なるお鍋とお蓋は背くなり「ちよいと何うしやう、水を持って往かないと大變だが妾は厭だから和女往つてあいでよ」「アラ妾だつて厭だ、あんな人の側へ往くと喰ひ殺されて了ふ、作藏どんか由藏どんでもお願ひよ」と相談容易に纏まるべくもあらず、雲岳女史

今度は花婿に向ひ「アイヤ源吉子、妾は敢て郎君に一投足の勞を累す」花婿が分らず「へい何うも恐れ入りました」

憲法制定

兎角の中にコツプの水は下男作藏由藏の二人に頼りて恭しく雲岳女史の前に捧げられたり、女史は一息にコツプを傾けて再び口を開き「此に於て妾は和田の人々と契約すべき條件がある、第一の條件は一家に於ける各人の権限を定めて取てその権限を争はざるにあり、妾情々世間の有様を見るに家族中の争ひは多く権限の争ひである、己は亭主だから此位な無理を女房に言つても構はない、己は舅姑だから此位な無理を嫁が耐えても宜さうなものだ、などと権力を婚にし無理を通さうとするのが争ひの原である、また嫁の方でも最初の内は涙を飲んでその無理に服従するが追々子供が生まれ歳月が過ぎて舅姑達が老衰でもする場合には今度は以前の復讐が始まつて、舅姑達を厄介物と心得、我が子に美味い物を喰はせても舅姑にはその剩餘も遣らないと云ふ様な事も出来る、お婆さんは邪魔だから與へても引込んでおいでなさいよなどと嫁の権力を凌

駕する時となれば婆さんも齒の無い土手を噛んで、家の嫁は憎つくい奴だ妾を邪魔に仕てなぞと権力の争ひが起る、元來一家族間の關係は和氣霽々として最も交情の親密なるべきものである、他國人と同國人と孰れが親しきやと問はれ誰も同國人を親しと云はん、他村の人と同村の人とは同村の人親しきが當然なり、然らば則ち他人同士よりも家族内の人が最も親しかるべき道理なるに、他人同士朋友の交際をなせばその交情春の如きものあつて、他人同士一家族をなせば却て反目する如き場合がある、己の女房は馬鹿で仕様が無いとか、家の嫁は困りものですか或は家の姑は無理計り言つてなぞと最も親しかるべき家族内の人を擧げて他人に讒訴する如き事は世間に往々見る所なり、是れ乖理の尤も甚しきものにして一家族内の交情は朋友間の交情よりも一層親密なるべきに却て世間乖理の事多きは畢竟するに日夜権力の争ひをなして一進一退長くその権限の決せざるにあり、結婚後一二年間は嫁の権力甚だ微々たるものである、真人に對し舅姑に對し或は小姑に對し一層甚だしきは奉公人に對しても自ら権力を護る如き場合がある、然し漸くその家に落付いてよりは真人の機嫌の好き

時權力俄に膨脹し、舅姑の不在なる時同じく膨脹し、之に反して良人に衣服をねだる時或は舅姑に土産物を貰ふ時など俄に自ら權力を縮小す、或は良人の性質に頼り或は舅姑の人物に頼り嫁の權力は常に伸縮消長極り無きものである、唯一方の權力の伸ぶる時は一方の權力の縮まる時にして伸縮消長の働きをなす毎に必ず衝突して争ひとなる、是れ一に権限の定まらざるが爲めなり、看よ朋友間には權力の争ひ無し、故に衝突する事も無くして長く交情の親密を保ち得るなり、妾は先づ最初に於て和田一家の憲法を制定し、各々権限のある處を定めて長く權力の争ひを生ぜざらしめんと欲す、妻と良人とは權力固より同等なり、否場合によりては妻の權良人よりも重き事あるべし、是れ天則の定むる所なり、嫁と姑とは固より權力に差等あり、妾は敢てその差等の程度如何を論ぜず、唯憲法に制定したる権限を保ちて長く交情をして春の如くならしめん、妾一旦此の家に嫁したる上は世間廣しと雖も和田一家の人々より親しきものは無しと信ず、願くは和田一家の人々も妾を看ること他人よりも輕きこと無しらしめよ、斯の如くにして冀くは完美なる家族制度の下に和氣飄々たる交情を保つ

ことを得ん、是れ妾が呈出する第一の條件なり」と説き了りて再び水の催促、

家内法律

「扱諸君、世間には随分譯の分らん事が多い、虎列刺が流行して病毒國中に蔓延すればヤレ豫防法ソレ消毒法と騒ぎ立て、腐敗した空氣を清潔にするが、一族内に病毒が蔓延して家内の空氣が腐敗しても更に清潔法を行ふものが無い、然るに家内の空氣が腐敗すれば一家の人悉く病毒に犯されて其家に非常なる不幸を醸す、家内の空氣が腐敗するとは如何なる時であるかと云ふに一家の人が悉く不愉快の感覺を起す時である、如何なる時に不愉快の感覺を起すかと云ふに一家の人々の中に忌味とか當こすりとか愚痴とか泣事とか或は壁訴訟、而當など云ふ事を行はるゝ時である、是れ一家の空氣を腐敗せしむべき病毒である、北里博士も未だその血清療法を發見し得ざる細菌である、荷も一家の中に各人の權限確定して敢て權力を争ふ事無く和氣飄々としてその交情親密なれば決して此等の病毒が發生する患無し、然るに不幸なるかな、世間の家族殊に嫁を貰ひたる後の家族は多く此の病毒に苦めらるゝ、一人忌味を云ふ者あればそれ

を聞く者忽ち不愉快の感覚となる、忌味を言ふ者は固より愉快なる顔色あるべからず、然らば忌味を言ふ者と聞く者と二人が先づ不愉快の色をなし他にてその不愉快の顔色を眺むるものも忽ち不愉快に傳染して一家何口ありとも一瞬間に皆な不愉快顔の勢揃ひとなる、當てこすり愚痴泣事壁訴訟の如きも皆な然り、斯くて一家内の空氣一たび腐敗すれば不愉快の精神ほど消化機能を害するもの無き故に忽ち胃病を起し腦病と變し頭痛と化し血の道となり、疝氣寸白其外百四病の遠因は皆な原を此の腐敗空氣に發するもの多し、それが爲めに各人の元氣も消耗し、家道も衰え、病患も襲ひ來る、此の病毒ほど厭ふべく思むべく懼るべく避くべき者はあるべからず、看よ朋友間には決して忌味當こすり愚痴泣事壁訴訟面當等を言ふ如き必要なし、何となれば權力の争ひ無き故に言はん

り、故に和田家の憲法を制定すると同時に此等病毒に關する法律を定め、一人にても忌味當こすり以下の言語を吐くものあらば直ちに家族會議を開き、その言果して罰則に當るや否やを議決して、決議に従ひ犯罪者を處罰すべし、而してその罰則の如きも妾に一の名案あり、忌味は酸きものなれば忌味を言ひし者には十日間毎日一合づゝの酢を飲ましむべし、當こすりは辛きもの故は毎日唐辛を嘗めしむべし、その分量と日數は當こすりの程度に據るなり、愚痴は澁きもの故にその罰は澁柿を食はしむ、澁柿の無き時は澁紙の臥床に換へても可なり、泣事は凍冷き故に氷の罰、壁訴訟は茶斷の罰、面當に至りては最も苦きもの故に三食必ず一顆の熊膽を嘗めしむべし、斯の如く法律を定めて各人之を道奉せは永く一家内の空氣を清潔にして病毒の發生を防ぐべし、渾て不愉快と云へる事は決して和田家の空氣に交へざらしめん事を要す、是れ小にして一家繁盛の基、大にして一國興振の根原たり、妾は此事を以て第二の條件となす、續いて第三の條件は「と口に泡沫を飛ばせて饒舌り立つれども坐客は耳に入りかたてや或は聽きても解らぬにや席に就いて眠るもの多し、中に一人ぬつくと



立つて「賛成々々、僕は花嫁君の議案を賛成す」と呼ぶものあり、

奉公人

賛成者を得て雲岳女史俄に鼻が高し「オ、我黨の人、乞ふ妾が前に來れ」と相  
きけるに坐を立ちて進み來れるは年の頃三十五六、顔は横に平たく、眉毛薄く  
鼻低く、至て品格の無き男なるが鼻の下に五六本生へたる鬚の、丁寧に其先を  
捻られたるは是こそ大切の身上なるべし、羊羹色のフロツクコートに黒き襟飾  
を倒まにかけ、煤けたるゴムのカフスに金メッキの半ば剃げたるボタンを大層  
らしく見せびらかすは餘程得意の襟子と見えたり「アイヤ花嫁君、本日は隣村  
の村會議員畑野空郎次ちうものであります、元來我邦の文明は既に政治界へ應用せら  
大賛成を表する所の次第であります、

ならず、それ然り豈にそれ然らんや、家の人と奉公人との關係に至りては徹頭  
徹尾野蠻の習氣を帯びて居る所の次第であります、蓋し則ち其故如何となれば我邦の奉  
ちう奴隸制度に近い所の次第があります、公人は勞力を主人に賣るので無くして身軀を主人に賣る様な次第でありまして、  
公人は勞力を主人に賣るので無くして身軀を主人に賣る様な次第でありまして、  
第一に自由の時間ちうものがありません、歐米の文明國の如きは下女下男と雖  
も一日の勞力を幾時間と定め、その時間後は自分の身軀になる所の次第であり  
まして、加之ならず、搦て加へて、通常の家にて日曜日は休暇を取り、忙しき  
家にては隔日曜には必ず奉公人の休暇があります、故に奉公人はその時間に夜  
學校又は日曜學校に通ひ、相當の教育を受ける事も出來ますし、或は他の内職  
をする事も出來ます、然り而してその休暇時間に主人が奉公人に依頼する事  
れば先づその勞力の代價を協議して奉公人承諾の上用事を頼むちうこんであり  
ます、それ斯の如し、譯て我邦の有様を見るに奉公人は日夜唯主人に追ひ廻さ  
れて自分の時間ちうものは一年二度の裁入の外はありません、夜は主人が夜更  
かしをする爲に十二時迄も一時迄も起されて、朝になると主人は九時迄も十時

迄も寝坊する癖に奉公人は四時か五時に起きなければなりません、是れ則ち自分で教育を受けるところか人々の健康上最も必要なる睡眠時間さへも足りない。ちう所の次第であります、而して主人の如く午睡をする事もならず、坐つて居て居睡りをすれば舟を漕ぐちうて悪く言はれます、實に我邦の奉公人はどの悪いものはありません、蓋しかるが故に本員天下の潮勢を察するに官吏は政府の奉公人なり、役員は銀行會社の奉公人なり、同じ奉公人でも官吏や役人には毎日の勞力時間に制限あり、日曜大祭の休暇もあり夏には暑中休暇さへもあります、然るに下男下女或は丁稚小僧番頭權助と稱するものゝ如きは睡眠時間までも主人に捧げて其上に如何なる酷對を受ければとて更に訴ふる所がありません、官吏や役員や或は他の人々は少しく心に不平あれば忽ち新聞紙にて議論を始め或は演説會等に意見を吐露して盛に不平を泄らしますが、奉公人の如きは口も無く手も無くしてその不平を泄らす事が出ません、主人の言葉に無告の民ちうは則ち是れ斯の如きの謂であります、此に於てや則ち蓋し本員が天下の奉公人社會を觀察して、機會あらば奉公人と主人との關係に一の憲法政治

を履行せんと欲する所の次第でありまして、奉公人その者に辱無しと雖も奉公人は人民の大部分を占めて居ります、その大部分が今日の如き不幸の境遇にありまして自分の智識を増す事も出来ず夜も寐に寝られないちう次第では自然と身軀も弱くなつて一國の元氣にも損害を來します、我邦は眼前に國敵を叩いて居ても今にも會替の恥を雪がらんちう場合であるのに此の大切な奉公人問題を却するのには世人の不注意にあらざる無きを得んやちう次第であります、今花嫁君の助議の如く家の中に憲法を定めて罰則さへも定むるちうは文明を應用する良策であればその序を以て願くは奉公人との關係にも憲法を定めて貰ひ度い所の精神であります、是れ花嫁君の所謂家政革新の一大綱目でありませう」と聲を捻りつゝ滔々と辯じけるが此時俄に家の四方よりドツと擧げたる閃の聲に連れて兩戸に當る石礫の音ペラ／＼、雲岳女史何事ぞと尋ねる太郎兵衛老人が「是れ石祝ひです」と答ふるや否や雲岳女史奮然として玄關口へ躍り出で「來れ、妾が俗人の迷霧を排せん」と先に踏み潰したる竹踏みの大竹を手に執つてリウ／＼と打ち振り、門前に群がりし大勢の中へ礫も霑れず阿修羅王の如く

に飛び入つたり、

石祝ひ

花嫁が門外へ飛出せし後、座敷にては來客達が雲岳女史の噂どりと、「何うです空郎次どん、あの嫁さんは好いのでせうか悪いのでせうか」と問ふは此家の親戚某、答ふるは先づ村會議員「イヤ好いとも悪いとも會員敢て品評を下し得んけん先づ當代無双の女家傑とも稱すべき所の次第でありまじう、譬へば昔の板額を洋行させてマヤンナクの子分にでも仕たる如きもの、殊には久しく東都に遊學して文明日新の教育を受けられたからその舉動の活潑なる所とその見識の激越なる所は到底他の婦人輩が企て及ぶ所の次第でありませぬ、他日我邦が婦人に被選權を與ふるの時節とならば當國の破天荒となつて第一若の婦人代議士に選舉せらるべきものは必ずあの花嫁君でありませう、爾うなれば彼も亦た當國の一名物、決して侮るべきものでありませぬ」親戚某「爾うだか知らないが私共は唯モ一呆れ返つて了つて何とも彼とも言ひ様かありませぬ、和郎さん達は他人だから宜いけれども私共は親類だから此先に何事が起つ

ても直ぐ引合に出なければなりません、あんなお嫁さんが此の家に居たら毎日騒動計り起るでせう、誠にハア氣支ひな事で」村會議員「それは起りますな、必ず起ります、毎日とは言ひませぬ、朝に晩に起ります、花嫁君は日新文明の思想を以て家庭の憲法を定めんと云ふ勢ひであるのに失禮ながら御當家の入遣はまだ昔風の舊習を脱せんから事々物々衝突が起りませう、その度び毎に必ず親族會議を開いて理非曲直を判別するとか何とか言つて和郎さんなんぞは毎日毎日御當家へ呼び出されませう」親戚「イヤハヤ飛んだ事で、何うか今の内に何とか好い工夫はありますまいか、マア一つ當家の主人に相談でも仕て見ませう」と折ふし奥の座敷にて老母と何事か語らひ居たる主人源吉の前に至りぬ、「モシ源吉さん、外でもありませんが、マア今夜のお嫁さんは何うです、お目出度いと言はうか、お目出度く無いと言はうか、貴郎は何う云ふお心持ですか、それを一つ伺ひ度いもので」と語る側から家の老母も「妾も今是れに其事を申して居る所で御座います、何んぼ學問が出来ると言つても、何ぼ好んで貰つたと言つてもあんなものを嫁だなんぞと人様へ對して名乗る事が出来ませぬ、そ

れに先刻饒舌つた事は何だか些つとも分りませんでしたから今學校の教師さん  
にお聞き申したら、是から先は規則とかを極めてもし規則に背いた事があれば  
多でも誰でも酢を飲まされたり唐辛を食べさせられたりするので、妾な  
んぞは此の年齢になつて身躰も弱くなつて居ますのに酢なんぞを飲ませられて  
は死んで了います、マア何處の國に嫁が姑に酢を飲ませるなんぞと云ふ家があ  
りませうか、妾はモ一怖くつて〜一日もあんなもの、側には居られませんよ、  
だからまだ床盃の濟まない内に何とか媒妁人に相談して還せるものなら連れ  
て返つて貰ひ度し、それとも此子があんなものでも嫁にすると云ふのなら妾は  
今夜直ぐ何處へか往つて了はうと思ふのです、嫁の癖に何たる事でせう、自分  
が竹を持つて表へ飛出すなんて、屹度大勢に石でも投付けられて今頃は動けな  
くなつて居ませう、石と云へば今あれが飛出してから石の來るのがバツタリ止  
んだが何うしたらう」と表の方を差覗く時、青くなつて駆け來る下男作藏「且  
那樣大變で御座います、今あの嫁子さんが」老母「石でも投付けられたかえ  
作藏「ナニニ嫁子さんが大竹を振廻して村の若い者十三人怪我を仕ますし、

田の中へ轉け込んだものか二三十人もありませう、それで今大騒ぎです」

汝

猛虎一たび嘯いて群獸忽ち整伏す、雲岳女史は奮迅の勢を以て若者どもを追散  
らし、凱歌を奏して悠然と家の内に入り來りぬ、坐客一同も疑ひ懼れて敢て仰  
ぎ見るものも無し、太郎兵衛夫婦は先程より口に念佛の聲を絶たず、奥の間な  
る源吉母子も今は相談を續くべき勇氣も無し、家の内はシンとせり、雲岳女史  
も手持無沙汰の氣味、忽ち奥を顧みて會釋も無く襖を開き「アイヤ郎君、乞ふ  
妾が前に來れ、妾は未だ心に安せざる所あり、願くは來客一同を證人として郎  
君が宣誓の辭を聞かん、郎君一たび妾を娶る上は能く男子の貞操を守り決して  
他の婦人を愛する事無く、妾に對して永く尊敬愛護の禮を欠く事無きや」と花  
婿の前に詰め寄する、花婿は頭を掻き「ヘイ何うも恐れ入りました」雲岳女史  
「イヤ恐れ入るに及ばず、郎君は妾の言を解せぬと見えたり、誰かある、郎君の  
爲めに妾の言を通譯するものは無きか」通譯官是にありと飛び出したる村會議  
員「モシ源吉さん、今も嫁子さんの被仰るのは斯うして婚禮の濟んだ後は何處

までも嫁子さんを可愛がつて決して見捨てないかと云ふ事です、ハイと返事をなささい、爾う云はないと大變ですよ」花婿泣聲に「ハイ」と答ふるや否や雲岳女史欣然として源吉の手をウムと握り「万歳々々、妾は其曲を聞いて満足す、願くは今夜の祝意を表する爲め妾と共に立つて舞踏せよ」源吉「ハイ葡萄なんぞはまだ御座いません」雲岳女史「誤解々々、舞踏は文明の踊なり、妾が郎君に教ゆる所あらん」源吉「お待ちなさいよ、貴女が踊ると根板が振ります」雲岳女史屹と容を改め「異なるかな、郎君妾を指して貴女と呼ぶは決して親愛を表すべき語にあらず、文明流の文法に随へば他人を指して卿と云ひ親しき者は汝と呼ぶ、然るに我邦は徒に無用の稱呼多く、人を指してアナタと云ひ、オマへと云ひ貴様と云ひ其方と云ひ、マシと云ひ、オマへさんと云ひ、手前と云ひ、君と云ひ其他枚舉に遑あらず、是れ人をして無用の智識を蓄へしむる所以にして人文發達の一妨害なるが、殊に不公平なるは夫婦間の稱呼なり、良人は妻を和女と云ひ、妾は良人を貴郎と呼ぶ、貴郎とは尊稱、和女とは見下げたる言葉なり、尙くも男女は同權夫婦は一體たるの文明世界に於て斯の如き男尊

女卑の不公平あるべけんや、稀には妾の知人雲野學士の如く夫婦互にアナタと呼ぶの家あれども泰西の文明國にては夫婦互に親愛を表して汝と呼ぶ、今妾此に嫁して家を文明流に革新するの今日何を苦んで東洋の蠻風に随はん、今より後郎君妾を呼ぶに雲岳汝と稱せよ、妾も亦た文明流に郎君を呼ばん、いかに源吉、汝は妾と共に踊らざるや」源吉先生は途方に暮れたり「何うして宜いのか分りませんなあ」坐客の中に氣轉者あり、此の有様を見て長居は無用と「サア皆さん、モトも開きに致しませう」

元 服

斯くて祝宴は開きとなりぬ、雲岳女史の勢ひに懼れて婿も姑も別に苦情を持ち出さざれば婚禮式も滞り無く済み、媒妁人の太郎兵衛夫婦は命拾ひせし心地にて家に歸れり、翌日早朝新夫新婦は相携へて老母の前に至りぬ、昨夕より今朝被り度し綿帽子とは此の花嫁の事ならで花婿の源吉が却て間の悪るそうにかしがる、雲岳女史は自若たり「阿母、妾は阿母の健在なるを祝す」と是が異俗の挨拶と見えたり、老母は返事に困り「何だとエ、ナニ挨拶だつて、爾うか

「ハイ先づお早う、時に和女、今日は早速元服を仕て明日は元服姿でも里  
 開きに往くのだからその積りでおいで」雲岳女史「元服とは是れ如何に」姑  
 「元服を知らないのかえ、酸漿をつけて眉毛を落して丸鬘に結ぶのだあ」雲岳  
 女史「咄、愚俗々々、齒を染め眉を落す如きは野蠻の風習、文明の女子が敢て  
 成さるる所」姑「何を言ふのだえ、和女はモット分る様に口を利いて呉れよ、  
 それで無いと話しも出来ないから、ナニ酸漿をつけたり眉毛を落とすのは厭だ  
 どかえ、厭でも仕方が無い、嫁に交れば元服をするのが當前だ、それに里  
 開きの時は此方で悉皆元服させて衣服でも櫛笄でも新しく拵へて遣つたもの  
 着たり拵したりして往くのが和女の嗜れだあ、此方だつて其積りで昔んな用  
 意が仕てあるよ」雲岳女史「否々、野蠻の風習は衛生に害あり、譬へば眉の如  
 きも是れ無用の長物ならず、眉は以て兩眼を保護するものなり、日光の直射す  
 る時、汗の流れて眼に入らんとする時或は細塵の上より落つる時の如き眉あり  
 て始て兩眼を護るべし、奇くも相當の任務ありて人眸の一部を成すものなれば  
 之を剃り落すが如きは人身の生理を知らざるなり、齒の如きも天生の白色を何

とて更に黒色に變せん」姑「ナニ齒を染めるのは悪いとえ、齒を染めるのが  
 い位なら白粉をつけるのも悪いだらうし白髪を染めるのも悪い譯だ、その癖  
 女は昨夕白粉を澤山つけて居たが今朝は剃げて處々斑點になつて居るよ、此頃  
 はヤレ半元服だの西洋元服だのと云ふが齒が白いと顔が怖らしく見えて不可い、  
 それに眉毛を落すのも何うだとえ、ナニ眼の毒だつて、これが眼の毒なら妾な  
 んぞは疾うに眼が悪くならなければならぬのだが六十にもなつてまだ眼鏡も  
 かけないよ」雲岳「イヤ特殊の場合を以て一般の證となすに足らず、然りと雖  
 も此の如き事は先づ源吉子の意向を質すべし、いかに源吉、汝は妾をして元服  
 せしめんと欲するや否や」源吉は閉口の様子「何うでもマアお勝手に仕なさ  
 ら」姑「それでは斯う仕やう、今元服するのが厭だと云ふのなら、せめて髪だ  
 けでも丸鬘に結はせて元服の事は後廻しに仕やう全昨夕なんぞも高島田で來  
 れば宜いのは何故そんな頭髪を仕て來たのだらう、丸鬘の鬘入も買つてあるか  
 ら妾が一つ結つて遣らう」雲岳女史も内々は丸鬘姿になつて見度し「然らば  
 母を呆さん、唯妾の毛髮長からず、願くは阿母の技倆を以て長からざるの毛を

長く見せしめよ」と相談決して姑は女史の髪を釋き「オヤ、是れ切りの毛かえ、斯んな毛では仕様が無い、入毛をすると言つても、頭の毛へ外の毛を入れる事は出来ないから、入毛の中へ頭を持って往つて突込まなくてはならぬ、そして一本々々にでも縛つて置かなければ動くと鬘が落ちて了うよ」と老人だけに手数を厭はず、半日はどかゝりて漸く花嫁の丸鬘を結び了りぬ「サア此の鏡で御覽、何うか斯うか丸鬘になつたから」雲岳女史「多謝々々、妾は何を以て阿母の恩に酬ひん」と鏡に對してニコニコ顔

里開き

その翌日は里開きとて大櫛村なる雲岳女史の家にてはオサ、用意怠り無し、親類縁者を呼び聚め、御馳走の用意、待受の支度、その中にも富嬢も甲斐々々しく家人の手傳ひをなせば主人夫婦は氣の毒がり「お客様、モ、何卒お手傳ひは止しなすつて下さいまし、ホ、ホに氣の毒な、娘の嫁入願ひで此方が却て色々お世話様になり、碌に近所を御見物おさせ申す事も出来ません、その代り今日が濟めば緩々此の近所を御案内申して當國一番の名所と云ふ引佐細江へ

もお連れ申しませう、ユ、ユ婆どんや、モ、和田の連中が出て来そうなものだ、娘が何んな風になつて来るか、お婿さんは何んな御様子だか、世間では娘を片付けると親の役目が濟んだ様に思つて安心するが、あんな娘を嫁に遣たのだから、跡が却つて心配さ、向ふへ往つてもあんな様子計り仕て居たら、お婿さんも愛想が盡きたらうし、お姑さんだつても氣には入るまいと思ふと案じられてならんが、今日まで何とも無いから先づ一旦は無事に治つて居ると見える、それに女と云ふものは幾ら亂暴の儀でも氣の弱いものだからお嫁にでも往くと急に様子が變つて従順しくなる事もある、あれも何うか爾うなつてあの家へ落付いて呉れ、ば宜い」と我子を案じる親の慈悲、老婆と共に門口へ出で娘の来るを待ちけるに、廳で向ふより土産物の釣臺を下男どもに擔がせ和田家の一行嫁婦人の太郎兵衛夫婦と共に進み来れり、老婆はホクホク悦び「モシ貴老來ましたよ、向ふから娘が来ましたよ、大勢の中でも身軀が大きいから一番目立つて見えますこと、ちよいと御覽なさいよ、娘が丸鬘になつて来ましたから、よくあの髪の手で丸鬘が結へたものだ、家で島田に結はうと思つても何うしても

結へなかつたつけ、向ふは大家だから上手な髪結さんでも濱松邊りから呼んだのか知らん、大家の勢ひは違つたものだ、オヤ貴老、お婿さんが見えません、源吉さんが今日一緒に来ないと云ふ譯はありませんのに何うしてあの中に居ないでせう」老父「ナニ居よ、彼處に見える、ソラ、娘の袖の下からチヨコチヨコ頭が見えるではないか」老妻「アラ、成程あれが源吉さんですチー、何うしたのでせう、まやがんで歩いて居るのでせうか」老父「ナニ、背が矮いから娘の袖の下に隠れて了つてちよいと眼に付かないのだよ、御覽な娘の足が速いから源吉さんは汗を垂らしてチヨコと騙け出して居る」老妻「可哀想に、娘もモット緩り歩けば宜いのに、一昨日向ふで見た時には坐つて居なすつた故か並の人位に見えましたけれども斯うして見ると大層背が矮いのですチー」老父「ナニ、娘の方が高過ぎるのだ、源吉さんだつて外の人に比べれば爾んなに矮い方でも無い、あの脇に居る太郎兵衛さんとは二三寸しきや違はない様だ」老妻「それにしても孰方か云へば並の男よりは少し背の矮い方ですチ、あれなら一反の衣服では餘つ程布片が残るでせう、丁度娘は三丈物でも一反では足

りないのですから一反買つて二人の物にするど宜い」老父「餘計な世話だ、源吉さんも此近所には珍らしい美男だがモ一少し背が高くつて大きかつたら尙ほ立派だらうのう」老妻「爾うしたら娘が念よ似合はなくなりませう、娘もあの位なお婿を待てばホントに女の幸福です、何うか件好くして呉れば宜い、オヤそれでも娘が源吉さんの手を執つて引張つて居ますよ、丸で子供が阿母さんにアラ下つて居る様です、オホ、」と何かにつけて娘の事を想ふ、想はるゝ娘は婿を拉して我が實家に入り来る。

東都の客

「ア痛々、いかに阿爺、何が故に此の鴨居爾く俄に落下したるや、妾は今鴨居に衝突せり」と玄關口に立止まる雲岳女史、老父は之を見て「ナニ鴨居が下つたのでは無い、和女が髻を結つたから髻が鴨居に當つたのだ、オヤ、丸髻が投て落ちて居るよ」女史の後に姑あり「無理に外の毛をくつゝけて置いたのだから根からソツクリ脱れて了つた」雲岳女史頭に手を揚げて「或程、鴨居頭を搦つて丸髻地上に落つか、患ふる事勿れ、妾は直に束髪を結ばん、束髪は爾く輕便



なるが故に文明流の結髪たり」とクル／＼毛を巻いて忽ち番の束髪とはなりぬ。家の老婆は惜しき事限り無し「せめてモ一少し後まで丸鬘がチャーンと仕て居て丸鬘の姿を皆さんにお目にかげ度かつた子、マア仕方が無い、サア何卒此方へ」と婿の一行を座敷へ誘ふ、座敷には親類縁者居並びたり、富嬢も今は空席に在り、花婿の源吉は一々座客に紹介せられぬ、中にも富嬢の前に至りて雲岳女史俄に聲高く「いかに源吉、妾は汝に當分の淑女を富嬢を紹介せん、是れ妾が骨肉に齊しき親友たり」と自分も富嬢の力に頼りて光榮の増す事を知るなり、果して光榮は増しぬ、婿も姑も富嬢の側へ寄りて一入丁寧挨拶せしが、殊に姑は熟々富嬢の姿に見惚れ「へい是が和女のお友達か子、斯う云ふお友達がある位なら和女もちつとは女らしく、ナニサ和女の幸福と云ふものだ、モシ貴嬢、何卒妾どもへいらしつて幾日でもお遊びなさいまし、妾どもには是も居りますから丁度宜う御座います、此方では却てお淋う御座います、う、ナンですか暫く此方に、ハア爾うですか、浪名を御見物に、それならば猶更、妾どもへいらしつしやる方が引佐細江へも近し、猪鼻湖へも便利で御座いま

す、のう源吉、今日からでも直ぐ家へお連れ申して近所を御案内すると宜いのう」源吉も心は同じ「左様で御座います、何を置きましても私が浪名中御案内申しますから是非何卒いらしつて下さいまし、斯ういふお方が被在るなら何故婚禮の晩にお連れ申さないのだらう、田舎料理で御迷惑でも少しは御馳走も出来たものを」姑「ホントだよ、あの時に来て下されば是れの方も何うとか仕様のあつたものを、唯モ一あの時は丸で夢中に濟んで了つたのだ」と何の事やら譯が分らず、雲岳女史は我が朋友を見て我が價值を知れと云はぬ計りに「惜しいかな是が東都彩雲の中なりせば妾は平生の親友數千人を一堂の中に會して披露の宴を開くべきに、あゝ遺憾なるかな、残念なるかな、いかに源吉、汝は妾の平生交はる所を知るか、妾の親友は華族諸家の夫人令嬢ならざれば貴顯紳士の子女にして金蘭の交をなすもの渾て數千人、一として當代の貴婦人たらざるは無し、又た當代の貴婦人にして妾の親友たらざるもの一人も無し、他日汝を携へて東都に遊ばし汝は妾が良人として交際場裏に忙殺せらるべし、妾は早く汝をして文明流の紳士たらしめんと欲す」と勝手な大風呂敷を掲げる時玄關に

頼むく人の聲、聽て下女入り來り「モシと嬢様、では無かつた御新造様、貴女の御友達だと云ふ方が東京から尋ねておいです」と聞いて悦ぶ婿と姑「和女は友達の方が立派だから、定めてエライ方だらう」婿「ナニかえ、華族様の姫君でもあるかえ」雲岳女史はハテナと思案の跡「名前は何か云つた」下女「何か言ひましたが分りません、不潔い服装を仕た男と女です」雲岳女史氣が氣で無し、自ら立つて玄關に出で見れば前に立てるは犬山生に細烟女史、

青い息

犬山生「ヤア雲岳女史、今聞けば君はお嫁に往つて今日が里開きだそうだし、マア目出度い事だ、時に僕等は君を頼つて遣つて來たのだよ、君の知つた通り、僕等は下宿屋の勘定も久しく溜まつてモ一到底あの家にも居られないし、と云つて東京にはぼた餅で叩かれる様な事も無し、仕方が無いから寧ろ地方へでも出掛りて何か旨い仕事に有付かうと苦しい算段をして東京を夜逃同様に漸と此まで出て來たのだ、此は君の故郷だから僕等二人位何うでもならん事はあ

るまい、何分宜敷お頼み申すよ、マア當分は君の家の御厄介さ」と遠慮も無くズン／＼上りかける、それに續いて細烟女史も「雲岳女史は大層綺麗な衣服なんどを着て東京に居た時分よりも女振りが上つたことよ、お嫁に往つた先は六層なち金持だと云ふぢやないか、此へ來る舟の中でも和女の様な幸福者は無いと云つて評判して居たよ、妾も國へ歸つてお嫁にでも往けば宜かつた」犬山生「何を抜かすのだ、面白くも無い、サア早く雲岳女史の婿君に拜顔しやう、君の婿君なら濫井玄藏の兄弟分でもあるか」と會釋も無く座敷に通らんとす、流石の雲岳女史も此の人々には閉口し「アイヤ、待て暫し、妾は今君等に接するの閑暇無し、乞ふ旅宿に歸つて妾よりの消息を待て」犬山生「馬鹿を云ふなえ、旅宿に泊まれる錢があるなら此んな田舎まで彷徨いて來るものか、僕等は囊中無一物だよ、おまけに腹も減つて居るのだ、早く御馳走に有付き度いチ」雲岳女史「咄、君等は謙遜辭讓の禮を知らざるか」犬山「アハ、謙遜辭讓も聞いて呆れらぬ、雲岳女史は去年僕等の錢で箱根へ往つた事を忘れたか、あの時にモ一少し謙遜辭讓でも仕て貰ひ度かつたチ」雲岳女史「あれは牛沼生の力な

り」犬山生「牛沼の物は則ち僕のもの、僕のは矢つ張り僕のものど極まつて居るのだ、爾も雲野學士から五十圓もぎ取つたのは全く僕の働きではないか、のう細烟女史、細烟女史も斯うなれば次第に氣も強くなり「爾うよ、雲岳女史は今更不人情な事が言へた義理ぢや無いことよ、あの下宿屋に居る時分、二人の會計を一緒に仕て居たが出した金は妾の方が七分で使つたのは八分通り和女だよ、和女は毎日鮎の買喰ひだの、天麩羅の立喰ひだのと幾ら妾の錢を使つたか知れない、今になつて爾んな事を言ふならあの時分の勘定を二つ割に仕て和女の方の不足分を取立てることよ」と此の男女容易に立去るべくも見えねば雲岳女史は生來始めて青い息を吹く、與より出で來りし女史の老父、娘の友達と云へば皆なお富嬢の如きものと心得「娘や何を仕て居るのだの、早くお客様をお座敷へお通し申さないか、是はくよくいらつしやいました、私が是れの父で御座います、東京では定めし娘が色々のお世話様になりましたせう、丁度外にも一人お友達が來ていらつしやいますからマア何卒此方へお入りなすつて」と獨りで新客を誘ふに、犬山生得たりかしこしと老父の跡よりついて往き「御老人、

僕等は旅先の事故斯様な風情を仕て居つてお目出度い座敷へ出るのも失禮ですが然しお娘のお願ひであれば僕等も朋友の義務として婿君にもお目にかゝりお悦びの一つも言はなければなりません、何卒皆さんへもあしからず御披露下さし」と辯口だけは中々如才無し、老父は其口にくるめられ「イエモ、何う致しまして、お友達のお方が澤山いらつしやるほど、お蔭様で娘の晴れになりさす」雲岳女史口の内に「否、此輩は妾をして曇らしむるのみ」座敷にては來客一同「それ東京のお客様が」と容を直し席を正す、中に聞ゆる耳こそすり「此の娘のお友達か」「ウムそれが華族様の殿様と奥様だよ」と語る處へ男女の書生キヨロくとして入り來る、雲岳女史は溜息計り「ア、天の神よ、願くは妾を救ひ給へ」

敷 蛇

男女の書生は席に着いて忽ちお富嬢のあるを知り「ヤア是れは珍らしい、貴嬢は何うして此に」と犬山生に續いて細烟女史も「お富さん、其後は誠に久満、貴嬢が此に在なさらうとは少しも存じませんでしたことよ、何時から、爾う

ですか、静岡で雲岳女史にも逢なすつてそれから御一緒に、マア宜う御座いますか、  
 したことを、妾達も追々東京に居られなくなつて了」と此の女は隠す事無く  
 實際の事情を物語らんとするに、それ言はれては口を出す雲岳女史「時に細  
 烟女史、牛沼學士は健在なりや否や」と幹載を飾る爲めに牛沼生を學士に推  
 尊する、細烟女史は察しが悪るし、友達の前とて何事も有難に「あの牛沼さん  
 は獨りで旨い事を仕たのよ、丁度國の親父さんが老病で今度は六か敷そうだか  
 ら急に歸へれと言つて來たのよ、爾うしたら牛沼さんは借金の片を付けなけれ  
 ば歸れないと言つても國から澤山金を取つて大概は芳原なんぞで使つて仕舞つ  
 て下宿屋の方なんぞは半分も遣文にして歸つたのよ、それでも妾達は何うか掛  
 りか掛合つて此へ來るだけの旅費を出させて遣つたからマア宜いワ」と此女も  
 中々正直な所ありと見ゆ、雲岳女史は蕪蛇の氣味、眉を寄せて苦い顔をする。  
 座客一同は此の問答に驚ける如く訝し氣に新來の二人を打眺むる、雲岳女史  
 老父は今に至りて想ひ起せる如く「何うも先刻から見た様な顔だと思つたが、和  
 女と一緒に湯島の下宿屋に居なすつた人認だぞ」と少しく低聲に我が娘に問ふ、

雲岳女史詮方無く「然り、お富嬢と齊しくあの家に同宿せり」と若し細れに  
 富嬢を引出すは嬢に頼りて幾分の信用を繋ぐんとするなり、お富嬢は迷惑顔に  
 下を向いて物言はず、座客も皆な黙せり、手持無沙汰なるは男女の養生、主人  
 より外の客にでも何とか紹介し呉れざれば空しく此に閑却せられん場合なるが、  
 雲岳女史は前例に反して二人を花婿にも紹介せず、去りながら紹介されずとも  
 指をくはへて引込む如き犬山生ならず「時に雲岳女史、何を指しても先づ君の  
 御婚禮をお祝ひ申さなければならんがそこで僕等も君の婿君にお目にかゝつて  
 置き度い」と自分の方から紹介の催促、雲岳女史愈よ閉口、婿の源吉を顧み  
 てさる力無氣に「是は犬山吠と云ふ人、あれは細烟女史と云ふ人」と單に姓名  
 をのみ告げて別に朋友とも何とも言はず、されども源吉は丁寧に兩手を突き  
 「初めましてお目にかゝります、私は和田の源吉と申す者、毎度家内が色々の御  
 世話様になりまして御座います、何卒何分御心安く」と極めて慇懃に挨拶す  
 る、犬山生も其邊は如才無し「イヤ是は申し後れまして、手前は犬山吠で御座  
 います、御令園とは三年以來同じ下宿屋に居りまして此方こそ色々の御厄介に

計り相成りました、殊に今度は當地方へ参りまして暫く此方に逗留する積りで御座いますから何分宜しくお引立を」と後日の爲めに旨くも世辭を詩いて置く、同じ心の細烟女史も餘計なお饒舌が事毀し「妾なんぞはモ一五年程も雲岳女史と一緒になつて居て同胞の様に仕て居たことよ、着るものでも食べるものでも孰方が何うだか分らない位で、外へ行く時でも家に居る時でも滅多に離れた事がありませんから知らない人は實際の同胞だと思つて居たことよ、去年なんぞも雲岳女史と妾はこの犬山さんと外にモ一人牛沼さんと云ふ人と四人して箱根へ往つて暫く遊んで居たことよ、雲岳女史あの時は面白かつたのチ」と段段困る事を言出すに雲岳女史愈よ苦しく「其時はお富嬢も亦た箱根に在り、二、三、湖畔の風景轉々再遊を懐はずや」と唯一の頼みはお富嬢、

鐵道改良

細烟女史のお饒舌が愈よ進む程流石に大勇の雲岳女史も愈よ顔の色青くなり、ア、天の神よ天の神よと心中頻りに天の神を祈念する、天の神も幾干か憐みを垂れ給ひけん、それとも犬山生の氣轉にや「時に和田先生、此の濱名湖は實に絶

景で御座いますな、僕等は未だ湖畔の名勝を探り盡しませんが此へ来る途中の眺めだけでも既に天下に冠たるに足りず、斯る好風景の地が今では瀛車一轉の處にありながら都人士はヤレ大磯だの鎌倉だのと殺風景な場所へ別荘などを建てるのは氣が知れません、歐米諸國の人が別荘を持つと云へば大概都會から百里や二百里を離れた處だと云ひます、して見れば此邊なぞは丁度都人士が別荘を建てるに適當な土地でありませう、僕等は此の土地の爲めに都人士を勧誘して今より數年の後には此地を以て日本全國の公園にでもする程に致し度いと思ひますが」と先づ土地の爲めに氣焔を吐き「それに就いても早速改良しなければならんのは我邦の鐵道で、一方から云へば此の鐵道が進歩せん爲めに此邊の土地迄が開けんのでありませう、今も申す通り歐米人士は百里二百里の外に別荘を持ちますが瀛車の速力一時間に五十哩も六十哩も走り、最も速いのは百哩を駛るものさへありますから百里二百里と云つて數時間で往く事が出来ますけれども我邦の鐵道は狹軌鐵道の單線ですから漸く一時間に二十哩位より走りません、此の進歩せる社會に狹軌の單線なぞと云ふ迂濫千萬の鐵道では全國の交

通機關を何うする事も出来ません。最も東海道は複線にする積りで工事も大分  
 掘つては居ますが全國中第一の繁昌なる鐵道ですから是非とも早く廣軌鐵道  
 の複線に仕度いものです。是等も自然と此土地を開くべき利器になりませう」  
 と頻に土地問題を擔ぎ出して花婿と話しを始めた。雲岳女史ヤレ嬉しやと少  
 しく息を吐きけるに、生憎や彼方にも源吉の老母が細烟女史に向ひ女同士の  
 話對手として「今伺へば貴客は家の嫁と五年程も一緒に被在つた云ふ事ですが、  
 矢つ張り一緒に學校へでも通ひなすつたのですか」細烟女史「イ、エ妾達は  
 學校へなんぞ一度も通つた事は御座いませんことよ、唯モ二人でブラ／＼遊  
 んで計り居まして特別に是れと云ふ極まつた事も覚えませんが今になつて後  
 悔しますことよ、尤も新聞や雑誌を讀んだり小説を讀んだりしてそれで少しは  
 學問も仕ましたけれど生半可な學問ですから何の役に立ちませんし、ホン  
 トに今になつて色々苦しい事が始まる以前に遊んで居た事を思ひ出してあの  
 時分にせめて女一通りの事だけでも替古するに宜かつたと思ひますことよ」老  
 母「それでも家の嫁は東京中で誰知らんものは無い程のエライ女になつて華族

様の奥方なんぞを友達に持つて居る位だと云ふ事ですが貴客も矢つ張り爾う  
 云ふ事におなりなさいのですか」細烟女史「何うして、華族様は扱置  
 き平民の家だつて氣の利いた人なんぞを知つて居る事は御座いませんことよ、  
 爾う云ふ人でも知つて居れば斯んな時には泣き付いて何うでも仕て貰ふので  
 けれども、ホントに仕様がありませんことよ」と兎角に泣事らしく物語るは落  
 人の頼り無さに斯く云へば人の憐みを惹く事あらんと思へるなり、老母は何處  
 までも深く聞き度し「そしてナンですか、家の嫁は東京で何と云ふ會とや  
 らを起して其中には華族様でも何でも皆んな入つて被在ると云ふ事ですが貴客  
 は其中へも入つて被在らないのですか」細烟女史も可笑しと云へる風に先づ  
 「オホ、」と打笑ひ「あの會ですか」と再び饒舌り出さんとする、雲岳女史愈よ  
 溜まらず「いかに源吉、乞ふ速に家に歸らん」

歸宅

花嫁に歸宅を促さるれば源吉も致して異存を言ふ事能はず「爾うさのう、歸つて  
 も宜いが」と不勝無性の返事して残り惜しそうちに富藏を打眺め「如何で御座

います。貴嬢も是から私どもへ御一緒にいらつしやしませんか」と斯る言葉に側にて聞きし老母は忽ち細煙女史との對話を止めて富嬢に向ひ「何卒是非いらしつて下さいまし、何でも是からいらつしやしませんか」と斯る言葉を云ひ、雲岳女史も刻下の思案、富嬢を此に置かば大山と細煙とに取つかれて人々も定めて迷惑せん、それに兩書生の來りしより我身の價値下落せんとする氣が揉めるなり「然り妾は富嬢を伴はん、嬢よ、乞ふ妾と共に來つて浪名湖の新天地を遊覽せられよ、妾は嬢に別れて寂寞を感ず、今より後再び退隱を遂して讀書論文の侶たらん、ナニ敢て辭すと、何ぞ辭するを要せん、妾は必ず嬢を拉して行かん」と斯く言ひ出されては富嬢も到底通るゝに道無し、不平なるは大山生に細煙女史「僕も和田先生にお目にかゝつた上は何うか御尊宅へも出度いテ」細煙「ちよいと雲岳女史、妾達を何うして呉れるの、和女史願つて來たのだから、外に泊る所も無いとよ、富さんが往くのなら妾達も一緒に往かう」と此の男女こそ今は一生懸命の場合なり、雲岳女史之れには困

り「イヤ、君等は他日家に來るの機會あるべし、今夜は里開の歸り、如何にして多數の友を伴はん」細煙女史少しくすねたり「じや何うしろつて言ふの」と兎角に暗氣の穩ならねば雲岳の實父も心配し、此人々に和田家へ往かれては娘の迷惑も察せらるゝ「それでは斯うなさいまし、今夜だけはお兩人さんとも手前方へお泊りなさいまし」細煙女史「今夜だけは泊ることも、妾達は此へつかけて來たのだから」と不承知顔なるを制する大山「アア宜いよ、明日になれば何とか工夫もあるよ、此方の家だつて爾う無闇に出て往けと云つて退出す事もあるまい、もしも追ひ出されたら其の時こそ雲岳女史の家へ戻込む計りだ」と態ざと雲岳女史にも聞える様に言ふ、雲岳女史詮方無く「然らば阿爺、此輩を一兩日家に繋ぎ、便宜あらば遠く關外へ放ち給へ」大山生「人を馬だと思つて居る、雲岳女史、明日は君の家へお尋ね申すよ、僕も此の地方に何か一事業を起し度いと考へて居るから色々和田先生にも御相談申して是非とも貸成を願はんければならん、和田先生、何うか之を御縁に何分御引立を願ひます、僕も當地に來つて常住の地と定むる上は一身を捧げて土地の爲めに盡力致します、

失禮ながら當地はまだ開くべき遺利もある、現に大倉組の如きは縣下の山の中へ新村を開いてドシ／＼開拓をするではありませんか、他國からさへ入込んで来て事を起すと云ふのに土地の人が安閑として泰年無事に澄まして居るのは其意を得ません、僕は此の土地をして商業上には全國の中心市場たらしめ、工業上には東洋のマンチエスタ／＼たらしめ政治上には中央集權の根原たらしめんと思ひます、それに就て何事を起すも第一の御相談相手は貴郎方の如き有力者であるから、何れ明日伺つて緩々御相談申しませう」と口から出任せの大法螺、雲岳女史來られて溜まらじと「イヤ明日妾等家にあらず、來訪するは無用の勞なり」犬山「それでは明後日」雲岳女史「イヤ明後日も不在なるべし、乞ふ生の足を勞する勿れ」と頻に兩書生を遮りて其夜遂に富嬢を伴ひ和田の家に歸りぬ、

女 辯 士

明珠庭に在れば積礫も亦た光を受く、富嬢が和田の家に到りてより雲岳女史まで肩身が廣し、今迄は隱言に花嫁の事を悪く言ひし奉公人等も富嬢の如

お友達のある位ではと幾分か雲岳女史をも推尊する、主人の源吉は宛ら富嬢の光明に浴し居る心地、姑はまた片時も富嬢を側より離し度く無し、嬢の顔さへ見て居ればさも嬉しそうにニコ／＼して嫁に對しても心を置かず一ホソに和女は大層なお友達を持つて何よりだし、同じお友達でもお富さんの様な立派なお方もあるし、また昨夕逢つた書生さん達の様な變な人もあるのだし、全縣あの書生さん達は和女と長く一緒に居て大層仲の好い様だに話したが和女はわんな人達と一緒に居たのかえ」雲岳女史「否、唯旅宿を同らせしのみ、乞ふ見よ濱松邊の大旅店を、貴顯紳士も宿し、田夫野人も宿するにあらずや、同じ家に宿ししてて妾の累となすに足らず、お富嬢も亦た同じ家に宿せるの一人なり」姑「爾う云へば爾うだが和女は去年あの人達と箱根の温泉へ往つたとかえ」雲岳「然り、お富嬢も亦た箱根に在りき」姑「オヤお富さんも御一緒にいらしたのですか」お富嬢「イ、エ向ふでお目にかゝつたのです」姑「爾うで御座いますせう、貴嬢があの人達と御一緒にいらつしやる氣支ひは無いと思ひました、あの人達は全縣何しに此方へ來たのだえ、何でも長く此方に居る様な事を言つ



たではないか」雲岳女史「彼の浮浪輩、風に從つて漂流するのみ」と昔は無二の友達ながら今は路傍の人の如し、折から取次の男入り來り「犬山さんとか云ふ不潔い服装をしたお方が旦那様にでも御新造様にでもお目にかゝり度いと言つて参りました」雲岳女史「咄妾等不在なりと答へよ」男「それは向ふから先へお断りがあります、もしも不在ならば一日でも二日でも或は一月でも二月でもお歸りまで此に待て居るからその積りで返事をなさいと申て居ります」雲岳女史「不祥々々、然らば先づお意の如何を問へ」男「それも向ふて申して居ります、名前を云つて取次だら不在だとか逢ないとか用事の次第を申聞けなさいとか何ふせオイヤと與へ通す氣支はあるまい、然し斯う見えただからと云て別に金銭の無心に來た譯でも無しまた難題を持つて來た次第でも無いから安心するが宜い、用事の次第は土地の人民を一堂に會して大演説會を催し度いのが御當家の花嫁たる雲岳女史は以前東京に居て毎度婦人演説會にも出た即ち女の辯士であるから是非その演説會へ出て貰ひ度い、もしも出る事が出來ぬと云へば名前だけを借りるが、それを彼是云ふと此方にも是見がある、以前雲岳女

史は有りもしない華族の名だの其外断りもせんで人の名を濫用した事もあるから此方で名前を借りるのに決して彼是云ふ等も無いが友達の好みを以て一應は断つて置くとする云ふ口上で御座います」雲岳女史「ナニ彼が演説會を開くと、演説は妾の得意なれども妾豈に彼の輩と伍すべけんや、然し彼は如何にして會堂其他の準備をなせしぞ、必ずや妾が實家を累して阿爺を奔命に疲れしめしなるべし乞ふ往いて彼に語れ、妾は今病に臥せりと」取次の男意を諒して出で去りけるが良ありて復た入り來り「御新造様、お容様は復た來ると云つてお歸りになりましたが今門の前を通る人達が和田家のお嫁子さんが演説をするそうだが何でも聴きに行かなくつてはならないと申しますから何う云ふ事かど出て見ましたら家の塀にも隣宅の壁でもへまゝく斯う云ふ張紙が出て居ます」と取出せしは演説會の廣告、

演 説 會

雲岳女史其紙を手執り「ナニ政談大演説會本日後一時開會、第一席、駁論、參三國の人士に告ぐ、辯士、博士、犬山、吠君、博士とは借越々々、それから第

二席 女権張張論 辯士 雲岳女史君但し和田家新夫人と、是は怪しからん、  
 彼は妾の名を濫用して御黨の人を欺かんとするか、側に居たる富姫「アホ、  
 其先にまだ何か書いてありますね」雲岳女史再び紙に向ひ「然り第三席 演題  
 未定、細烟女史君、第四席 米布合併の不法を論ず 馬場辰猪君と、白玉樓  
 の人を擧げて人を欺くは言語同断、ナニ入場料貳拾錢下足料拾錢會場瑠璃光寺  
 と、誰か高價なる入場料を拂つて犬山輩の演説を聴くものあらん、時にあの口  
 は何の聲ぞ」男「多分演説を聴きに往く人が出るのでせう、アレ、向ふから  
 も此方からも仰山な人の足音、丸で鎮守様の祭禮の様です」と走り出で、門前  
 を看るに演説會場に向つて人の往く事繰るが如し「オイ太郎左衛門どんよ、モ  
 ー少し待たつて、今つから往つたつてまだ急に演説やう事が始まらぬよ」  
 乙「ナニ早く往つて場所を取らないと坐る所も無くなつて了ふよ、此の人数が  
 押かけて往くのたもの、瑠璃光寺が廣いと云つてもあの中へ入りきるだらうか」  
 甲「迎もよめい、あんたつて和田の嫁つ子さん演説をするちうこしだもの、  
 村中總出だ、隣村からも遣つて來べい、近郷近在からも出掛けて來べい、是が

モーちつと早く知れて居て二三日前から張札でも仕たら駿遠參三が國の人は皆  
 んな出て來たんべい、何にしろ今張札を仕て今直ぐに始まるちうことだから遠  
 い處の人は來たくつても間に合はぬいだ、跡で無爾んな人達が借しがるこんだ  
 らう、女の演説ちうものは聞き度くも滅多に聴く事が出來ぬい、和田の嫁つ  
 子さんが演説したと聞いたら聴かぬものは悔しかんべい、長生はするもん  
 だ、己も此の年齢になつて始めて斯んな事に出つくはすよ、だが演説を聴くの  
 に三十錢かゝるちうのは少し高過ぎる様だ演劇が始まつても落語家が來ても爾  
 んなに木戸錢を取りは仕ないぞ」乙「ウンニヤ高くぬい、和田の嫁つ子さんの  
 演説を聴くのたもの、三十錢が五十錢だつて決して高くぬい、あの嫁つ子さん  
 は演説が上手だよ、己も婚禮の晩に招待されて往つて嫁つ子さんの演説を聴いた  
 がホントニ感心した、何うしてあんな旨い事が饒舌れるものか知らん」甲「何  
 を饒舌つた、何んな事を演説した」乙「何の事だか些つとも分らぬい、六  
 か敷い陳粉漢でベラ、饒舌つたけれど何を言つて居るのだから譯が分らぬい、  
 爾うして見ると上手なものだ、村會議員の空郎次どんなんぞも大層感心した様

子だつけ」甲「爾うか、和郎は旨い事を仕たなあ、己なんぞはあの時石祝ひに往つてモ一少して嫁つ子さんに青竹で頭を擲られる所よ、遠々の跡で轉がる様にして逃げて来たがあの時の嫁つ子さんの荒れ出した勢ひと云ふものは石巻山で大蛇に追驅けられた時よりもまだ怖かつた、あの勢ひで演説でもしたら嘸威勢の好いこんだらう、ソラモ一瑠璃光寺へ来た、何うだえ、此の人の寄つたこと、今でもモ一千人や二千人とは言ふめい、エート一人前三十銭とすれば千人で三百圓、二千人で六百圓か、斯んな事を仕て六百圓取れば役者を貰ひ切つて芝居を打つよりも相撲を呼んで興行するよりも演説使ひを抱へた方が餘つ程利方だなあ、ヤア士手下の婆様も来なすつたかえ、田端の隠居さんも来て居らあ、モシ／＼隠居さん、和老さんは耳が遠い癖に演説を聴きに来たのかえ」と大きな聲で老人の耳に口を寄せる、八十計りの老人、杖に縋りて歩みつゝ「ハ、イ私は見に来たよ、和田の嫁つ子さんが演説すると云ふから聴く事は出来な

いでも其士の土産話しにせめて様子でも見度ものだ」と會場大入の徴には遠く人の外に見る人のあるなり、聴衆滿場、堂の廣きも立錫の地無し、

三國人士

聽て開會の時刻とはなりぬ、第一席の辯士犬山吹は傲然として演壇に登り、咳一咳して説き出しける「諸君、本日の開會は餘り急であつて廣告の手段も行届きませぬのに斯くまで多數の御來會あり滿堂溢るゝ計りの盛況を呈しましたのは此の地方の諸君が平生政治思想に富まるゝを證するに足りませぬ、此の政治思想と云ふ事も時勢と共に變遷しまして近頃迄の政治思想は内政に向つての政治思想であり、今より以後は外政に向つての政治思想で無ければなりません、マレ内閣が何うだの、政黨が斯うだのと内輪喧嘩計り仕て居る様な政治思想は昔の事で今や世界に向つて大濶歩を始めたる大日本帝國人民の政治思想と云へば飽くまでも海外各國の事情に注意し、英國の意向は何うである、魯西亞の侵略政略は斯うである、獨逸は如何佛蘭西は如何と歐米各國の政治界に注意しなければなりません、殊に我邦は今如何なる時代であるか、言ふ迄も無く臥薪嘗膽の時代である、飽くまでも忍び飽くまでも蓄へ、飽くまでも滿を持して一たび發しなば必ずや會稽の恥を雪がなければならんと云ふ大責任のある時代です、

一方よりは或る敵國が日本國の進歩懼るべし、軍備擴張の未だ全く整はざる先  
 に一舉して抑制し置かんと近來頻に戰爭を挑んでそれが爲めに種々なる術策を  
 施します左れば最も危険なる最も大切な時代でありますか、苟も海外の政治  
 事情に進じ、忠君愛國の志を抱くものは一日として臥薪嘗膽の精神を忘れては  
 なりません、然るに都會人士の氣樂千萬なるや戰勝後の熱に浮かされて丸で鉗  
 卷をして踊つて居る様な有様です、ア、顧むべきは地方人士なるかな、殊に此  
 の駿遠參三國の人士こそ我邦が大濶歩すべき原動力であります、其故如何と  
 なれば此の三國人民は既往の三百年間徳川氏の覇權と共に日本全國の最大強力  
 でありし旗本八万騎の養成所でありました、其の證據に舊幕時代は特に此の三國  
 人民に限り、百姓町人に至るまで無袋弓御免の制度がありまして大に尙武の氣  
 象を養ひました、今日に至つても此の三國人士は餘程武勇に富んで居ます、近  
 き日清戰爭にも三國人民より組織されたる豊橋聯隊は鬼聯隊の勇名を轟かし其  
 外玄武門を破るとか敵中に奮戦するとか目覺ましい武功を顯はしたのも多く  
 此三國人士から出て居ます、然し此等の事は他人に在つては誇るべきも三國人

士に取つては未だ尺寸の功となすに足りません、他日風雲西北に起つて吾人武  
 を亞細亞大陸に用ゆるの日とならば其時こそ大に三國人士の勇武を顯して貸ひ  
 度いのです、それには素養が何より大切で、平生の心掛が其事を忘れてはなり  
 ません、譬へば大弓は此の三國が日本全國で一番の流行地であるが大弓も可し、  
 射的も可し、劍術柔術其の他の武藝を飽くまでも獎勵して平生から腕力を蓄へ、  
 最も体格強健なる人種になつて置かなければなりません、体格が強健で無いと  
 心ばかりはあせつてもイザと云ふ時に兵隊にもなれん始末です、今は決して無  
 い事だが四五年前までは折々徴兵に往くのを厭がつて不合格になると悦ぶもの  
 がありました、是は大きな量見違ひで兵役に就くのは國民の權利であります、  
 それを体格が不完全で徴兵にも出られんと思へば是れ身軀が不具で日本國民一  
 人前の權利すら無と云ふ次第です、是から先は徴兵不合格の人は不具と名づけ  
 て郷黨でも撥斥する位に尙武的精神を持たせ度いと思ひます、それにモ一つ  
 肝腎なのは勤儉儲蓄の精神を奨励するので一方には強、一方には富と云ふ事が  
 並行しなければなりません、國でも富國強兵と云ふ人でも、強力富財と云ふ事

が必要で、身財が丈夫で金があつて何でも来いと云ふ元氣にならなければ世界の  
人種と闘ふ譯になりません、是れ我輩が駿達参三國の人士に重きを置くと同  
時に益々將來に希望する所であり、一段の演説を了り、俄に聲を張揚げ  
て「切諸君、是から有名なる雲岳女史君、即ち和田家の新夫人たる當代無双の  
女丈夫が演説をせられます、諸君耳を澄まして謹聴し給へ」と先づ大袈裟の前  
觸をなすに聴衆一同どよめき立ちて「待つて居ますぞ」「早く出さつせい」と悦  
び合ひぬ、

歎願委員

前觸の無くとも聴衆一同は雲岳女史を當込に來りしなり、和田家の花嫁は如何  
なる演説をなすかとそれを聴き度さに大枚三十錢の入費をも拂ひしなり「何う  
です源兵衛さん、今の辯士も有名なる雲岳女史と云ふ位ですからあの嫁つ子さ  
んは東京でも餘つ程名代の人だと見えますよ」乙「左様さ、當代無双の女丈夫  
とまで云ふ程ですから何でもエライものには違ひありません、顔を見ると豚の  
土左衛門とでも云ひそうだが人は見かけによらないもので、何にしる源吉さん

が學問に惚れてお嫁に貰つたと云ふ位ですから」甲「ハテ、爾んな顔ですお  
テ、私はまだ一度も顔を見ないが兎角エライ女に別嬪は無様です」乙  
「ナニも無いとは限りませんが別嬪は容色計り鼻にかけて兎角學問なんぞを勉強  
しないのです、もしも容色が好くつて天性が伶俐でそれで學問でもよく出來れ  
ばそれに越した事はありますまいが、サテ爾う云ふ人は寡いもので」甲「その  
代り容色が悪くつて性來が馬鹿でそれで何も出來ないと來たら一向取りえがあ  
りませんテ、アハ、爾う云ふ方が随分多いのでせう」と種々の噂して女辯士  
の登壇を待ちたれども更に何人も演壇に現れず、最初の程は聴衆も今かくと  
忍んで待ちけれども餘りに時間の長びくより漸く八方より催促を始め「辯士は  
何うした、女丈夫は出ないか」と叫び出すものあり、足にて板を踏み鳴らすも  
のあり、果は一同立上りてツイくと騒ぎ立てる、此時までも堂の後に入場  
券の賣高や下足料の上り高を數へて居たる犬山吠は聚まりし金を深く懐中に納  
め、跡の始末を憂り無く處置して懸て悠然と演壇に立出で「諸君、我輩は諸君  
に對して最も遺憾千万の事があります、即ち本日の大立物たる雲岳女史君の事

で、諸君も定めし女史君の演説を聞き度い爲めに來會でありませうし、我々も亦た女史君の演説をお聴かせ申し度い爲めに今日の會を開いた次第です、然るに雲岳女史君は堅く御出席の約束をせられて置きながら、今になつて急に支があるから今日は出られんと云ふお断りが参りました、是れ實に約束に乖き言を食むの所行であつて雲岳女史君の平生にも似合ひません、然し雲岳女史君は決して左様な不徳義をせらるゝ如き人物でありません、また演説は大のお得意で今日の會にも自分の方からは非とも得つて出やうとまで言はれた位ですから唯今の事は必ずしも女史君の心から出たのではあるまいと察せられます、多分お婿さんやお姑さんが爾んな事を仕てはならん、嫁に來たてから間も無いのに演説會などへ出るとお轉變の見えるから止すが宜かろうとでも被仰つて爾う云ふ故障が起つたのではあるまいかと存じます、然しそれは所謂取越若勞で女史君が演説せられるのを悪く言ふ方はありません(ヒヤ／＼の聲起る)否雲岳女史君に一場の演説を望む事は滿堂諸君の輿論であります(ヒヤ／＼、大ヒヤと叫ぶ聲頻りなり)、然らば一同の望みである、衆人の輿論である

と云ふ事を言ひ立て、雲岳女史君に出席を促したら大度量なる女史君が必ず承諾せられん事はありますまいが、然し我輩一人位向ふへ参つて行方申しても、女史君のみは信ぜられませうが、和田家の御家族が容易に御信用ありません、就ては諸君果して雲岳女史君の演説を聴き度いとの御精神なら是より一同和田家へ押かけて、雲岳女史君の御出席を歎願なすつては如何でせう、爾う云ふ事は人の衆く聲の大いほど効驗がありますから滿堂の諸君總出で遣つて御覽なさい」と巧に聴衆を欺きける、聴衆の中にも突飛なるものあり、「爾うだ、嫁つ子さんの演説が聴けなけりや誰が三十錢出すものか、サア一つ和田の家へ押かけろ、ワ／＼」と先に立ち和田家を望んで走り出づれば他の聴衆も雲霞の如くエ／＼聲して押し寄せたり、此方には犬山吹、衆人の跡より行く振りを仕て横道より取つ返し「サア此暇に逃げる、金さへ占めれば跡は野となれ山となれ」と細煙女史を伴ひ忽ち姿を隠しける。

稻麻竹葦

斯くて演説會場より馳せ出でたる數千の人数は和田の家を八方より稻麻竹葦の

如く取巻いたり「サア願ひが御座います、何卒御新造さんに演説會へ出て度いもので」乙「嫁つ子さんの饒舌を聴かない内は殺されたつて動かねいぞ」丙「左も無けりや三十錢返せ」と門外の騒ぎは一方ならず、驚けるは和家の人々「何だ、何事が起つたのだ」と立出で、此の有様に膽を消し、奥に入りて雲岳女史に告げたるに女史は傲然として更に驚かず「ナニ御黨の民妾の演説を聴かんと欲するか、近頃殊勝の至り、妾爲めに一場の演説を試んか」と随分飛出しかねまじき風情、驚く老母「コレさ、和女が爾んな所に出て呉れては困りますよ、何とか言つて表の人々を返してよ了ひ」家人「どころが中々歸りませぬので、嚴重に此家を取巻いて居ますから蟻の爬ふ道も御座いませぬ」雲岳女史「然らば妾が群衆を退拂はんか」老母「イ、ニお待ちよ、和女が爾んな事をするともた怪我人が出来て大變だ、何とか仕様が無いか知らん、困つた子」と家人は頻に途方に暮れる、門外の騒ぎは益々激しくなれり「嫁つ子さんは何うした」「あんでも捕はねいから引張り出せ」と人衆ければ氣が強し、家の内には纏て思案を定めけん、玄關の袂左右に開かれしと思ふ間も無く一道の

光明内より發して現はれ出でたる一佳人、眉目清秀にして斯る田舎に復たあるまじき姿なれば群衆は呆然として唯其顔を眺むるのみ、一人として復た口を開いて騒ぐものも無し、佳人に續いて立出でたるは仁王を女に仕立てたる如き雲岳女史、山の動く計りに地響きさせて歩み出す、その後から主人源吉「ヨチヨチとして花嫁が袖の下に在り、斯くて三人、群衆には目もかけず、人も無氣なる様子にて悠然と門を立出づるに群衆は思はず知らず左右に分れて道を開きぬ、高くは言はねど低聲なる内證話「オイあの先に行くのは何だらう、小野の小町か楊貴妃か辨天様の申し子かちう位なもんだなあ」乙「ナニ彼は嫁つ子さんの友達だよ、嫁つ子さんが東京から歸る時一緒に實家まで連れて來たのだだよ、屹度是从から瑠璃光寺に行つて嫁つ子さんと一緒に演説をするのだんべい」甲「あの別嬪が演説をするなら三十錢が五十錢になつても安いものだ、己はちよつくら家へ往つて爺様と婆様を呼んで來べい、先刻も連れて來やうと思つたけどそんな跳つ返りの女の演説なんぞは聞き度く無いと言つて居たが、此の別嬪を見たら三年も壽命が延びるだんべい、何う見ても好い女だな、横か

ら見ても縦から見ても此と言つて悪い所がねいたもの、是が和田の嫁つ子さん  
で無くつて嫁つ子さんの友達だから宜いけれども、もしも是が和田の嫁つ子さ  
んだと言つたら源吉さんは闇の晩に表を歩かれぬいぜ」乙「何故」甲「何故だ  
つてもあんまり癖に障るからッヒ扱つて遣り度くなるッ」甲「アハ、大變な嫁  
妬だ、オヤ／＼あの人は瑠璃光寺の方へ行かないで、濱の方へ行かせ、濱か  
ら舟へでも乗るのか知らん」と數千の人数は期せずしてソロ／＼とついて行く、  
雲岳女史の一行は濱より舟に打乗れり、漕ぎ出づる引佐細江、三人は遊覽に出  
掛けしなり、今は何とも騒ぎ得ぬ群衆、岸に立ちて舟の行く跡を目送し「ホッ  
トに美しいもんだなあ、嫁つ子さんの演説は聴かぬいでもあの別嬪を見た計り  
で三十銭の價値はあらあ」と演説會の不平も富嬢の光明に消散したんぬ、

入浴施行

雲岳女史の名を演説會に利用して數百金を儲け得たる犬山生は細烟女史と共に  
其地の旅亭に移りしが金のあるまゝに贅澤三昧をして尙ほも頻に金儲の相談  
「チヨイト犬山さん、藝日の演説會は旨く行つたことよ、あゝ云ふ風に一日で

金が儲かれば何にも心配する事は無いが、まだモット旨い事はあるまいか、今  
度は一日に何千圓とか何万圓とかの金が儲かつて急に銀行でも建てる様な工  
夫は無いか知らん、それには矢つ張り雲岳女史を擔ぎ出すに限るけれどもモ  
今度は演説會と云ふ譯に行くまいナ」犬山生「知れた事よ、過ちの功名は再び  
すべからずだ、あの時も聴衆が和田家へ押かけて往つて和田家では除程閉口し  
たらうが苦し紛れに雲岳女史夫婦は富嬢を連れて引佐細江の見物に出掛たそ  
うだ、尤も富嬢を案内するのが主意であるから今でも毎日名所々々を見物し  
て歩くそうだが、あの時は此方も随分苦しい手段だつたよ」細烟女史「苦しく  
つたつて儲かれば宜いッ、全株なら雲岳女史が妾達こそ永年の友達だから富  
嬢よりも妾達を大事に仕ななければならぬに昔の事は忘れて了つてあんな悲  
情な様子をやるから此方でもその意趣返しに散々利用して旨い事でも仕て遣ら  
なくつてはならない、何うだらう今度は雲岳女史と牛と相撲を取らせると言つ  
て見世物でも興行したら、そうして高い木戸銭を取つて人の聚まつた時復た旨  
い事を言つて雲岳女史へなすり付けて此方は金を持つて逃げて来るのさ」犬山



生「イヤ、再び衆人を欺くべからず、今度は衆人に利益を興へて此方も大金を儲けると云ふ奇々妙々の策を施して遣らう、それに先日鳥渡見て置いたが和田家の隣地に二百坪許りの空地がある、土地の人に聞いたらあれは和田家の所有で無い、外の人の地面だと云ふから、少し割合を高くしてもあの地面を買つて了うのだ、マア我輩のする事を見て居るが宜い、此方から何とも言はないでも今に雲岳女史の方からあやまり閉口して金を儲けさせて呉れるから」と如何なる妙策を蓄へけん、犬山生は金に飽かして紳士風に膝裁を飾り、地面の所有主なる村民某の家に赴きて和田家の隣地買入の事を中込みぬ、固より口は達者なり、容態も亦た立派らしく、其上に言ふ所は飽くまでも土地の利益を主張して「我輩は今度此地に一の製紙場を設け度い、それには追つて廣大なる地所を買入るゝが、先づ差當り水質や土質の試験の爲め和田家の隣地を譲り呉れよ、事成らば此の土地の爲め一大富源となるものなり、茲に和田家の主人は大賛成なり、その新夫人は我輩の親友なり」と巧辯に任せて説き付けしかば先の人は烟に巻かれ土地の利益となるならば割を安くして譲り渡さんと遂に拾ひ取る如

き價にて其地面は犬山生の手に入りぬ、此に於て犬山生は俄に其地所へ一大浴室を作り、忽ち遠近へ吹聴して今度貧民へ入浴の施行をなすに付き何人に限らず朝より晩まで来浴せよと言はしめければそれを聞傳へて遠近の者我も我もど入り来りて浴室の繁昌言はん事無し、犬山生は一々その人々へ茶菓などを饗應ひ「我輩は今度製紙場を設くるなり、製紙場には機械の湯を空しく流さねばならず、空しく流す程ならば衆人に沐浴を施すに如かずと斯くは施行をなすものなり昔の東京の有馬製紙場にては貧民に入浴の施行をなせし事あり、我輩もそれに倣ふものなり、遠慮無く毎日来られよ」と頻に恩を施して遠近の人を聚めければ犬山生の評判忽ち廣まりて「エライ人だ、大腹中の人だ、和田の嫁つ子さんのお友達だと云ふが嫁つ子さんはエライ友達計り持つて居る」と餘慶は延いて雲岳女史にまで及ぼしぬ、雲岳女史は不審なり、犬山生が何を目的に斯る事を始めたるやと内々には心安からず、

大烟突

不審なるは細り雲岳女史のみならず、細烟女史にすらその仔細の分りかぬて

「チヨイト犬山さん、毎日／＼斯うやつて施し湯計りして居て何うするの、是れ  
 でお金が儲かるの」犬生山「マア宜いよ、細工は流々仕上を御覧じろだ、今家  
 の裏へ建て、居る大烟突が出来ればそれで本望成就するのだ」と日夜職人を屬  
 まして一大烟突を建設しけるが其日より朝から晩迄最下等の濃烟石炭を間断無  
 く焼にける、烟突は和田家の庭に接せり、吹入る南風と共に石炭の黒烟渦を巻  
 和田家の座敷に侵入しければ俄に騒ぎ出す和田家の人々、殊に老母は嗅ぎ慣れ  
 ぬ石炭の臭氣に胸を悪くし「マア源吉や大變な事が始まつたの、其んなに烟が  
 舞込んで来ては障子を明けて置く事も出来ず、白いものを干す事も出来ない、  
 オヤ／＼今日一口で庭の樹が焼つて了つたよ、口を開くと煤が飛込し、是で  
 は何うも仕様が無い、隣へ掛合つてあの烟を止めさせる譯になるまいか」と一  
 たび人を遣りて犬山生に苦情を言はしめけれども犬山生は固より期したる事な  
 り、我輩此の土地の爲めに一大工業を起さんとするに今更何とて此の事業を中  
 止せん、石炭の烟は文明の烟なり、倫敦マンチエスターの如きは空気が黒色  
 を帯ぶると云ふ、我輩は此土地の工業を奨励して黒烟濃名湖を蔵はしめんとす

と取つても付かぬ挨拶に和田家の人々愈々難儀し、それでは塙を高くして煙を  
 防ぐべしと此方で塙を高くすれば彼方でも亦た烟突を高くする、其内に犬山生  
 は愈々計略圖に當れりと第二の烟突第三の烟突と太き烟突を幾條と無く建て逆  
 ね、遠慮無く石炭を焼くと同時に、火力の用ゆべき所無ければそれにて益々湯  
 を沸かし、今度は施し湯の外に入浴者へは辨當を振舞ふなど、手を盡して貧民  
 どもの人望を取り、斯くて一日入浴者を聚めて言ひける様「初斯うやつて皆さ  
 んに湯を振舞つたりお辨當を御馳走したりするのは近日愈々製紙工場を起す事  
 になれば其工場へは皆さんに出てお貰ひ申し度し、夫に外の事でも色々お世話  
 になると思ふから何うせ捨てる湯を差上げるので我輩の方では飽くまでも此の  
 土地の利益を謀る量見です、然るに隣家の和田家では庭へ烟が来るから此の工  
 業を止めて呉れと言つて來ました、理屈を言へば此の地所は我輩の買つたもの、  
 工業は土地の爲めであるから一言の下に勿ね付けても構はないので、工業の盛  
 なる東京や大阪では烟の多くなるのを市民が悦ぶ位であるが、然し悲しい事に、  
 我輩は他國の者、和田家は土地の舊家であり、止めろと云はれれば理窟があつ

ても止めなければならん場合です、然し今此の工業を止めると皆さんに湯を振舞ふ事も出来ず我輩も非常の損を仕なければなりません、そこで皆さんは同じ土地の人であるから和田家へ款願して此の工業を止めないでも宜い様に願んで下さい」と巧言を弄して入浴者を一々和田家へ掛合に遣はしける、和田家にてはその若蠅に堪えず、況てや烟の来る事日に益々多く今は暑さに向ひながら障子を開く事も叶はぬ場合なれば家人一同協議の上、寧ろその事隣の家を地所ぐるみ悉皆買取らんと再び大山生へ談合しけるに、大山生は此ぞと付け込み、千や二千の端金で此の地所を賣り難し、買はんとすれば一万圓も割すべしと高を括つて容易に取合はす「烟の往く位はあろかの事なり、今度此へ火葬場を設けて死人の臭を嗅がせ申さん」と種々和田家を威しけるに、和田家にては始と限口し、遂に幾回も談判の末五千圓にてその地所を買取りぬ、大山生は大得意、金が無くなれば復た参ります、先づ當分は此金で名所見物でも致しませうと細烟女史と共に一旦此地を立出でけるが金さへあれば用は無しと金にて細烟女史を振捨てたり、捨てられたる細烟女史、今度こそ愈よ頼る人無く、取つて返して

奮友たる雲岳女史に泣付きぬ、

新婚旅行

細烟女史に泣付かれて雲岳女史もその煩累に堪えず、少し計りの金子を興へ、國へでも歸れど放ち遣りしが、雲岳女史心に思ふ様、斯る朋友に舞ひ込まれ和田家の人々に迷惑をかけなば遂には此身の不利益となり、未だお富嬢の爲めに幾分か信用を棄ざるを幸ひ今の内に此を離れて良人を他國に引出るゝ如かずと忽ち花婿へ談判を開く「いかに源吉、汝は文明國に新婚旅行ある知るか、新婚旅行とは結婚後夫婦の愛情を温めん爲め相携へて閑地に遊ぶ事なり、然れども今人多くその時機を誤つて結婚後直ちに遠地に遊ぶものあり、れ衛生法を知らざるの所爲にして結婚は婦人の心身を動亂せしむるにその動の未だ鎮まらざるや涼車に揺られ涼船に揺られ益々その身軀を刺戟せば多く人特有の疾病を醸す、故に新婚旅行は結婚後十数日の後を良しとす、今や妾宛も新婚旅行の好時機に際せり、殊に珍客のお富嬢最早此の近傍を遊覽し盡されば去て西に向はんと云ふ、是れ旅中の好伴侶なり、妾は汝を伴つてお富

と共に沿道の名跡を探らんと欲す、汝それ速に妾等が旅装を整へよ」と相談に  
 あらずして命令なり、良人の源吉は此の婦人に逆らふ程の勇氣無し、況して  
 富嬢と同行するは内々心に望む所、早速妻の意に従ひて旅の用意を整へぬ、丁  
 度富嬢も既に此地の滞留に倦みて新しき天地に入らんと心のあり、源吉夫婦  
 とも相談し「扱此先で観る處は先づ豊橋へ行つて豊川稻荷だの窟の觀音へ參詣  
 し、それから蒲郡の海水浴でも見物しませう」と富嬢の赴く處は源吉夫婦の  
 隨ふ所なり、雲岳女史遊心勃々として「然り、妾は富嬢に追隨して西は京都  
 大阪に遊び、嬢の故郷たる神戸兵庫須磨明石の如きは嬢の案内を累はし、それ  
 より瀬内戸の奇景を眺め、馬關より九州に入つて耶馬溪の勝、霧島の怪、本土  
 の風景を看盡しなば去つて我邦の新領土たる臺灣に赴かん、臺灣の新高山、富  
 士より高きと幾千尺、妾等乞ふ其山に登臨して遙に宇宙の大を眺め、深く生蕃  
 の境に入つて蕃民を文明に化せしめん、臺灣の遊覽終ば征帆直に清國に渡り、英  
 領印度に轉遊して遠くスエスの地峽を超え歐羅巴諸國を歴遊し、歸途に南北亞  
 米利加を見物せん、然れども歐米の諸國は我邦人の到る者多し、妾等はそれよ

り我邦人未到の地を探検して南亞米利加にてはペタゴニアの熱火國、或は亞非  
 利加の大沙漠を跋涉せん、いかに源吉、汝はよく妾と共に全世界を周遊し得る  
 や否や」と途方も無き新婚旅行、富嬢打笑ひ「それでは出掛ける時、嫁と  
 んでもお歸りの時はお婆さんにお成りでせう、マア兎も角も神戸までいらつ  
 しやるなら、彼方は妾が御案内申します」と歸る旅に出て行く旅、同行三人途  
 に和田の家を立出で、途中大櫛なる雲岳女史の實家に立寄り、それより舟にて  
 舞坂に至り、今は以前に引かへて一個の貴婦人に扮装したる雲岳女史、意氣揚  
 揚として其地の停車場に入りぬ「いかに源吉、妾等が爲めに上等の切符三枚を  
 求め來れ」富嬢「アラ妾は下等に仕ますから自分で買ひます」と中々奢らぬ  
 心なるを源吉もそれに賛成なり「上等なんぞと勿躰ない事だ、私達は何時でも  
 下等だよ」と質素は田舎の習ひなり、左れども承知せぬ雲岳女史「否、荷も地  
 方の豪族たる和田家の主人が下等源車に乗りて野人輩と伍すべけんや、乞ふ双  
 方の意見を折衷して中等の客車に入るとせん、汝速に切符を購ひ且つ行李を驛  
 夫に托せ」と獨り傲然として場内を睥睨す、

盗み乗

待つ事須臾にして列車は東より来りぬ、降る人に乗る人、互に先を争ふ中に、初めて中等切符を持ちたる雲岳女史は物馴れぬ身の容易に中等室を見出しかね「コラ驛夫ども、中等室は何處に在る」と前を過ぎける驛夫に問へど餘りその言葉の傲然たるより驛夫の耳に入りかねてや知らぬ顔して過ぎ行きぬ、お富嬢早くも中等室の戸を開き「此へお入りなさい」と源吉夫婦を誘ひて中等室に入りけるが、室内は客満ちて空席無し、中には荷物を前に置き戸口に立てる者もあり、雲岳女史眉を顰め「何ぞ中等室の難當此の如きや、中等室に乗りて究屈を忍ぶ程ならば空席ある下等室を擇に如かず、由來我邦の富増して中等旅客以前に倍従するに空車依然として中等室を増さざるは是れ當局者の怠慢にあらずや、妾は係官を執へて議論に及ばんと欲す」と頰膨らせて口小言、真人の源吉は妻を宥め「マア宜いから少し立つてお在よ、次の停車場へ往つたら少しは明くだらう」と同行三人究屈そうに立ち居たるが雲岳女史室内を見廻し「ア、之れをして泰西の文明國ならしめば斯の如き場合に男子立つて婦人に席を譲る、

きに我邦の男子は婦人に對してのサタンなり悪魔なり」と不平鬱勃として禁ずべからず、男子は立たねどお富嬢の前に坐を占めたる老婆がお富嬢のいとしげなる姿を哀れに思ひけん「貴嬢此へおかけなさいまし」と身を動かして席を開く、お富嬢は有難う御座いますと禮こそ言へど雲岳女史に遠慮して席に就かず「貴女おかけなさい」と一應の會釋をなしけるに雲岳女史は遠慮もせずドッコイシヨとかけ聲して大きな身軀を老婆の間に割り込みたり、老婆は失望、貴女ではありませんとも言へねば顔をまかめて雲岳女史を眺むれども女史は愈よ傲然として大力に任せウンと老婆を押付ける、老婆は板挟み「オ、苦しい」と泣かぬ計り、向側に坐せる男の一行が此軀を見てお富嬢を氣の毒に思ひ、傍に置きたる靴を下に御し、身を退りて席を開きしが先方が美人たけにお掛けなさいとも得言はず、態と腰掛の座など拂ひ早く掛けよと言はぬ計り、去りながら遠慮深きお富嬢は未だ進んで其席に就かざりしが此時劇て、乗組たる男あり、衣服は垢染み、髭は伸び、下等室にも多くは見かけぬ程ムサ苦しき姿なるが、乗り後れじと駆け来りけん、胸をドキ／＼させて息を切り、先づ室内をキコロ

キヨロ眺めて前に空席あるを見るや、傍人の状態を顧みるの違も無く、いきなり其席へ坐を占めたり、男の連中は大失望、追立て度くは思へども人相の怖らしきを見て何とも言はず、其中に叱咤の聲は雲岳女史の口より發したり「コジコラ、此は中等室だ、汝が輩の乗る所にあらざ」と言ふや否や不潔き男眼をむき出し「ナニ何だ、中等室だから乗つたのだ、中等室へ乗つて何が悪い」と突込む言葉の荒々しき、餘人ならば指をくはへて引込むべきが雲岳女史中々引込まず「汝の風采敢て中等室に適せざるなり、乞ふ先づ切符を示せ、汝果して中等の切符を所持するや否や」男「馬鹿を云へ、貴様は係官か、係官で無いものが何の権利で人の切符を改める」と容易に切符を示さねは後暗き事のある様子に雲岳女史大音に「係官で無くとも乗客は係官に告發するの権利がある、切符が下等ならば摘み出すぞ」と小鼻を擡けて怒鳴り立てたる勢ひには流石の男も辟易しけんフイと横を向いて何喰はぬ顔に車窓を眺める、此の大聲を聞つて戸口に來れる係官、先づ室内を眺めて忽ち今の男を怪み「モシ／＼貴客は中等切符ですか」男はモシ／＼「イニナニ」係官「下等切符なら此は中等です、

窟觀音

早くも降りなさい」と引立て行く、先に空席を開きたる男連は最早斟酌する違も無く「モシ貴様サアおかけなさい」と遂にお富嬢を席に着かしむ、源車は動き出しぬ、雲岳女史は先程より隣席の老婆を押付けて次第に席を開かしめしが老婆は押されてその先の人を押し、先の方は復たその隣人を押し、順押しに押し行きて雲岳女史遂に充分の席を占めたり、固より大兵肥満なる雲岳女史なれば自分獨りにて三人前程の坐席を領するに女史はそれを足れりせせざ尙ほも傍人を押し退けて我が傍に空席を開きしは流石に夫婦の情として良人を坐せしめん爲めなり「いかに源吉、汝は妾が側に來れ」源吉先生人の前も恥かしど小さくなりて女史が袖の下に隠れぬ、室内の客は皆な雲岳女史とお富嬢とに注目せり、不思議の道連、如何なる妙機か此の醜美二襟の兩婦人を連結せしぞと此の二人を見比ぶるも無聊を感むる一興なり、人に見られしとてそれを氣にかくる雲岳女史ならず、自分も亦た室内の客を一々睨め廻し「いかに源吉、汝は今此室内の人を見て我邦の進歩爾く速なるを覺らざるか、今より數年以前

さて中等室に乗る人は多く官吏輩か或は當世の紳士ののみ、然るに今は此室内多  
く商人紳の人を以て充たされたり、是れ我邦の富の近頃頗る増進せし徴なら  
ずや、昔は中等室に黒の山高帽子と黒の紋付羽織と洋服と八字髭とが饒かりし  
も今は縞の羽織の跋扈するを見る、是れ第一の新現象にして第二の新現象は婦  
人旅客の増加せし事なり、由來我邦の婦人は深聞に鎖ざられて旅行の如きは男  
子の事なりしに今や婦人の乗客日に多きを加ふ、是れ我邦に婦人勢力の増加す  
るを示すものにして妾の最も悦ぶ所なり第三の現象は上等室に邦人の乗客多し、  
昔は上等室常に外人の占領する所なりし、今や邦人外人相半す、是等の現象を  
仔細に點検して十年以前の社會と今日の社會とを比較せばその變遷實に驚くべ  
きものあらん、汝は妾に従つて學ぶものなり、學ぶとは獨り讀書論文のことな  
らず、社會の事物に注意して一々その真相を看破するが智識を蓄ふるの捷徑な  
り一と飛んだ所てお説法、源吉は中々腑に落ちず「爾うて無い、段々人が奢つ  
て來たのだ、見なさい、書生さんらしい人が二三人も乗つて居るが書生さんの  
癖に金時計をブラ下げて、金の指環を飾めて、ペラ／＼する絹物を着て、鱧皮

の鞆などを持つて居るが何うせ自分の稼ぎ出した金ではあるまい、親の腰を  
かぢりながらあんな奢つた風をする様では碌な者になれも仕まい、それにあの  
側に居る十二三の子供が巻烟草をフカして居るが嘸身軀に毒だらう、つまり斯  
う云ふ風になつたのは人が奢つて來たのだ」と田舎育ちの物堅さ、巨萬の富  
をし有なから中等涼車へ乗るさへも奢の沙汰と心得居るなり、雲岳女史躍起と  
なつて我説を説り「イヤ奢るは奢るべきの資力あればなり、資力無くして奢る  
者は産を破る、然れども今の奢るは資力ありて奢るなり、妾は世人の愈々益々  
奢り得るに至らんを希望す、源吉汝は汝の身の位地を知るか、汝の家は地方屈  
指の家なり、一たび貴族院議員に選ばれば華族と肩を並ぶべきもの、然ら  
ば汝は華族と同一の位地にあるなり、妾は華族の夫人に齊し、苟も華族に伍す  
べき身を以て自ら屈して中等涼車に乗る如きは是れ未だ奢りの足らざるもの、  
乞ふ豊橋以西の旅行には上等室も未だ以て我等の品位を保つに足らざれば別仕  
立の涼車に乗つて沿道の風色を遊覧せん」と何處まで増長するか程が知れず、  
折から富嶽窓外を指し「アラ彼處の山の上に大きな銅の像が見えます」源吉

「それは窟の観音様でせう、モ一豊橋へ来たと見える」雲岳女史と銅像を睥睨し「ナニあの観音めか」

豊橋名物

新婚旅行の和田夫婦は富嶽と共に瀛車を出で、豊橋市中の一旅店に入り、何事も發議者は雲岳女史「いかに富嶽、當地に於て観るべきは豊川稻荷に窟観音なり、観音を先にせんか、或は豊川に向はんか」と何より先に見物の相談、然るに富嶽は看る所俗流に異れり「それも宜う御座います此にはまた名物がありませう」雲岳女史「然らば三河萬歳か濃名納豆か」富嶽「イ、ニ爾ん物ではありませぬ、日清戦争に武名を顯はした當地の軍人で」雲岳女史「ナニ彼の佐藤鬼大佐が率ゐたる十八聯隊の謂か、然れども軍人は遊覽の料とならず、娘は練兵を觀んと欲するか」富嶽「イ、ニ爾うではありませぬが人の隣に佐藤大佐が聯隊長で居られた時分、大佐の奥襟始め佐官尉官の六人達でも決して絹布を被る事は無く立派な集會へも綿服で出なすつたと云ふ話し、爾うして見ると此の兵の強かつたのは平生の訓練の外に御家族方の氣風からして頼もし

がつた譯でせう、今は鬼大佐が無くともその頼もしい氣風が存して居ますか何うですか、軍人の家族が今でも綿服を被りますか何うですか、爾う云ふ事を見物し度いと思ふのです、モシ旅亭の櫻婢さん、此の近所に軍人の御家族が住んでお在ですか」と富嶽の眼中には軍人の家族を豊橋の一名物となすなり、旅亭の女も當地の名譽を心得顔に「ハイ住んで被在いますよ、随分澤山此の近所にもお在ですが直ぐ此の裏に竹林さんの奥襟とお子供が住んでお在です」富嶽「竹林さんとは」女「ソラ支那の戦で討死をなすつた大尉さんでよく家へも遊びにお在でした酒落とした面白い方でしたよ、爾して俠氣があつて人を助ける事が好きで兵隊さんにも誰にでもドン／＼御馳走なさる様な風ですから随分借金がありなすつて、お討死なすつた跡で澤山の御手當があ上から出たそうですお奥襟が矢つ張り旦那様の様な潔白な御氣象ですから手當でも何でも皆んな借金の方へ入れてお了ひなさるし、毎年の恩給とかも身には付ないでズン／＼借金を返しておいでなさいます、だから御自分はお暮しにも困つて、此裏に小さな家を借て人仕事なんぞをなすつてお在ですが、爾う云ふ



方ですから人が助けて遣らうと言つても決して唯は受けなさらぬし、引取つて世話をしやうと云ふ人があつても決して人の厄介にはならぬと被仰います、だから始終貧乏をなすつて可哀想な様な事もありませんがその坊ちゃんはまだ十二三ですけれどもそれは、親孝行で成心ですよ、小學校でも始終一日遊ぶに一度も二番へ下らないと云ふ位何でもよく出来なそうですが毎に軍人になつて魯西亞へ戦に行くのだと爾う言つてお在です、それをまた奥様がお叱りもなされないで貧乏な中から近所の子供にも菓子なんぞを買つてお遣りなすつて家の坊ちゃんを相撲を取らせたり、叩き合ひをさせたり、坊ちゃんのお心で優しい所は大層坊ちゃんを優しくなさるかと思ふと殿しい時には無理な事を被仰つても可哀想に坊ちゃんを寒中でも毎朝井戸端で水を浴せられるのですそれで用がある五里も十里もある處へ獨りで坊ちゃんを使ひにお遣りなすつたり、闇の晩の夜中過ぎに亡父さんのお墓参りをさせたり、外の人なら大人

にもさせられない様な難題をおさせなさいますからあの坊ちゃんを可愛く無いかと思ふと三度の食事なんぞは自分が何にも食べないで坊ちゃんに牛乳を飲ませたり牛肉を買つて遣つたり色々な御馳走をなさいますよ」と用事を止めて人の噂、扱は當年の氣風尙ほ存せり、聞くも味かしとお富嬢「そのお家は何處です」櫻婢「直ぐ裏で障子を開ければ此からも見えます、ソラ奥様が今水を汲みにお出なさいました」お富嬢差覗き「あのお方ですか、マア美しい」櫻婢「二、豊橋一番の別荘ですよ」

游 泳 術

歳は未だ三十を超えざるべし、花の如き芳顔尙ほ春色の輝媚たるを存すれども縁の髪を惜氣も無く截つて下げ、身には垢染たる粗服を纏ひ、昔は習はぬ下司の業、手桶を携へ井の端に赴きて水汲む様は哀れさは是こそ日海戦争に敗度の武功を顯はして遂に花々しく討死せし竹林大尉の未亡人かと思へば觀る者送るに涙を催しぬ、斯る所へ表より一散に駆け来りし十二三の少年「阿母様、今僕が汲みませう、阿母様は家へお入りなさい、今僕が水を汲んで持つて往き

「和郎はまた爾んな事を言つて歸つて来る、家の事は構はないでも宜いから、好  
な事を仕て遊んでおいで、今迄何を仕て居たえ、相撲でも取つて居たか、それ  
とも木登りでも仕て居たか、ナニ外の子供は豊川へ泳ぎに往つたけれど阿母  
様は案じると思つて往かなかつた、それは心得が違ひます、外の家では子供  
が川へでも往くと叱るけれども妾は決して叱りません、泳ぎは人の心得べきも  
の、殊に軍人たるべきものは何處の川でも泳ぎ越さなければならん事がある、  
此の島國へ生れて泳ぎを知らんのは足があつても歩く事か出来ない様なものだ、  
全休なら月謝を出して游泳術の先生に附けたいけれども今は歸らなればならぬ  
ら勝手に川へ往つて泳ぎの稽古をするが宜い、もしも泳ぎ損なつて溺れて死ん  
だらそれまでだ、爾んな子なら惜くしも無い、泳ぎを覚えぬなら外の子供に  
負けてはならん、人が一町泳いだら自分は二町泳ぐが宜い、阿母さんは決し  
て爾んな事を案じないから早く往つて泳ぎなさい、唯お城の櫓下は水が濁る巻  
いて險むだから彼處へは往かぬが宜い」と矢張り案じる我子の身の上、是こそ

深い慈悲にやあるらん、子供は去るを肯んぜず「イ、エ阿母様、僕は泳ぎを知  
らないのではありません、泳ぐ事にかけては此の近所の子供なんぞに一度も負  
はしません、モ、今にお晝飯、阿母様がまたお忙しいお裁縫の暇に水を汲ん  
だり臺所をなすつたり、今日は日曜日僕が居るから餘計な御用もあると思つ  
て御手傳をする積りです、サア水を汲ますからその手桶をお出しなさい」と頼  
み少き親と子が互に案じ案じられる心の中を奥ゆかし、母は態と聲勵ませ「そ  
れだから妾が不斷和郎に云つて置くてはなにか、何んな事があつても家の事に  
構ふのては無い、阿母さんが何を仕やうと爾んな事を氣に留めるては無い、和  
郎は自分の事さへよく仕て居て今に立派な軍人になれば宜いのだとあれ、妾が  
爾う言つたてはなにか、水を汲むのは運動の爲めだよ、坐つて計り居ると身軀  
に毒だから運動に水を汲むのだよ」子供は物悲し氣に「それでも阿母様は昨夕  
二時頃迄夜業をなすつて今朝は五時前にお起きなすつた、お仕事が済んだらお  
午睡でもなさいますし」母「餘計な事を言ひだ、午睡なんぞは腐つた人間のす  
る事だ、一晩や二晩寝ないでも午睡なんぞをする妾ては無い、サアそれでは御

飯にするから跡で泳ぎに往つて来るが宜い、ドシ／＼水へても入つてモット色が黒くならなくつては不可い、和郎は男の癖に色が餘り白いから懦弱に見えて仕様が無い」と此母は我子の色の白きが氣に入らぬなり、子供も同じ心「僕は戸外に計り出て居ても些つとも日にやけないの、曩日も町の子供がお白粉をつけるかなんぞとからかつたから僕は擲つて遣つた、是から顔へ鍋墨でも塗らうか知らん」と睦まじさうに語らひながら左右より片手づゝ手桶を提げて家に入る、旅亭の樓上より此の光景を眺めて居たるお富嬢、ホット息して感慨に沈みぬ、

餡ころ餅

旅亭の樓上よりは復た他の家も見透せるなり、是は軍人に隣れる家にて今や下女が家の子を連れて戻りけん母らしき人の仰々しき口小言「コレヤ和郎は何處へ往つて居たのだえ、ナニ豊川へ泳ぎに往つたと、マア飛んでも無い、落ちて死んだら何うする、モ一／＼決して爾んな處へ往くのではありません、毎年彼處では人が死ぬよ、爾んな險呑な處へ行くとお灸を點えます、爾うして川へな

んぞ入ると風邪を冒いたり、熱病を疾んだりするよ和郎は川へ入つたかえ、ナニ少し入つたど、道理で顔の色が悪い様だ、早くお醫者を呼んで来るが宜い、ナニ何うも仕ないから遊びに行くと、モ一戸外へ出ては不可ません、和郎は戸外へ計り出て居るから御覽な日にやけたことを、鼻の頭が紅くなつて居ると、今夜お湯に入つたら油薬でも塗つて置くが宜い、オヤ／＼手の先へ疵が出来た子、何うしたのだえ、ナニお隣の子と劍術の真似をして打たれたのだと、何故爾んな事をするのだ、お隣の子は亂暴で仕様が無い、何ぞと云ふと劍術を使つたり相撲を取つたり、怪我でも仕たら何うすると思ふ、決してあんな子と遊びなさんな、今朝も見て居たら表で騒つことを仕て居たではないか、ナニあの時、んで膝をすりむいたと、マア危い、早く爾う云へば宜いのに、コレお見せ、薬でも貼つて置くから、オ一／＼血が潤んで痛そうだと、痛いかえ、モ一痛くないと、強い子、和郎は、モ一／＼是に懲りて戸外へ遊びに行くのではありません、サア此のお菓子を進げるからとなくして家にお在よ、是は餡ころ餅の大きいのだ、美味いだらう、サアモ一一つ進げるから外へ往くのではない

よ、オヤモイ喰べて了つたのかえ、ナニモイ一つも呉れど、爾んなに喰べると  
 阿父さんに叱られますからもつと後に進げやう、お亭午過ぎに、ナニモツと  
 喰べ度いと、それならモイ一つだけだよ、是れつ切りだよ、サア是を喰べたり  
 そこにちやいと坐つてお在、和郎がおとなしくして家に居るとまた阿父さん  
 から御褒美が出るよ、御褒美には何が好い、お汁粉かえ、お菓子かえ、ナニ  
 今の餠ころ餅をモイ一つも呉れど、モイ爾んなにはありませんよ、是はあ八つ  
 のお茶菓子に存つて置くの、ナニ爾んなら戸外へ往くと、仕様が無い、で  
 はキントにモイ是れつ切りだよ、爾んな大きな餅を四つも喰べると跡で御飯が  
 喰べられないよ、オヤ一口に喰べて了つた、マア早いこと、ナニモイ一つも  
 呉れど、爾んなに喰べると毒だよ、それでは今度こそモイ一つ切りだよ、何と  
 云つても是より餘計は進げないよ、それを喰べて了つたら書籍でも復習ひ、  
 ニ復習ふからモイ一つだよ、幾個喰べれば宜いのだよ、それでは阿母さんの公  
 を一つ進げるから乾度復習ふのだよ、サア此の小さいのにおし、大きいのは進  
 びますよ、此の餠ころ餅は一つ一錢宛だから並のより四つがけもあるよ、ナニ

喰べる序にモイ一つも呉れど、イ、ニモイ通りさん、さ、何と云つても進  
 られません、コレも三や、そのお菓子皿を戸棚へ納つてお置き、何故爾んなも  
 のを此へ出したのだのう「下女」それでも御新造さんがおちやんに進げると言  
 つて御分でも出しますつたのです」母「では是を御新造として一つだけだよ、  
 サア早く戸棚へお入れ、ナニ納ふ位なら二つも呉れど、一つで満足なら、ニ  
 ンお泣きでないよ、二つ進げるから」と腕白息子に甘き親、子を受取るの心は  
 世間誰しも異らぬと愛するの道は千差万別、お富嬢はえす、と笑ひ口、

子の養育

此時お富嬢眼を轉じて再び竹林家の様子を見れば今の親子が膳に對して「さし  
 そうに食事をなす」虎五郎や、此の牛肉は昨夕和郎が殘したのだから喰べて  
 了ひ」と母は我子に滋味を興へんとす、子供は却て母に譲り「イ、ニ阿母様  
 食りなさい、僕はモイ要りません」母「妾は喰べ度くないから和郎を喰べ、牛  
 肉でも喰べて身軀に肥料を施けて置かないと強健な者になれないから構はず  
 食りよ」子供「だつても僕は昨夕澤山喰べましたもの、跡は阿母様がお食りな

さる様にも思つて残したのです、阿母様は些つとも召上らないではありませんか「母「イヤ、エ妾は喰へましたよ」子供「アラ嘘です、些つとも減つては居ません、阿母様だつて身軀の強健になる様に牛乳だの牛肉だの召上つたら宜いでせうが僕はそんなものを喰べないでも此通り強健ですが阿母様こそ弱いでありませんか」母「妾は弱くつても何うでも構はないから唯和郎を早く大きくして立派な軍人に仕立て度い、阿父様が被在れば和郎の身軀へ充分に資本をかけて色々なことを覚えさせることも出来やうが女の手一つでは思ふ様にならない事計りだ、和郎は今度臆病さんの家に遊びに往つたら彼處の乗馬を借りて馬術の稽古をして御覽、軍人は馬に乗る事が上手で無いと困るから遊戯でも何でも宜い馬があつたら乗つて御覽」子供「僕は田舎の裸馬へ幾度も乗りました、近在の子供がよく乗つて居るからそれを借りて乗つた事があります、是から泳ぎに往くの止して臆病さんの處へ往つて見ませうか」母「あ、往つて御覽、妾が過日あの人にも頼んで置いたから」子供は何事か想ひ出し「だけれども厭だなあ、僕は毎日彼處の子と學校で喧嘩を仕ましたもの」母「喧嘩を仕たつて宜い

てはないか、仲直りをすれば済んで了ふ」子供「それが唯の喧嘩では無いのですもの、僕が何時でも一番になつて彼處の子の上に坐るから何かあると僕の事を悪く云ふが曩日もお辨當を喰べて居たら僕の辨當箱を覗いて「ヤア君の副食物は何時でも牛肉だな、不潔い衣服を着て居ても副食物だけは奢つて居らあ、だから君の家は貧乏するのだ、君の家は米屋にも薪屋にも借金があるそうだが」と失敬な事を言ふから僕が怒つて遣つたのです、だけれども阿母様、僕はモ一牛肉の副食物なんぞは止しますよ」と子供心にも内に懸念する事あり、母は胸中の苦を抑へ、「和郎は食物の事なんぞを彼是言ふのではありません、妾が食べると云ふものを黙つて喰べれば宜いのです」と我子に内事を知らせ度く無し、折から勝手口より入り來れる米屋の男「ハイお米を持って参りました」未亡人心配顔に立出て、「ハイ大きに御苦勞」米屋「何うか今日は先日の分と一緒に悉皆お拂ひを頂戴し度いもので」未亡人は劇てし言葉「ハイ、今進げますよ、虎五郎や、御飯を食べたら戶外へ遊びに往つておいて」と我子の耳には入れじと思ふ、米屋は人の胸中を知らず「エト先日の分が一圓づゝ二度で今日の分が

一圓と外に糠が三錢五厘「未亡人」「ハイノ、分りましたよ、虎五郎や豊川へても臆病さんの處へでも往つておいて」と頻に我子を慰立つれば子供は一旦家を出てしが氣になると見えて復た立ち戻り裏口へ廻りて機子を窺ふ、未亡人は我子の居らぬに心を安め「ア、何卒斯んな處をこの子に見せ度く無いものだ」と言ひつゝ立つて箆筒より女帯一筋を取り出し來り「モシ米屋さん今も拂ひを進げるのだが子、生憎も鳥目が無いから和郎さんの才覚で是れを質屋とかへ持つて往つてお金にしては呉れまいか」米屋「へい是は唐織子の丸帯で、是なら五六圓は貸しませう、丁度私の知つた質屋がありますから」と意を領して風呂敷に包み、其儘勝手口より出て行かんとしければ、此様子を立聽せる虎五郎、怒氣憤然として道の中央に立塞がり「ヤア米屋待て」

帯の代

子供ながらも虎五郎、怒れる眼にてハツタと睨め「コラ米屋、貴様は何て阿母様の帯を持つて行く、それを持つて行つてはならん、阿母様にお返し申せ」と聲も鋭く叱り付くれど米屋の男は子供と見て輕蔑し「是はお預り申したのです、

貴郎の阿母様に頼まれて是から質屋へ持つて行くのです、之を持つて行かないとお拂ひが取れません、お氣の毒さま」と言捨て、サツサと行き過ぎんとするに虎五郎其袖を執へ「待て、お拂ひが取れんと云ふなら僕の帯を代りに持つて行け、それは阿母様の餘所行の帯だ、前には澤山あつたけれども今では皆んな無くなつて了つてそれ一本しきや無いのだそれを持つて行くと阿母様が餘所へ行く事も出来ない、サアそれを返して此の帯を持つて行け」と我が帯を解きかけんとす、米屋は打笑ひ「アハ、坊ちゃんのは本綿のヘコ帯、子錢の足しにもなりません」と對手にせず、虎五郎大に怒り「此の野郎、人が是程頼むのに聞かないとは不埒な奴だ、サア此前を一步も通さんぞ、通り度ければ腕力で通れ」と大手を廣げて立塞がる、近邊に遊び居たる子供達五六人、此跡を見て駆け來り「虎さん何だ」虎五郎「今此の野郎が阿母様の帯を持つて行くから通せんぼうをするのだ、皆んな整列して道を塞げろ」と子供仲間の餓鬼大將口頃の遊びも兵式隊操の真似事をなせば外の子供も聲に應じて一文字に整列し通さじものと意氣組みたり、對手が子供だけに米屋の男も亂暴する譯にもならざ」

ちゃん、そんな事を言はないでお通しなさい、今にお菓子を持って来て進げずから」と一時通れの口上も甘言に欺かる、虎五郎ならず「帯さへ置いて行けば通して送る、左も無ければ此列は切らせんぞ」と隊列の固め愈よ堅し、此時旅亭の方より出で来れる一佳人、米屋の男の側へ寄り「モシ、米屋さん、今ここで聞いて居たら竹林さんの奥さんが帯を何うかなさると云ふ事、質屋へでも持つて行くのなら直段は高く買ひますから妾に譲つては下さるまいか」と突然言出されて米屋も驚ろきしが斯る場合故丁度幸ひと「それはナニ奥様に申し上げたら譲りにならん事もありますまい、質屋に入れたつて何うせ跡から出すのでは無し、流して了へば質屋よりも損ですから」とイヤに見くびりての挨拶、兎も角も一應奥様に相談せんと再び家に入りて忽ち出で来り「今奥様に申上げたところが、悪い帯でも望み人があるなら譲つて進げても宜いとの事、失禮ながら此帯ですが代價は何程下さいませ」と風呂敷包を解きかける、佳人は之を制し「イ、エ、品物は見ないでも宜う御座います、そこで代金は和郎さんに進げられませんか、モシ、竹林さんの御子息さん、貴郎に此の金子をお渡し

申しますから帯の代だと言つて阿母様にお進げなすつて下さい、そして此の帯も今は持つて行く譯に参りません、二三日内に取りに来ますからそれまでお家へ預かつて置いて下さい」と男より帯を受取りて虎五郎に渡し、別に金子の包をも渡しぬ、米屋は其金包を眺めて上に金三百圓と記したるに驚き「ナニ三百圓、正味三百圓あるのですか、此んな帯を三百圓に、何うしてマア」と不審顔、佳人打笑ひ「帯の品物は好いか悪いか知りませんが、世の龜鑑ともなるべき軍人の奥方、そのお方のおしめなすつた帯だと思へば三百圓も安い物、モシ切ちやん、よくその譯をお話しなすつて阿母様にその金子をお進げなさいませよ」と少年に我意を諒せしむ、虎五郎も子供ながら人の厚意の深きを知り默然として唯暗涙を流す、米屋は頓驚な聲出して「へいあんな帯が三百圓なら羽織が五百圓で衣服が八百圓か、千や二千の金は何でも無いから奥様に勧めてドシドシ何かを賣らせるのだ」と仰々しく家に飛込む、子供も讀いて母の前に至り、その暇に今の佳人は何處とも無く立去りぬ、

何處の人

世には義侠の人もあり、我が古帯を三百圓に買ふとは我を助くる心、殊には我身の行ひを知りて帯の價は人の價と溢美の言葉は身に餘れども珠も礫も判じ得ぬ今の人には珍らしき見識、こは必ず尋常一様の婦人にはおらざるべしと竹林大尉の未亡人は我子や米屋の物語を聞きて感激に堪えず「してその方は表に被在るかま」虎五郎戸外を覗き「イ、エモ一居ません」母「それでは何處に居る人で何と云ふ名前だえ」虎五郎「ツヒそれは聞きませんでした」母「和郎も無念ではないか、爾う云ふ時には先の人の名を聞いて置くものだ、然し向ふでは隠徳を施す積りで態と黙つて居たのかも知れないが兎も角も是非その方にお口にかゝり度い、モシ米屋さん、和郎さんはその方を知りませんか」米屋の男「イ、ニ存じません、始めて逢つた人ですから何處の者だか分かりませんが服装や言葉の様子では此土地の人ではありますまい多分旅の者でせう、第一此の土地にあんな美しくい娘さんがあれば顔を見ないでも評判で知れますけれども此の土地で評判の別嬪と言つたら失禮ながら貴女より外にはありません、イニ本統で御座います、お若い時から此土地一番の別嬪でいらした方が今にな

つても貴女の側へ追付くものが御座いませぬ、その御容色を持ちながら斯うやつて何時までもお獨りでいらつしやるのは惜しいものでありませんか、土地の企満家だの立派な人達が貴女を賞ひ度いと言つて今迄幾人愛身を遂したか知れませんが爾んな事を言出すと貴女がお怒りなさるし、中には貴女に失禮な事を言つて短銃を向けられた人もあると云ふ位で、貴女の事を恐れて居ますから迂つかりとも言ひ出されませんがもしも貴女がお嫁に行くことへ被仰れば何んな處へでもお世話申します、實は貴女の事を私に頼んで居る人が八八、六十四人はど御座いますので、エヘ、是はしたり、御立腹は御免蒙りませう、貴女は女の癖にイザと云ふと短銃なんぞをお持出しなさるから怖くつてなりませぬ、ナニ今の人のお事ですか、ハイ、お話しが臨へ外れて了つてきつかけを忘れさせましたが、オ一爾うだつて、今の娘さんと三つたらそれは、大變な別嬪で、貴女どころでは御座いませぬ、イニナニ貴女と並べても愧かしく無い程の別嬪で此土地けおるか、近國にも聞いた事がありません、別嬪で金持で帯一本に三百圓も出さうと云ふ勢ひですから大したものですよ、モ一斯うなれば貴女も映して



お困りなさる事はありません今度は羽織を五百圓位に衣服を八百圓位に其外の品物もドシ／＼お賣りなすつて銀行でもお建てなさい、帯だつて古着屋から澤山買ひ込んで是非自分かじめたのだ、彼も自分が持つたのだと幾本でも賣られます、斯んな好い商法はありません」とくだらぬお饒舌を遮る未亡人「旗の方であれば旗亭へでも聞合せて知れん事はあるまい、和郎さん御苦労だが一つ旗亭を探しては呉れまいか」米屋「ハイ畏りました、今度はモット上等の帯がありますから」と未亡人、「餘計な事を言ふのではありません、斯う／＼云ふ方が泊つて被在るか何うかと聞いて、知れたら直ぐに知らせて呉れ」と米屋の男を出だし通りしに忽ちにして歸り来り「奥様、真ぐ知れました、ナニ向ふの旅亭に泊つて居る人ですとさ」未亡人「それは宜かつた、爾して今はお在るか」米屋「イ、ニ、今は豊川様へ御参詣にいでなすつたさうで」未亡人「それならば後程に伺はう」と身支度して歸りを待ちぬ、

巡查問題

豊橋と豊川の間今は流車の通ずるあり、雲岳女史夫婦とお富嬢、今豊橋より来

りて豊川稻荷の門前にあり「いかにお富嬢、嬢は此の門扉の如く木を見ずや、是れ天下の珍品にして左右共に一枚板なり、其外門外の石塀は寒水石、門と塀と相俟つて輪奐人を驚かしむ、知らず此の稻荷明神、いかなる神徳あつて爾く隣を極むるや」と傲然として突立ちたり、側に居たる真人の源吉、妻の横柄なるは神靈に對して恐れありと「和女は直きに神様や佛様の事を悪く言つて困ります、此の豊川様はの、盗難に逢つた者が信心を籠めて願をかければその品物が屹度出て来る、それは／＼荒たかな神様だ」と語る様子さへ、然し、雲岳女史大口開ひて打笑ひ「阿々、然らば警察の神か、語を寄す東京の警視廳、目下巡查の欠乏に苦むと聞けば何ぞ稻荷明神を警部に採用してその子分を巡查となさるや、由来今日の巡查に乏しきは巡查の地位の低きが爲めなり、外國の如きはよく巡查に百圓以上の月給を與へ、その職は人の名譽視する所にして社會も亦た之を尊敬す、然るに我邦の巡查、その勤務は外國の者より甚しき苦痛ありてその報酬は車夫馬丁の上に出でず、任重くして地位低し、社會の之を遇する事も外國の如く厚からず、今や我邦の富増して人の價も物と共に高まりしに

巡査の地位のみ獨り依然として憐れむべき境遇にあるは妾の深く慨嘆に堪えざる所なり、此の稻荷明神、いかなる保護を人民に與へて斯の如きの盛況を極むるや明神果して贖品捕獲の技倆あらば請ふ此の稻荷を警視廳に移し、稻荷に養するの金圓を以て巡査の勞に酬ゆべし、人民は巡査に保護さるゝ事を好んでその保護に願ふ所以を知らず、常に地方税を吝んで警察費を削減しながら、何の餘裕ありて獨り稻荷を富ましむるぞ、妾は此の稻荷に對して巡査の地位の低きを憐れまざるばならず」と口に泡を吹いて大議論を始めんとする時、横原より雲岳女史へトツと突當りたる男あり、その男の去りし後、雲岳女史心付きて帯の間を探りしに何時の間にか紙入を失へり、「嗚々、今のは偷見にてありしよな、妾は袋中物を失へり」と背くなつて慄き出す、良人の源吉念よ懼れ「ソラ御覽、和女が神様の事を悪く言つたから直ぐ口が當つたのだ、早く神様にも説を申すが宜い」雲岳女史不平紛々として「罰とは何の罰ぞ、神に違あらば門前偷見を棲ましめざるべきに、自盡葬送をして横行せしむ、是れ果して何の神罰ぞ」源吉「サアそこだテ、取られたものを返る様に」と願ひ申せば御利益があるのだ、

己も禱つて還るから和女も参りよ、南無正一位稻荷大明神様、何卒袋中物を出ます様に」と頻に所念する程も無く、後ろより巡査の聲「モン貴女方は拘捕に袋中物を取られではありませんか、今その拘捕を執へましたが此の紙入は貴女のでせう」と雲岳女史に袋中物を示す、雲岳女史が「然り妾の物なり、多謝々々」と言ふ側から良人の源吉念よ恭敬の様子にて「モト出たかえ、ソラ御覽な、神様の御利益は此の通りだ、今願つた計りでモト直ぐに出るのだもの」雲岳女史「否、神の利益にあらず、警官の功勞なり、警官の功勞こそ斯の如くそれ顯著なるに人は何を以て獨り神徳を稱するや、妾はもし警察費削減説を唱ふる者に逢はば先づ稻荷廢止論を説かんと欲す」と押問答して門内に入る、先に立ちたるも富娘「モン御覽なさい、あの太鼓の大きいこと」雲岳女史「打てば一里に響くものなり、願くはその鼓を鳴らして巡査問題を世人の耳に入らしめん」

願ひ事

稻荷に養する善男善女、本堂の前に禮拜して願ふ事は千差萬別「南無稻荷大明

神様、妾の亭主は浮氣で仕様がありませんから何卒浮氣の止みます様に」と因ふは誰の妻にやあらん「家の嫁は妾を邪魔に致しますから何卒妾があの嫁を嫌つて早く退出して呉れます様に」と禱るは愚痴らしき老母なりけり、身の丈六尺に餘り大兵肥満の相撲取りも神に對しては身軀を小さくし「何卒今度の本場所には十日が間勝通ほします様に」と是は殊勝の心掛、續いて来るは藝妓なんめり「ちよいとお稻荷様、今度の場所へ廣めをしましたら何卒お客が澤山ついで毎日ドン／＼御座敷があつて、お金が儲かつて、面白い事があつて、お下りの長い大盡か何かい大びらに身受をして呉れて、衣服を澤山拵へて呉れて、小遣を澤山溜めさせて呉れて、そして立派な待合かなんか出させて呉れて、一月も立たない内に厭きて呉れて、手切金の千圓も呉れて、待合はそのまゝ此方のものになつて、好い人を家へ引張り込んでも何如までも繁昌します様に」と是は近頃勝手な願ひ、其次へ入り來りし老人は賽銭を投げて拍手をうち「何卒御利益を以ちましてお嬢様に早くお目にかかれませう様に」と丹誠を凝らして祈りけるがフト彼方を眺めて走り出で「モシ／＼お嬢様」とお富嬢を呼留めたり、

振返るお富嬢「オヤ是は、小曾木野小路當九郎左右衛門さんか、何うして此へ老人へ好い所でお目にかかりました、實は三河屋の大旦那が急病で是非貴嬢に逢ひ度いと被仰いますからまだ舞坂迄に被在る事と思つて舞坂へ電報をかきませうとしましたところへ丁度貴嬢のお手紙が届きまして舞坂の方へいであげますと知れましたから、それではモシ先の處をお立ちなすつた時分故電報をかけるにも先が分らない、寧ろ豊橋へ行つてお尋ね申したら何處かでお目にかかれるだらうと文吉様ども御相談申して早速豊橋まで遣つて参り、旅亭を一々問合せましたら此方へお出で分りまして、それから此へ参りました、斯うやつて直ぐお目にかかれませうの矢つ張り神様の御利益で御座います、有難い事です」と老人は兎角御利益を説く、雲岳女史それが氣に入らず「否偶然のみ」と口を出す、お富嬢は心に染まぬ叔父ながら病氣を聞きては氣にかゝり「そして叔父さんは何んな御病氣がお出なすつたのだか」老人「先づ申さば軽い卒中の様な御容態で、御醫者の話しにも餘り御酒が過ぎた爲めだと云ふ事です、御自分にはモシ駄目だとお諦めなすつて、それに就てはたつた一人の姪だから是非死

ぬ前に一目逢ひ度い、向ふでも外に親類の無い身の上、色々相談も仕度い事があるど頼に貴嬢を待つていらつしやいますから私と御一緒に直ぐ神戸へ御歸り遊ばせ」と期せぬ處に事起るなり、お富嬢も心安からず「それでは早く行かなければなるまい、實は此の豊橋近在に妾の阿父さんのお出なすつた村があるど云ふ事だから、緩々其處をも尋ね様と思つたが叔父さんの御病氣では爾うしても居られない、それでは雲岳女史や源吉さん、今此でお別れ申すのはお名残惜い譯ですがお聞きの通りの次第ですから妾は直ぐに神戸へ参ります、貴郎方も處々御見物なすつた末神戸までおいでになつたら先づ寶田文吉と云ふ者をお尋ねなすつて妾の事をお聞きなすつて下さい、妾は今自分の家はありませんけれども其處でお聞きなされば居所が分りますから」と和田の夫婦に別れを告げ、老人と共に一旦豊橋の旅亭に歸りしが瀛車出發の時刻迫りし故行李匆々停車場に赴きぬ、その跡へ尋ね來りし竹林未亡人はお富嬢の出發を聞きていかに本意無く思ひけん、

叔父の病

世中は三日見ぬ間に進歩する、去年神戸を出でし身の今や再び故郷へ來て見れば、流石に名代の開港場、日に月に開け行き、僅か一年餘の間にも市中の面目さへ改まりしが殊に際立ちて變りしは叔父なる三河屋の家なりけり、是も從兄の文吉が我が父に似たる氣象もて儲け出したる兆ならんが今では神戸第一の見世橋へ、外より見たる所にては巨万の富を累ねしと思はれぬ、何さま人の慶事は我身の悦び、之に過ぎたる幸あらじとお富嬢家に入りて叔母や從兄に會ひけるが、待ち兼ね居たる叔父の文藏、早速お富を病床に呼び、病苦を忍んで種々の物語り、元來此の文藏は嬢の父なる儀左衛門と血肉を分けたる兄弟なれど兄とは違ひ卑劣な根性、若い時には儀左衛門に毎度迷惑をかけたれど一人息子の文吉が世に勝れたる器量人にて多くの財を儲けしより今は安樂な隠居の上、殊には積る年波と病の爲に氣も挫け、昔の根性も消失せて優し氣なる心となり、一人の姪のお富嬢が行末をのみ打案じ「時にお富や、私はモ一駄目だよ、酒で壊した身軀だから直さうと思つても癒らない、然し悴はあの通り私と違つて確りした人間だし、私も悴のお蔭で今迄随分樂も仕たからモ一決して此世に思ひ